

---

# ものぐさな賢者

クロコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ものぐさな賢者

### 【NZコード】

N6788X

### 【作者名】

クロロ

### 【あらすじ】

『龍玉』。それは人族やエルフ族、獣人族など様々な種族が住む、龍神が創つたとされる世界。オクトはその世界で『混ぜモノ』と呼ばれる忌み嫌われた存在だった。

異世界だけど前世の知識を持つオクトが、その知識を使って平穏に生きる為に努力する話です。

## 序章

「いやああああああああ」

甲高い叫び声を聞いて、私の意識は覚醒した。

その声は何処までも悲痛で、ただただ悲しいと訴える。この声が聞こえるまではずつと私の意識はふわふわとしていて、まるで夢を見ているようだった。頭は霞がかり、苦しみも悲しみもなにもなかつた為、こんな激しい感情が生まれたのは初めてだった。……いや、本当に初めてか？

以前もこんな感じで絶望した事なかつただろうか。一気にその声に引っ張られる形で目が覚めた私は、色々な事を忘れてしまっている気がして混乱した。

そもそもここは何処で、自分は 。

「オクト、どうしたんだ?!」

部屋の中へ、黒髪の男の子が飛び込んできた。

ああ、そうだ。彼は自分の兄のような存在のクロだ。そして自分は、オクトだ。

「オクト。だいじょうぶか？オクト、しつかりしる。オクトっ！…」

クロに肩を掴まれ揺さぶられると、悲痛な悲鳴は止まった。……違う。悲鳴の出所は、自分だ。止まつたんじゃなく、止めたのだ。

「ク、クロッ！」

ぶわっと浮かぶ涙の所為で、クロの顔が歪んだ。

さつきまで確かに苦しみも悲しみもない世界にいたのに、今は寂しくて仕方がなかった。感情の赴くままに小さなクロの体にしがみつぐ。それでもしなければ、自分が壊れてしまいそうだった。

「クロ……クロッ……クロオオオ……」

「いつからオレの名前言えるよ！」……。そんなことより、どうだよ。そんなに泣いて」

分からぬ。

ただ悲しくて、悲しくて仕方がなかつた。軽いパニックを起こしている私には、ただ泣くことしかできなかつた。

「ノエルさんはどこ」いつたんだよ。オクトがこんなたいへんなのにノエルさん……。

ふとそれが、自分の母親を示す名前だと分かつた。それと同時に、何故こんなに悲しいのか思い出す。ふわふわと眠っていたはずなのに、自分の中にひやんと答えが詰まつっていた。

「クロッ……。やめたの。ママがきえたの」

それは自分を捨てたとか、そういう意味ではない。文字通りこの世から消えたのだ。もう一度と会う事はない。それを本能的に私は知つていた。

「クロッ、クロッ……あああああああっ！――

苦しくて、悲しくて、寂しくて。それが痛くて仕方がない。背中をさするクロにしがみつき、力の限り泣き続けた。

いつもして私は母親の死と引き換えて、この世界に産まれ落ちた。

## 1・1話 現状把握中の異世界人？

この世界は、龍神が作られた世界だ。名前を『龍玉』と呼ぶ。意味は龍の宝……まんまだ。

そしてこの世界はいまだにそんな神話が生きており、生き神が住んでいるらしい。らしいというのは、一般庶民は神様にあう事が出来ないからだ。会えるのは王族のみ。一般庶民がもしも願い事があるならば、神殿に行く必要があるそうだ。

自分という意識がはつきりしてから、私はずっと情報を求めた。そうでなければ狂ってしまいそうなほどに私は混乱し、知識に飢えていた。そしてさまざまな情報を聞いていくうちに自分の中にある仮定ができた。

「私って、もしかして前世が異世界人なんじゃ……？」

確かに私にはオクトとしての数年間の記憶はある。母親と一緒に旅芸人の一座に身を置いており、時折見世物として舞台に立ち歌つたりしていた。夢見心地で少し頼りない記憶だが、間違いなく自分のものだ。

それと一緒に、今は別の記憶が私には存在した。その記憶の持ち主がどんな人物だったのかは分からぬけれど、オクトでは知りえない膨大な記憶で、私の人格は確かにその記憶とともに形成されているように思う。逆にいえばオクトの記憶だけでは人格形成が出来ると思えないほど、経験も知識も何も詰まつていなかつた。

オクトではない方の記憶では『日本』と呼ばれた国に住んでいた。子供は皆学校へ通うようで、私もまたそこに通っていたらしい。この世界ではほとんどの国が、金と才能がなければ学校に通えないのだから、そこからまず大きな違いだ。また日本ではあまり宗教は信

じられていなかつたように思つ。少なくとも一神教な国ではなかつた。

もしかしたら私が知らないだけでこの世界のどこかにある国なのかもしない。最初はそう考えもみた。それでもなお異世界ではないかと思つた決め手は、日本には『人族』しか知的生命体は存在しない事だ。

「その知識で行くと、自分を全否定だもんなあ」

龍玉には、『人族』を含め、様々な種族が住んでいる。大きな割合を占めているのは、『エルフ族』、『獣人族』、『翼族』、『魔族』、『精霊族』だ。ただし獣人族はその中でもさらに細かく分類される上、少数民族は星の数だ。

そして私は『人族』と『エルフ族』と『獣人族』と『精霊族』の血を持つた『混ぜモノ』と呼ばれる存在だつた。『混ぜモノ』は2種以上の血が混血したものであり、忌み嫌われる存在だつたりする。というのも、種族が違えば成長も違うわけで、『混ぜモノ』はどう成長するか分からなかつたのだ。

初めて聞かされた時は、何だそれ。生まれは選べないしいきなり迫害つて酷くない?と思つた。どうやら日本という国は身分というものがほほない状態で、迫害というものは悪として認識されていたようだ。しかしよくよく理由を聞くと、嫌われる理由がよく分かつた。『混ぜモノ』は成長度合いも寿命も知能も魔力も未知数なのだ。つまり産まれて一週間で成長きり死んでしまう例もあれば、百年たつても赤子のままでその後いきなり成長したということもある。魔力や知能が異常に高い事もあれば、その逆もある。今まで普通だったのに、いきなり老化スピードが上がつたりと、予測がつかない爆弾みたいな存在なのだ。

異常な成長は病気ではないので他人にうつつたりはしない。しかし日本ほど治安が良くなく、必ず子供ができるとは限らないこ

の世界では、次世代に残すべきではない血なのだ。だから忌み嫌われる。

私の場合は、どうやら体は『人族』のスピードで成長したが、知能の方はいつまでも赤子と大差なかつたらしい。まともに言葉を話す事も出来なければ、日常生活もままならないレベルだつたそうだ。それが突然一ヶ月前に『精霊族』と『獣人族』のハーフだった母親の死をきっかけに、知能および精神が急激に成長したのだ。それも成長度合いが今度は肉体を追い越しているのだから、他人からしたら氣味が悪いだろう。忌み嫌われるのは、理解できないからという事も含まれるのかもしれない。

それでも今私が死んでいないという事は、『混ぜモノ』だらうと殺してはいけないという倫理がこの世界にも存在するらしい。

「かといって、今更演技してもなあ」

日本人は空気を読むのが上手い。空気の読めない人をKYYなんて呼ぶ単語ができるほどに普通のスキルだ。しかし状況が分からぬ状態ではその能力の発動は無理だつた。結果、私は旅芸人一座の仲間からも少し浮いてしまつた状態である。

今更子供ぶつたところで、余計に氣味悪がられるだけだろう。かといって逆にペラペラと年相応ではない言葉をしゃべつても氣味悪がられそうなので、今のところ無口キャラで通している。

では今後楽に生きるにはどうしたらいいのだろう。そこで将来的に迫害されない為、『混ぜモノ』であることを隠しておけばいいんじゃないかと考えた。しかし現実はそんなに甘くはなかつた。『混ぜモノ』には大きな特徴として、顔にあざがあるのだ。かく言う私は、目じりに隈のようなあざがあり、それがばつちり身分証になつてゐる。

隠すためにはお面をかぶるか、フードで顔を隠すしかない。その格好を想像してみたのだが、……混ぜモノでなくとも氣味悪がられそうながらい怪しい。

本気で生きにくい世の中だ。ショッピングモール。少しどちらごとくもいいレベルだと思つ。

「オクト、だんちょーがあそんできていひつて  
そんな中でも、私を恐れない子供が一人いた。しかも精神が異常  
に成長してしまつた今でも、年齢的には僅かに年上である彼は、  
私を妹のよつに扱う。

「クロ」

テントの外から顔をのぞかせたクロは私を見るとぱつと笑顔にな  
り駆け寄つてきた。ちなみに今の私を普通の子供のように扱うのは、  
彼の母親と団長だけである。まったくもつて希少価値の高い子供だ。  
「きょひばりげばれば、あとはあそんでもいいんだつて。オクト、  
いひつ?」

「こつと邪氣のない笑顔で私の手をつかむと、クロはずんずん  
とテントの外に進もうとする。

「クロ、待つて。まだナイフ磨けてない」

この一座に身を置く為には働くしかない。今までは母親が働き、  
自分は舞台で見世物になつていればよかつたのだが、母親が居なく  
なつた今、雑務などをしなければ置いてもらえそうもなかつた。『  
混ぜモノ』は確かに珍しいが、世の中にいないわけではないので到  
底目玉にはなれない。

とにかく使える人材だとアピールが必要だつた。

そんなわけで、私は現状把握しながら、団員の道具の手入れを日々  
を行つてたりする。

「そんなの、アイリスのじ」とだる。オクトがやるひつよつないよ。  
母さん、じぶんのしようばいどうべをちゃんととかたづけられないの  
は、プロしつかくつて言つてたよ」

「駄目」

私はきつぱりといふと首を振つた。確かにそつかもしれないが、

頼まれたものを放棄すれば、今後どんな嫌がらせを受けるか分からぬ。あいにくと私は格闘技のプロでもなければ、暗殺スキルとも持つていらないイタイゲな子供だ。殴られれば、本気で死にかねない。

そこで異世界とはいえ、前世の記憶を持ち合わせている自分が考えたうえでの結論は。

「長いものには巻かれた方が安全」

「ながい……まかれる？」

繰り返すクロに私は頷いた。

特に大きな害でないならば、甘んじておいた方が今後の為だ。上手い事動きまわれば、とりあえずは痛い事もないし、最低限の人権は守られるだろう。

「よくわかんないけど、ならオレもてつだよ」

ペちょりと地べたに座り込むと、クロは私が使っていた布を取り上げ、刃を磨き始めた。小さな子供に手伝いをさせて、万が一刃物で怪我をされてしまうのが、クロは結構頑固だ。一度決めたらたら終わるまでずっと手伝ひだろう。

「ありがとう」

「おれがおにいちゃんだから、オクトをまもるのはあたりまえなんだよ」

気にするなど、小さな手で私の頭をわしわしとかき混ぜる。これは彼の母親がよくやる行動なので、彼なりの愛情表現なのだが、私の髪の毛はぐちゃぐちゃになつた。ちょっと有難迷惑だ。

私もさつさと終わらせる為に、切れ味が悪くなっているナイフだけをオイルをかけた砥石で研ぐ。この方法は前世の知識にはなかつたので、アイリスに一通り教えてもらったものだ。赤ん坊から脱出したばかりの脳は簡単にその技術を吸収してくれた。

ありがたいけれど、……自分で結構器用貧乏かもしね。

「できた」

最後の一本についたオイルを綺麗にふき取つて、道具箱にしまつと、私は額の汗を服の袖で拭つた。子供の力だと、この程度でも結構重労働だ。

「よし。じゃあ母さんのところへ行くぞ」「何で？」

確かにビラを配りに行くんじゃなかつただろうか。首をかしげると、クロは私の腕を掴んで立たせた。

「そんないいられたなりだと、この町のれんちゅうになめられるだるなるほど。」

確かに、私もクロも汚れてしまつた。クロは私の手を握り今度こそテントから外へ向かつた。

私が身を寄せている旅芸人一座は、テントを張つて生活する。さつき私がいた場所は道具がしまつてある物置のような場所だ。

寝る場所は下つ端は基本一つの大きめなテントで雑魚寝だが、一座の中でも稼ぎ頭たちは小さいながらも自分の部屋をもらえる。もしくは都会で実入りがいい時は、稼ぎ頭たちだけは宿に泊まつていた。そしてクロのお母さんは剣の達人で剣舞踊や模擬戦などが好評の稼ぎ頭だった。私は本来雑魚寝なのだが、クロのお母さんが自分のママと友達だった為、一緒に部屋に置いてもらえていた。

「母さん、よこれた。たおるない？」

「あらら。派手に汚したわね。クロは上着も着替えちゃいなさい。オクトは、とりあえず顔洗うだけでいいわね」「すみません」

部屋には黒髪の女性がいた。仕事道具である剣を磨いてたらしい女性はクロを見ると笑みを浮かべた。田元がきつめの美女だが、笑うと少し可愛らしい。クロに続いて部屋に入った、私は頭を下げた。

「これはオレらがわるいんじゃないんだからな。アイリスのやつが、オクトにじごとをおしつけるからいけないんだ」

「違う」

私はクロの後ろで首を横に振った。

私は基本雑用係だ。仕事道具を片づけるのも仕事である。まあナイフを研ぐまでやるのはやり過ぎといつうか、やらせ過ぎかもしれないが、依頼があつたのならば仕方がない。

それに仕事があるから私はここに置いてもらっている。ならばアイリスを恨むのはお門違いだ。

「ちがわない。オクトは人がよすぎるんだ」

「それも違つ」

「はいはい。分かつたから、喧嘩は後にしてクロは早く着替えなさい。濡れタオルは母さんが用意しておいてあげるから。それと、オクト。今のアイリスじゃそんなに売れっ子にはなれないから、媚売つてもしかたないわよ。売るなら、もつと上の人に売るか青田買いをしなさい」

それもどうなんだろ？

私は困ったように首をかしげた。そもそも私をいじめたりしそうなのは、アイリスみたいな中途半端なレベルの人だ。売れっ子は逆にアイリス辺りをこき使う。なのでアイリスの不興を買わないのは対策としてはあつていると思つ。

確かに売れっ子のお気に入りになれば、うかつに手は出せないだろうけど。

しかし売れっ子の役に立てるような事が今の私にできるとは思えない。もう少し大きくなれば力仕事もできるのだけれど、いかんせんこの小さな体ではできる事が少なかつた。

青田買いの方だつて、もう少し知識が増えなければ見抜く事は無理だ。

私はぐるぐると考えながらクロのお母さんである、アルファさんについていく。アルファさんは洗濯場で水をもらつとタオルを濡らし、私に差し出した。

「ほら、眉間にしわ寄せてないで、早く拭いちゃいなさい」

「ありがとうございます」

「これぐらいいいわよ。あ、ちなみに私はすでにオクト巣戻だから、媚売つても無駄だからね」

ああ、そう言えばアルファさんも売れっ子だつて。最終的にはそこにたどり着きそつたが、まだそこまで考えていなかつた私は、先にくぎを刺されてしまった。

「仕事ならいくらでもあげるわ。でもそんなのより、技を盗みんで色々考えなさい。その方が、いじめられなくなる為の早道よ」  
それはつまり売れっ子になれという事……。つまり無理という事ですね。分かります。

私は理解できないふりをして、タオルで顔をぬぐった。

いう事は無茶苦茶だが、アルファさんには感謝だ。もしも濡れタオルを用意してもらえなければ、私は明日の水浴び時間まで汚れたままだつた。私だけでは洗濯場でタオルなんて貸してもらえないだろ？しき、混ぜモノというだけで、井戸を借りることも難しかつただろ？

つべづべ運のない生い立ちだ。

部屋へ戻ると、クロはすでに服を着替え終わっていた。アルファさんからタオルを受け取り顔をふく。

「そうだ。オレたち、これからビリーバッツしていくから。で、その後あそんでくるから」

「ふうん。だつたらもつと、派手な服着て行きなさいよ。折角可愛い顔に産んであげたんだから、もつと活かしなさい」

「ええつ。そのあとあそぶから、よじすとおこるだろ」

「汚れないように遊ぶの。汚すことするなら一度戻ってきて汚してもいい服にしなさい。ちゃんと看板になる事も一流の芸人よ」

そう言つてアルファさんは水兵みたいなセーラー服型の舞台衣装をクロに渡す。襟の部分がキラキラとラメついて遠くからでも目立ちそうだ。そしてさらにもう一着子供用の服を取り出した。

「はい。オクトもこれに着替えなさい」

私は逆にピンクのセーラー服だ。クロが青だから反対色を持つてきてくれたんだろうけど、ちょっとためらつ。ちなみにクロが短パンで、私がスカートだ。年齢考えれば微笑ましい感じなのだが、前世の記憶が可愛らし過ぎるそれに躊躇いを覚えさせる。

……これはほほ、どこの美少女戦士の恰好ではないだろうか。

「スプレーの四文字が頭をめぐる。

「私は

「着替えなさい」

「はい」

似合わなかつたら、逆に道化っぽくて看板になるかもしれない。うん。前向きに考えよう。

これも仕事とわりきり服を脱ぐ。そう言えば前世の記憶がある割に、裸になることにはあまり抵抗がない。クロとは兄弟みたいなものだし、そもそもクロは六歳だ。恥ずかしいと思える年齢でもないからかもしけないけれど……。

私の前世って、性別どっちだ？

一般常識的な記憶は存在するのだが、どうも当の本人の事になるとかなりあやふやで欠如が多い。もしかしたら今は生物学的には女だが、前世が男だった可能性もある。

とはいえ、前世がどちらでも関係はない。混ぜモノである自分には、結婚とかまずあり得ない行事なので、性別とか考えるだけ無駄だ。

「うん。さすが親友の娘ね。かわいすぎるわ。さあ、行つてきなさい！」

パンと背中を叩かれると、そのままテントの外に押し出された。下手に鏡を見て行く気が失せる前なのである意味良かつたと思うしかない。うん、知らぬが仏作戦だ。

「オクト、いいづせ！」

クロに急かされ、私はコクリと頷いた。

自分の場合、まだ幼すぎる事もあって、買いだしなどの町に出る仕事はまわつてこない。ここ一ヶ月間は休みがなかつた事もあって、町へ出るのは久々だつた。なので行きたくないわけではない。

「このまちは、ふんすいがあるところに、人があつまるんだつてさ。

へたに店の前とかでピラピラばると、おいらむからせつけでくばらう

う

そういうものなのか。

ピラピラと言つので、駅前のティッシュくぱりが頭に浮かんでいた。大抵そういうのは商店街で行われていたように思つ。というのも不特定多数の人が流れていき、比較的多くの人にもらつて貰えるからだ。

首をかしげると、クロがさらに説明してくれた。

「みせがいっぱいあるとこでえいきょうするには、なんかえらい人にして……しんせい？しないといけないんだって」

「偉い人って？」

「わかんねえ。いいじゃん。ふんすいとこならおこられないし」

まあ、その通りだ。ただ噴水のところが公園みたいな役割だとすると、こつちから人を集めるようにしなければ中々終わらないかもしない。

噴水を目指して歩いて行くと、商店街にでた。商店街は先ほどまでと少しだけ雰囲気が変わり、地面がタイル張りになつた。またレンガで作つたような店が立ち並び外観が統一されている。まるで中世ヨーロッパだ。そこを時折馬車が走つていく。

「クロ。ここは何の店があるの？」

馬車はバスや電車のような役割をしており一般客も使うが、こういった店まで乗りつけて来るのは貴族や金持ちだけだ。つまりはそういう店に対応した店があるという事になる。

「んーっと、そこがレストランで、そっちがざつか。あとまほづぐの店とかぼうせきの店とか、ぶきつひとつこりもあつたはず」

「ふーん」

まるでRPGな世界だ。魔法具の店とか、武器を売つているとか、子供が入つても大丈夫なら一度見てみたい。

この世界は、日本ではゲームにしか出てこないファンタジーな種族がいるだけあって、魔法というものが存在した。学校で学び資格をとったものを魔術師と呼び、そうでない者を魔法使いと呼ぶそうだ。魔法使いも試験さえ通れば魔術師と名乗れるのだが、なかなかその試験が難しいらしい。

ちょっとした魔法具なら一般人も使えるそうなので、機会があれば触つてみたいと思っていた。所詮は一次元に憧れたミーハー魂だけど、魔法は口ermanだ。仕方がないと思う。

「あと、ぐすりの店と……えっと。そうだ。いかいやがあるってだんちょーいつてたな」

「イカイヤ？」

何の店だろう。

あてはまる字も思い浮かばず首をかしげる。イカ嫌？以下胃や？「いかいの物、えつとことはちがうせかいでつくられた物がうられてるんだって」

「……そんなのあるの？」

つまり、『いかいや』といつのは、『異界屋』ということだろう。文字があてはまつた瞬間、落雷を受けたような衝撃が走った。

「うん。たまにコンコウコにながれつくってさ。きほんつかい方わからなくてガラクタだけど、マニアが高くかうんだって」

異界。私の妄想だけじゃなくて、本当にあるんだ。

ドキドキと心臓が脈打つ。その異界は、私が知っている所だろうか。この頭の中にあるのは妄想じゃないと教えてくれるのだろうか。不安と期待がぐるぐると渦巻く。

「オクト、あとで行つてみる？」

私の動搖がクロに伝わつたらしい。

それでも私はクロの言葉に、私は一も一もなくうなづいた。



噴水がある広場は、確かに人は多かった。

いい憩いの場であり、旅行者にとつては観光の名所なのだろう。広場は噴水を中心に円形になつており、下のタイルが魔法陣のような幾何学模様となつていて、原理は分からぬが、この噴水は魔法が関わつてあり、シンボルのようなものになつてゐるのだろう。周りには出店もあり、とてもにぎわつてゐる。……ただし、私の周り以外では。

「どうみても避けられてるよね」

噴水に腰かけた私の周りには、誰もいない。さつきまでは確かに獣人族のカツプル達がイチャイチャしていたはずなのに。

私はクロと半分にしたビラをパラパラめぐらため息をついた。さつきから一枚も配れていないビラが憎い。それにしても混ぜモノつてのはどれだけ嫌われてゐるのだろう。特にスリをしようとかそんな邪念は一切ないのに、近づけば逃げられ、普通に歩いているだけで大きく避けられる。

まだ一座の方がマシだ。少なくとも蜘蛛の子散らすように私から逃げる事はない。

「結構かわいらしい外見してると思うんだけどなあ」

噴水が止まるタイミングで中を覗けば、蜜色の髪をおかつぱくらに切りそろえた子供が水に映つた。耳は獣人族のように大きく、エルフのように先がとがつていてぬいぐるみのようだ。青色の瞳は大きく、その所為で人形のように見えた。右目の目じりにある青黒い色をした痣さえなければ、自惚れではなくマジで美少女を自称しあつていいと思う。

外見はイタイゲな幼児なのに、混ぜモノつてだけで避けられるつ

て、世知辛い世の中だ。でもまだ石とかぶつけられるわけではないし、イジメレベルで考えれば、まだいい方かもしれない自分を慰めてみる。

「オクト、なにさぼつてるんだよ」

ぽんやりと再び噴き出した噴水を見つめていると、クロが腰に手をやつて私を睨みつけてきた。自分で働かされていたのだから怒るのはわかる。

と、言われてもなあ。

「受けとつて貰えないから」

「あつ……」

クロはすぐに理由に思い当つたらしく、顔を歪めた。それは同情するものではなく、悔しそうな表情だつた。

「オクトはこんなにかわいいのに」

うん。それは将来、本気で好きになつた人に言おつね。たぶん母親が影響していると分かつてはいるのだが、私としてはクロがフェミニストどころではなく、タラシに成長しないか心配だ。

「クロはどう?」

「オレもほんどもらつてもらえなかつた」

クロの手の中にもまだまだビラは残つていた。結構、広い広場だ。人がこつちによつて来てくれない限り、配るのは大変だろう。

そこでふと私は気がついた。

……そうか。寄つて来てもらえばいいのか。

「クロ、今から私がいう言葉を大きな声で言つて」

私はクロの耳元に口を近づけると、こつそりと今思いついた事を伝えた。まわりに人がいないのだから普通に喋つたつて構わないだろうけど、なんとなく打ち合わせはこつそりした方が仕事っぽい。それに仕事と割り切らなければ、これからする事は凄く目立つので恥ずかしいのだ。

「わかった。でも、オクトはへいき？」

「うん。早く終わらせよう」

気遣うクロに、私は頷くとビラをすべてクロに渡した。

そして私は体から力を抜き、田を閉じる。大丈夫。できるはず。といふかやるしかない。

「さあさあ、みなさん、おたちあい。『よひこそぎでないかたは、きいといで』

子供っぽくないクロの口調に、人がいつせいにこつちを見たのが気配で分かつた。

「とおでのやま』しかさのうが、きかざるときはものの黒白、ぜんあぐがとんとわからない」

「こちらへやつてくる足音が聞こえ、私の耳が震える。獣人の血のおかげで、私の耳はとても性能が良かつた。

「さておたちあい。ここにすわるは、あわれなませモノのむすめ」  
ドキドキと心臓が五月蠅いが、まだ動かない。できるだけ人形のように見えるように表情を出さないように気をつける。

「ませモノともうしましても、ただのませモノとはちがう。母がしぬまでことばをはなせず、母がしんでもその口からでは、いかいのうたのみ。せんのうたをしろうと、なにもわからぬにんぎょうのうた。しかしなぜだかみみにここちよい。さて、おたちあい。さいごのこうえんせまる、『グリム一座』！ほんじつしゅつちょうこうえんだっ！」

よく言った。

クロにお願いした言葉は長い上に喋りにくいものだつたはずだ。

それでもクロは一言一句間違えず喋りきつた。ここから先は私の仕事だ。

ぱつと田を開ける。思った以上にまわりに人の輪が出来ていた。  
しかしそれが何なのか分からぬといつたように、私は表情を動か

さないよう気に付ける。そして息を吸つた。

『今一、私のー、願ーい』とはー、叶うならば、翼がほしーー』

私は精靈譲りの透き通るような声を披露した。内容は合唱コンクールレベルの歌だけど、日本語だ。聞いたこともない言葉はきっと神秘的な感じに聞こえるだろ?』

特にこの世界は魔法がある為か、電気といつもの気がなく、テレビどころかラジオもない。またCDやカセットテープどころか、レコードすら発明されていなかつた。つまり娯楽というものが生演奏のみなのだ。そしてそれが聞ける場所は限られている。無料で変わった歌、しかもきれいな音色で聞けるなら、ホイホイ人が集まつてくるはずだ。

案の定、歌が聞こえ始めると、どんどん人が集まつてきた。そこへすかさずクロガ、ビラを配つていぐ。これなら、ビラがはけるのも早いだろう。

『父さんのが残したー、あつーい思い。母さんがくれたー、あのまなざーし』

それにしても、千の歌は言いすぎたなど少し反省する。合唱コンクールの歌意外には、流行りの歌や童謡、それらがなくなると、アニソンや、本家本元歌う人形の歌しか知らない。ネギを振り回す人形の歌は中毒性はあるが、どうなんだろう。人前で熱唱すべき歌だらうか?

いやでもそれはアニソンも同様だ。超能力者や宇宙人、未来人と友人の少女の歌はまだいいとしても、オタクな女の子が織りなすアニメの歌は、ちょっとアレだ。テンション高すぎてあまり手を出しあたくない。……というより、それを完璧に覚えている前世の自分に絶望しそうだ。うん、前世は前世。深く考えとはいいけない。

『どーかとうしてくだしゃんせ。御用のないものとおさせぬー』

段々アニソンORボーカロイドの歌に近づいてきたぞという辺りで、クロの持つているビラは全てはけた。その事にほっとする。良

かつた。本当に、良かつた。

「では、しゅっちょうこうえんは、ここでおわります。かのじょのうたがきになるかたは、ぜひ『グリム一座』までおこし下さい」  
ペコリとクロがお辞儀をしたところで、私も歌うのを止めた。  
久々に大きな声を出し続けたので喉が痛い。しかしそれをおくびにも出さず、私は再び噴水に腰かけ目を閉じた。ゼンマイが切れてしまった人形をイメージして体の力を抜く。

しばらくがやがやしていたが、それでも徐々に人の気配がなくなつていく。動かなくなつてしまえば、何にも面白くないし、私は混ぜモノだ。人がいなくなるのは早いだろう。ほとんど人気がなくなつたところで、私は目を開いた。

パチパチパチ。

突然拍手がなつて、私は目を瞬かせた。

「凄いね。楽しかったよ、ありがとう」

キヤベツのような緑の髪をした少年がにっこりと笑いかける。どうしていいのか分からず、私は曖昧に笑つた。混ぜモノに笑いかけるなんて、変な奴だ。

「是非公演を見に行かせてもらつね」

その言葉に、私は頭を下げる。クロに話させた設定だと、私は歌以外話せないことになつてている。まだお客様がいる以上、その設定を崩すわけにはいかない。

少年は動かない私の近くまで歩み寄つてきた。近くで見ると瞳も同じく、キヤベツのような色をしている。顔はパーソの一つ一つが整つており、まるでファンタジーの権現のような美少年だとぼんやり思う。

「でも異界の歌はあまり披露しない方がいいよ。悪い人に捕まつちやうから」

耳元でささやかれた言葉にどきりとする。私が危うく声を出しか

けた所で、クロが私と少年の間にに入った。

「おしゃべれめ。つぎはこのあとのぶたいでのじつけんがありますので、せひ来てください」

「うそ、やうわせてもいい。じゃあね、ドールちゃん」

少年は手を振ると、ひとつその身をひるがえした。

一体なんだつたのだろつ。……年齢の割に落ち着いているし、言葉も綺麗な発音だ。なまつを感じられない。お忍びできた貴族かなかだらうか。

それにしても疲れた。

私は、今度は演技なしでぐつたりと噴水にもたれた。

「オクト。すじこわ。ぜんぶなくなつた」

「うん」

興奮気味なクロに、私は相槌を打つ。それにしても、じじまで上手くいくとは思わなかつた。私はほつと息をはく。

それと同時に先ほどの声をかけてきた少年が脳裏に浮かんだ。彼は何故、あの歌が異界の歌だと信じたのだろつ。それとも少年の言葉は演技と思つた上での冗談だらうか。

まあ関係ないか。私は気を取り直すと、いまだ興奮気味話すクロに手を伸ばした。

折角町に出てきたのに、このままじつとじついるのは、時間が惜しい。

「異界屋にいじつへ.

## 2・1話 小さな賢者様

異界屋は商店街でも少し奥まつた場所に存在した。

店先には共通語である漢字のような形の龍玉語と、今滞在しているアルベロ国 の言語を併記した看板が飾つてある。ただし残念な事に私は文字を書いたり読んだりできないので、たぶん異界屋と書いていあるのだろうと想像するしかない。

しかしそれは決して私が混ぜモノだから知識不足というわけではないと思う。多分この世界の識字率は高くないんじゃないだろうか。商店街を歩いたが、店先の看板には必ず分かりやすい絵が描いてあり、場合によつては絵しか描いてない所もあつた。

「い、か、い、や。うん。ここだここ。だんちょーがいつてたの」「クロつて、文字読めるの？」

隣で看板を見つめるクロを見て驚いた。

「おう。母さんがおしえてくれたんだ。じはおぼえといた方がとくだつてわ」

確かにそうだけど、それで教えるつて、凄くない？

アルファさんつて剣の達人だし、一体どういう人何だろ。まあ、一座にはわけあり系の人も身を寄せていたりするらしいので、きっとそこちらへは来ない。

異界屋はあまり客が入らないのか、とても静かだった。扉をくぐるととカウンターに座つてる猫男がちらりとこちらを見て顔をしかめる。それでも今はお客様と商談をしていくよつて、あえて追い出そうとこちらへは来ない。

これ幸いと私達はそのまま奥へ進んだ。

棚に並べられたものたちは、新品ではなくどこか破損している事もあれば、汚れてしまつていてもした。変な形のつぼや蛇のよう

なオブジェなど、不思議なものが沢山ある。ただ問題は、そのどれもが私の記憶には刺激をしてこないのだ。簡単にいえば、どれも良く分からぬガラクタなのである。用途がさっぱり分からない。

「アーチー博士が用ひた可燃性は3つ。

? 異界といつても私が知っている異界ではない、さらに別の世界  
うゑいきよへ——る。

? ここにあるのは日本以外の国のもとのため、前世の人も知らない。

?私の頭の中の記憶はたたの妄想である。

私もそうではない自信がない。

できる事なら、手にとつてしまふか、じつくりと見て考へたいが  
? であつた場合、呪いの類でないとも限らない。なんといつてもこ  
の世界がすでに、RPGもどきなのだ。装備したら外せないよ的な  
アイテムだつたらマジ怖い。

「んー……ないな」

店舗はまだ広くはないですが。

少し歩いただけなのに、すぐに行き止まりにきてしまった。それでも、せめて系統だけも同じものを固めておいて欲しい。ざつくばらんに置かれているせいで、見落としもありそうな気がする。私はもう一度戻ろうとまわれ右をした。

כטבנש – נטבנש

振り向いた瞬間、突如鳴り響いた音に私はドキリとした。まるで警報機のような音だ。音源の先を見れば、クロが尻もちをついてい

る。

「なにやつてんだつ？！」

茫然としているクロの襟元を猫男がつまみあげた。クロの体が軽々と中に持ち上がる。その手には卵型の何かを握っていた。音源はたぶんそれだ。足元にカラランと金属製のものが落ちる。

「はなせよっ！…」

「店のものを壊しやがって。ここには子供遊び場所じゃないぞ」

「こわしてねーよ。さわつただけだって」

「のままでは、お役所につき出されかねない。

私は咄嗟にクロが持っているそれが何なのか閃くと、足元に落ちた金属を拾った。

「クロ。貸して」

クロが握りしめていたものを受け取ると、穴の部分にフックを突っ込んだ。するとけたたましく鳴り響いていたベルがピタリと止まつた。

よかつた。上手くいった事にホツと胸を撫ぜおろす。

「……何したんだ」

「壊してない」

私はもう鳴かなくなつた防犯ブザーを訝しげな猫男につきつけた。「防犯ブザーが正常に動いただけ。クロを放して」確かにいきなり音を鳴らしたのは悪かつたが、首根っこをいきなりつままれるほどの事ではないと思う。子供だって、混ぜモノだつて人権があるのだ。

ブザーを受け取った猫男はとりあえずクロをその場に下ろした。

「いやー、嬢ちゃん凄いな」

先ほどまで猫男と商談をしていたらしい男が近づいてきた。多分魔族と思わしき、紅目の中は私を見下ろした。

「ところで嬢ちゃん。そんな事何処で知ったんだ？」

「えつ……」

「何処？」

ふと今言つた言葉が、本来私が知つてゐるはずのない言葉だと気がついて固まつた。正直に前世の話をしてもいいだろうか。いや、駄目だろ。そんな話をしても、頭がおかしい人扱いされるの関の山だ。それに異界の歌を歌つた後に言われた『悪い人に攫われちゃう』の言葉が私の中で引っかかる。

というのも本来知つていなければいけない異界屋の店員が、商品の使い方を知らなかつたのだ。つまり異界の知識はほとんど知られていないのが現状ではないだろうか。もしそうだとしたら、知つてゐるという事は、その知識だけでもかなり価値があるはずだ。

……危険すぎる。

「……ママが教えてくれた」

私は嘘がばれないようにうつむく。

ママ、勝手に擦り付けてごめんなさい。でも私を守つて下さいと心の中で懺悔する。

「混ぜモノの母親が？ 一体、どんな

「オクトがかなしんでんだからそれいじょうきくなよ。オクトのかあさんはしんだんだ」

私の前でクロが両手を広げた。

クロかつこいい。でもクロごめん。うつむいているのは、そういう理由じゃないんだ。ただ、都合良く大人たちも勘違いしてくれそうなので、そのままにしておく。うん。私、悪くない。

「それは悪かった。混ぜモノの子もごめんな。とにかく、他には何か聞いていないのかい？」

私は怯えているように見えるようクロの背中にしがみついた。そしてこつそりと、相手を盗み見る。

猫男は毛むくじやらで、あんまり表情が読めない。魔族の男は笑顔だが、だからっていい人とは限らない。今すぐにでも、テントへ戻つた方がいいんじゃないだろうかとまわりをうかがう。

「もしもこの後鳴らなかつたりしたら、嬢ちゃんたちが壊したつて

疑われるよ？これは永久的になるものなのかい？」

「……電池が切れたらもう鳴らないから」

私はぼそりと付け加えた。

それにして、凄く嫌な聞き方をする人だ。今鳴るのだから、今後鳴らなくても私たちの責任ではない。それなのにその言い方では、そうではない事になる。今の話を聞いた猫男が、そうやつて言いがかりをつけてこないとは限らない。

それに彼はたぶん私たちが、旅芸人でそれほどお金を持っておらず、社会的地位も低いと踏んで発言しているのだろう。衣装を見れば芸人という事は一目瞭然だし旅芸人はそれほど儲かる仕事でもない。それに私たちが子どもであり、私が混ぜモノであるという事も不利だ。猫男とどちらの話を信じると言つたら、まず負けるに違いない。

「電池つてなんだい？」

「……動かす力になる元。頭の部分のねじを外すと中に入っているから」

猫男は手に持っている防犯ブザーをしげしげと眺めた。

これだけ話せば十分だろう。私はクロの服を引っ張った。

「クロ、帰ろう？」

早く帰ってしまった方がいいと、頭の中で警報がなる。すでに自分が生まれからして厄介なのだ。これ以上厄介事はいらない。

「嬢ちゃん、待つた。折角だからもう少しゆっくりしていかないか？ なあ店主」

「ああ。是非そうしてくれ。お菓子もあるぞ」

「……それ、人攫いが使う手口だから。私は呆れたように二人を見た。お菓子なんかで釣られるなんて馬鹿、いまどき」

「おかし？」

クロが凄い興味津津という顔をした。そうだよね。クロは私と違つて正真正銘、純粹な子供だもんね。しかもお菓子なんてほとんど食べられないしね。

「クロ、駄目」

「でも」

「駄目」

これではどっちが年上か分からぬが、私はきっぱり首を振った。

「おいしい話には裏がある」「

「おかしにうらがあるのか?」

「あー……お菓子にあるんじゃなくて」

「ほら持つてきたぞ」

クッキーらしきものがのつた皿を持つ猫男の目は糸目だった。たぶんこれが彼の笑顔なんだろう。その笑顔に雑念が見える私は間違つていまい。

「あーん」

魔族の男に差し出されたクッキーをパクリと食べたクロを見て、

私の顔は引きつった。

「……いくらですか?」

「払えるの?」

たぶん払えません。

私は心中で滂沱の涙を流した。こうなつたら頑張つて、金持ちになろう。そう決意した瞬間だった。

さてどうしよう。

店内のど真ん中で話し合ひも他のお客の迷惑になるという事で、カウンター横に特設机が設置された。確かに通路の途中じゃ迷惑だとは思うけれど、嘘を付けと声高々に言つてやりたい。そもそも店内は迷惑になるほどの客がいないはず。

「私は全てを知つているわけじゃないから」

言いたい事は色々あたが、それでもこれだけは伝えておかなければと席に座つた私は開口一番そう伝えた。というかクッキーを勝手に持つてきたのはそちらなんだから、よく考えれば私たちが気にする必要はない。食べていいと言つておきながら、後からお金を請求するつて詐欺だ。犯罪に負けちゃいけない。

「そんなの分かつてゐるさ。嬢ちゃんがここにあるものすべてを知つていたら、それこそ何者だつて話だからね。それでも知つている範囲で協力して欲しいんだよね」

協力とか言つてるけど、どうせ強制なくせに。

この魔族、口調は柔らかめだけれど、私たちを逃がすつもりはないというのが節々に感じられる。というのも入口から通り場所に座らせ、自分は入り口に背を向ける形で座つているのだ。子供の足なら逃げられるはずもないのに、万が一逃げようとした時のためを考えて座つたとしか思えない。用意周到さに本気で腹が立つ。……禿げてしまえ。

「見返りは？」

でも実際これ以上関わつたりしたくないので、悪態は飲み込む。必要最低限で取引を終えて、早く店を出よう。

「クッキーもらつたよ？」

「それは電池の事を教えたぶん。音を鳴らして店に迷惑をかけた分は、音の止め方と使い道を言つた事でキャラ。今は対等」

少々強引だが、それぐらい強気で言わないと、どんどん請求されてしまう事になつてしまつ。立ち位置が上であればなおいが、そうでなくとも下になつてはいけない。

「面白い混ぜモノだな。よし教えてくれた情報によつては、何か商品をやろう。モノによつてはやれないが」

「くれるモノに得に欲しいものがない場合は？」

「何か欲しくて来たんだろ。それ次第だ。やれないといふのは、すでに買い物手が付いているものと、使い方が分かつている、高額の取引ものの事だ」

つまり使い方が分かつてさえいれば、高額取引アイテムになると いう事だらうか。後は今のところガラクタ。好きにしていいという事だらう。

「さつきのブザー」

「あれが欲しいのか？」

アレでも良いにはいいんだけど。私は首を横に振つた。

「アレじゃなくてもいい。アレと同じ世界から来たものが欲しい」あのアイテムが唯一私の前世を肯定してくれるものだ。誰にも話せない事だからこそ、肯定してくれるものは欲しかつた。自分の気がくるつてるんじやないかなんて、考えずにする。

「つまり嬢ちゃんの母ちゃんは、その道具がある世界の事を嬢ちゃんに教えたというわけか」

魔族の言葉に私はコクリと頷いた。

きつと私が欲しがつて いる理由が形見がわりとか、そんな風に勘違いしてくれるのでう。

「分かつた。3つ使い方を教えてくれたら、その中の一つをやるよ」

マジで？！

猫男、いい人だな。

たったそれだけてくれるなんて、太っ腹じゃないだろうか。やっぱり形見攻撃が効いたのだろうか。目が潤んでいる気がするし。

「教える3つにはそのブザーは含まれない。店主、そういう事だよな」

「ああ、それはもちろん」

「……分かつてる」

そして魔族の男は優しくない。

自分だって、そこまでセコク考えてないから。大げさに取引なんて言つたけど情報の元手はタダなんだし。問題はどうやって日本のものを探し出すかだ。この店内広くはないが狭くもない。地道に探すと日が暮れる気がする。

「じゃあそれっぽいのを持って来るから、そこで座つていって、くつろいでくれ。なんならジュースもつてくるぞ」

「へ？」

「今自分で、どうやって探そうって思つていただろ。いまどきの異界屋は、ネジとか文字とかで、ある程度は世界ごとに分類されるんだよ」

マジか。

いや確かに。驚いたが、すぐに納得する。

ただ収集するだけでは、異界屋では偽物が多発してしまつ。何か分からなければ異界のものなんてアバウトな取引ではギャンブル過ぎる。となれば何か見分ける方法が必要だ。そしてそういう技能があれば、世界ごとの分類とかもしているだろ？。

「ふーん。そういうば、なんでいせかいのだつてわかるわけ？」

「世界の壁を越えたものは、一定の種類の魔力を帯びるんだ。それを魔術師が見分ける。人為的にはその種類の魔力を帯びさせるのは難しいからね。パチモンもでない寸法さ」

なるほど。

魔術師にはそういう仕事もあるのか。てっきり、RPGよりもく、魔物でも退治したり、王宮で仕えたりしてると思っていた。「あんたは、まじゅつしなのか?」

「あんたじゃなくて、お兄さんね。そうだよ。異世界のものは新しい技術が多いからね。色々研究させてもらっている」この魔族の職業は魔術師か。しかも研究といつ事はそれなりの所に勤めているんじゃないだろうか。

「そういうや嬢ちゃんはお母さん亡くなつたんだよね。お父さんは?」

「……知らない」

そういうと、魔族は口の端を上げた。その表情で背筋がぞくりとする。何今の質問? 意図が読めなくて怖いんだけど。

私は魔族から田をそらしすと、店内へ目を向けた。それにしてもこれだけ色々と異世界から流れ着くつて、この世界は一体どういう作りになつてているのだろう。

「待たせたな。ちょっと見てくれ」

段ボールいっぱい持ってきた猫男は、机の上に3分の一ほど取り出した。

腕時計、コンタクトケース、ドライヤー……分からないのもちらほらあるけれど、これならば大丈夫そうだ。ただここからが問題である。私がこんなにいろいろ知つていると暴露するのはヤバいんじゃないだろうか。

ならば適当に3つ選べばいいのだけれど、教えたところで使えないものでは意味がない気がする。それとも使えないという情報すら彼らは欲しいのだろうか。今の段階では何が一番いいのかが私には選べない。情報料としてもう少し限り、それなりの事はしたいのだけど。

「何だつたら、手にとつて見ても構わないぞ。どうだ、分かるのはあるか？」

どうやら私が分からなくて道具とこらめつ」していのだと思つたらしい。

「……おじさんはどれが知りたいの？」

「お兄さんね。もしかして、全部分かるのかい？」

その言葉に私は慌てて頭を振る。本当は結構な確率で分かつているけど、そんなこと言つたら危険な気がした。ガラクタが、情報次第で高値段という事だし。

「重点的にそういうのを調べてみるだけ。それと聞いているのは魔術師のお兄さんじゃなくて店主」

よく考えれば、何故アンタはいるんだ。自分と同じお客の立場なのに。店主とは友達かなんかなのだろうか。……分からぬ。

「ならこれなんか綺麗だが、何か分かるか？」

私は店主に指差された綺麗なものとやらを見た。キラキラした石で飾られていてるそれは確かに綺麗にデコレーションされている。手にとつて、二つ折りのそれを開いてみた。画面は黒く鳴つているが、割れたりなどはしていないようだ。下のボタンも無事である。でもなあ。

裏を見てカバーを開けるとちゃんと電池が入つていたが、その下のシールが赤く滲んでいる。

「これは携帯電話」

「けいたいでんわ？」

「そう、遠くの相手と話す為の道具で持ち運び可能なタイプ。だけどこれは水に濡れて壊れてる。キラキラしているのは、そういうシールが貼つて飾つてあるだけで、宝石ではないよ」

さつそく1個目から意味ないものを選んでくれてありがとうござります。胸が痛いです。電池のカバーを戻しながら手をそらす。き

つと見た目が派手だから目が行つてしまつたんだろうけど、これら自分で選べば良かつた。

「へえ。そういう便利な道具があるんだ。テレパシーみたいなもの？」

「あ、いや。特別な能力がなくても誰でも使える。ただし同じものがもう一台必要なのと、電波塔がない場所では使えない。でもカメラ機能や音楽機能、ゲーム機能は使えると思う。後はこれもさつきの防犯ブザーと同じで電池が切れたら動かない」

私が心を痛める必要ないぐらい、魔族は全然残念そうではなかつた。むしろ楽しそうに私の話を聴いている。つて、あんたじゃなくて、得しなきゃいけないのは店主だから。

「誰でも使えるつていうのがいいねえ。カメラとか、ゲームつていう機能も気になるなあ。店主、他に同じやつはない？」

「これと同じのは入つてきてないな」

同じというのは何を見て同じとするのか少し気になつた。

同じをデコつてある所で判断されてたらないかもしない。案外段ボールの中には一個くらい混じつていそうな気がするが、言わないとおいた。携帯電話の使い方では、1個教えるだけでも凄く時間がかかるつてしまい割に合わない。

私は机に投げ出されたもの見て、次は自分で選んだほうがいいかもなあとこっそりため息をついた。

さてと。私自身で選んだほうがまだましと分かつたならさつわと選んでしまおう。

そうは思つたが、優柔不斷な自分は中々選ぶ事が出来ない。色々考えた上で私は一つのペンを選びだした。ペン類ならば、なんとか使えるのではないかだろうか。お土産系と思しきそれは、シャーペンかボールペンだろう。力ちりと押すと先っぽがでてきた。どうやらシャーペンだと分かると私は数度押す。しかし芯は出てこない。

「オクト、それなに？」

「シャープペンシル。文字を書く道具だけど……」

とりあえずふたを外して逆さを向ければ中から芯が2本出てきた。良かつた。これで芯がなかつたら、またも使えないものを教えてしまつところだつた。1本を中に戻すと、もう一本を先から入れる。

多分短い芯が残つてしまつてゐるのだろう。最初は抵抗があつたが、しばらくするとすんなりと中に入った。私はふたをはずすと、折れた芯だけ取り出す。

「これで大丈夫。これは紙に字を書く道具。中に入つてゐる芯がなくなると、使えなくなる」

「芯つて、これの事か？」

猫男が折れた芯を拾い上げた。

「うん。でもある程度の長さがないと使えない」

「「」の物質は何でできているの？」

「炭素と呼ばれるもの。鉱物の一種。作り方は知らない」

魔族も興味津津で芯を見つめていたので、私は手に持つていたシャーペンを差し出した。実際に書いてもらつた方が分かりやすいだろ？

「上を押すと芯ができる仕組み。芯さえあれば、紙に文字が書ける。

だけど出し過ぎると折れるから

魔族は力チカチカチと興味深げに押している。そしてボトンと全部出してしまった所で、ふたを開け再び中に芯をしました。

「これだけ細いものだと、ドワーフ族やエルフ族でも作るのは難しそうだね」

エルフは自分にも血のつながりがあるので多少は知っているが、ドワーフとはどんな人たちなのだろう。例として上げるという事は手先が器用な種族のだろうか。

「なあなあ。そいつらって、どんなやつ？」

私が首をかしげていると、先にクロが聞いてくれた。

「ああ。ドワーフは鉱物の扱いが得意な奴らで、地中に住んでるんだよ。エルフ族は頭がいいから作り方を知っているかも知れないんだ。手先がいちばん器用なのは人族だけど、手先が器用だけじゃ無理だし。それに本体の方も単純そうでかなり技術が高い……この穴とかどうやって開けるんだろう？」

シャーペン片手に魔族は唸った。まるで匠の技を見たかのような感じだけど、日本では当たり前の商品だ。しかも量産系。それだけ文化が違うだけ何だろうけど、ちょっと騙している感じで申し訳ない。

とにかくあと一つだ。良心の呵責に苛まれる前に、さつさと終わらせようと見渡した。それが手ごろだろと悩んでいると、魔族が私の目の前に拾い上げたものを差し出した。

「では最後に、この造形は何か教えてもらえないかな？」

彼が手に持っているのは、車のプラモデルだった。教えてもいいが、ちらりと猫男を見る。私が教える相手はあくまでも猫男であつて、この魔族ではない。

「いいの？」

「ああ。先生にはいつも無理を聞いてもらつてるしな。もし知つて

いたら、教えてくれないか？」

「……それは車の形をした置物。車は馬車と同じ役割をするけれど、馬は使わずに走る乗り物の事。本来は人が乗れるぐらいの大きさをしている」

猫男がそれで良いというならと、私は車について話した。たぶんプラモデルについてではなく、車について話した方が、魔族には有益な気がする。

「馬がないのにどうして走るんだい？」

「エンジンというものがあって、それがタイヤを回しているから。エンジンを回す燃料はガソリン……と聞いた事があるだけで、私も詳しく述べ知らない」

残念な事にシャーペン同様使い方を知っているだけで、私の記憶には作り方などの知識は入っていなかった。たぶんそれを知らないても困らない人生だつたのだろう。

「なるほど。車ねえ。それが馬車の代わりに使われているという事か。わざわざそんなものを作るという事は、その世界には馬はいないのかい？」

「……たぶん馬よりも効率がいいからだと思う。走る分だけのガソリンはいるけれど、毎日の餌はいらない。それと糞などの処分にも困らないから……ってママが言っていた」

何処まで話してもいいものか。

あまり向こうの世界の事を話すと、いらない厄介事が増える気がしてならない。どうしてそこまで知っているのかと聞かれても困る。だが魔族は特にその事に大して聞いてくる事はなかった。ただぶつぶつとつぶやきながら車のおもちゃをこねくり回す。

少し自意識過剰すぎたかもしれない。その事実にホッと胸をなでおろす。とにかくこれで終わりだ。

「これで3つ」

私は猫男の顔を見た。

約束はここまでだ。さてどう出るかと、ドキドキしながら相手の反応を待つ。自分は混ぜモノで、なおかつ子供なのだから、情報料を踏み倒されたとしても仕方がないくらいは思っている。とにかく無事に一座に戻りたかった。

「分かった。約束だからな、好きなを選べ」

猫男はにやりと犬歯を出して笑った。「ねむつもりはないらしい。……本当にこの猫男いい奴だな。

私は内心びっくりしつつ、机に皿を落とした。あまり大きなものだと目立つので、貰つたはいいが、他の団員にとりあげられると予想できる。

「なら携帯電話がいい」

悩んだ末、私は最初のそれを選んだ。

もう壊れてしまつて使えないと分かっていても、一番懐かしいと感じたのだ。きっと前世では携帯電話を持ち歩いていたのだらう。

「確か壊れているんじゃなかつたか？」

「うん。でもこれがいい」

「なら持つていきな」

使えなくても、あるというだけで十分だ。それだけで、自分は空っぽではないと分かつて少しだけ救われる。

私は携帯電話を大切な宝物のようにそつと拾い上げるとポケットにしまつた。

「じゃ、オクト。いいうぜ」

私は頷くとクロの手を握り椅子から立ち上がた。それと一緒に魔族も立ちあがる。そして彼は入口へ進んだ。

もしやついてくる気かと睨むと、入口のドアのところで立ち止まつた。

「どうぞ、小さな賢者様」

につっこりと笑つて魔族は扉を開けたまま支えていた。どうやら見送りをしてくれるらしい。

行動は善意の塊なのに、何か企んでいるように思えてならないのは、私の考え過ぎだらうか。是非とも、そりであつて欲しい。自意識過剰、万歳。

私は魔族を睨みながら、入口を潜る。

「またね」

『また』なんでもうないから。

「口一口と赤い目を細めて手を振る魔族から私は顔をそむけた。クロは律義に手を振つているが、とてもそんな気分にはなれない。

異界屋が見えないぐらい離れた場所でようやく私は肩の力を抜く事が出来た。振り向くが、誰かが後をつけている様子もない。

「……疲れた」

「じゃあ、テントにもどろひ?」

クロの言葉に「クリ」と頷く。

「でも、いいの?」

クロは行きたいところはなかつたのだろうか。どう考へても私の用事につき合つて貰つただけだ。

「オレはオクトとあそべればそれでいいんだ」

何て優しいんだろう。

私のササクレた心が一気に癒された気がする。子供って何て可愛いんだろう。自分も子供だけど、この純粹さは前世に捨ててきてしまっている。

「ありがとう」

私は上手く言葉だけでは伝えきれない気持ちを伝えたくてヒギュツとクロの手を強く握った。

### 3・1話 理不尽な選択

「あれ？母さんいないね」

テントに戻つたが、アルファさんの姿はそこにはなかつた。たださつきまで居たらしく、飲みかけのコーヒーが置きっぱなしだ。その隣には新聞が開いてある。

「トイレかな？ま、いいや。よびれるまえにきがえよ」

クロの言つ通りだと私も元の服に着替える。「ゴアゴアとした麻の服に着替えると、なんとなくほつとした。やっぱり舞台衣装は肩がこむ。

携帯電話を衣装のポケットから取り出すと、忘れないうちに自引用の鞄に入れた。私の荷物はこの小さなカバンに詰まつたものだけだ。基本的に服は着まわしというか、団員のお古がまわってくるし、ママもあまり荷物をもつ方ではなかつたので鞄一つで事足りている。服をたたみ衣装ケースに戻した私たちは地べたに座つた。

仕事が全くないというのはあまりないので、こういつ時何をすればいいのか分からぬ。困つたすえ私は机の上にあつた新聞を手に取つた。

「クロ。何が書いてあるか分かる？」

新聞は龍玉語で書かれているのは分かるが、縦書きか横書きかさえ分からぬ。一応イラストを入れてくれていてがそのイラストにすら文字が入つており、さっぱりだ。

「……んーと、えーと……んんんん」

「「めん。そんなに読みたいわけじゃないから」

新聞とにらめっこをして唸るクロに、私はすぐさま謝つた。どうやらクロにとつて新聞はまだ難易度が高いようだ。確かに6歳で新聞がすらすら読めたらかなり凄いだろう。

「えつと。ならクロつて、どう書くの？」

「それならわかる。ちょっと待つてって」

そう言つて「じんぐ」と道具箱をあさつたクロは、羽ペンと紙を取り出した。そこに大きく文字を書くと私に渡してくれた。

「ク・ロー・ド。これがりゅうぎょく」で、こっちがホンニンベ。オレはホンニンベうまれだから母さんがおしえてくれたんだ

「えつ。クロ ド？」

アルファさんをはじめ、皆クロクロ言つていたので、てつきりクロが名前だと思っていた。そうか、愛称だったのか。新たな事実だ。「なまえをかくときは、くるーどつてかけて、母さんいつてなんだ。で、ひとまえでは、クロつてなのれつてさ。だれにもいっちゃんいけないつていつてたけど、オクトはとくべつな」

それつて……本当に愛称？

特別は嬉しいが、ちょっと荷が重い気がするのは氣のせいだろうか。とりあえずクロがくれた紙をどうするべきかと迷ひ。

「えつと……」

「それやるな。オレのサインはきつとしょいらいたかくうれるから」返そつと差し出しだが、断られてしまつた。どうしよう。

悩んだ末、とりあえず後でアルファさんに相談する事にした。もしかしたら考え方かもしれない。ドキドキしながら、私はクロのサインをカバンの中にしまつた。これも携帯電話と同様見つからないように奥の方に入れる。

「あら、もう帰つてたの？早かつたじゃない」

「母さんただいま」

突然声をかけられて、私は慌ててサインから手を離した。

「クロ、オクト、おかえりなさい」

「ただいま」

サインの事を早く伝えてしまったが、挨拶をしないとアルファさんが怖いので、先にちゃんと挨拶をする。

「ちょうどよかつたわ。2人に大切な話があるからちょっと聞いてくれる」

いざ名前の事を話そっとすると、先にアルファさんが話し始めてしまった。大切な話とは何だらう。この旅芸人一座の事だらうか。話の腰を折るのもアレだし、名前の事ならばいつでも聞けるので、私は「ククリと頷いた。

「たいせつなはなしつてなに？」

アルファさんは私たちと同様に地面に座ると、黒い瞳でまっすぐ私とクロを見た。

「Uの町での公演が終わったら、Uの一 座を抜けるわ」

……へ？

思つてもみない言葉に私は目を見開いた。稼ぎ頭のアルファさんが抜ける？

「団長にも許可はとれているから、明後日の公演が最後ね」

何の話をされているのか理解できずに私はアルファさんをただ見つめた。今は凄く安定しているはずなのに何故？しかも団長が許可したつて。

どんな風に話したのかは分からぬが、Uの話は希望ではなく決定事項という事だというのは分かった。

「母さん…じゃあオクトはどうするんだよ」

「それでね、オクト。もし良かつたら、私たちについてこない？」

「えつ、オクトもいっしょ？」

「ええ。ただし、オクトが承諾してくれたらだけだ」

「もちろん、くるよな！」

クロが一コ一コと私に笑いかけてくる。

でも私はどう答えていいのか分からなかつた。一緒にテントに入れて貰つていいが、私とアルファさんは赤の他人だ。

「……どうして？」

「それはどうして抜けるかつてこと？それともどうして一緒にこんないかと誘つているのかつていう意味？」

「どちらも」

いきなりすぎて、私は混乱していた。

何が最善なのか理解するだけの情報と時間が欲しかつた。ここでアルファさんの話を承諾しついて行くのが一番簡単で楽だと分かっている。でも本当にそれでいいのだろうか。

「まずなんで出ていくことを決めたのか。それはこの一座が次はホン二国へ行くことが決まったからよ。でもね、この新聞にホン二国の王様が殺された事が書かれてたの。次に控えているのはその弟。きっとしばりく荒れるわ。そんな危険な場所に行きたいわけがないでしょ」

「……詳しい」

「ええ。一応腐つても生まれ故郷だから、チェックは欠かさないようにしているの」

いやいや。生まれ故郷は腐りません。そんなどうでもいいツッコミが心をよぎるのは、たぶんまだ頭がちゃんと働いていないからだらう。

「団長にそれだけ危険だと伝えれば - -」

「団長の考えでは、弟が即位するから、國中がお祭りになるだろうといつ予想よ。だから祭り会場で公演をさせて貰おうつて思つてゐるの。それも確かに一理あると認めるわ。私の意見と団長の意見があれば、団長の意見が優先されるのは当然。でも私は行きたくない。だから抜けるの」

アルファさんの話は筋が通つているような気がする。でもどこかおかしい気もした。

何故荒れるとと思うのだらう。兄が殺されたのは、弟が関係して

いるのだろうか。だとしたら兄弟の仲が悪のはホンニ国では公然の秘密だつたりするとか？……分からない。

「それと、何でオクトを引き取りたいかだつたわね。それはオクトが親友の娘だからよ。ここで一人で生活をするのは大変だわ。オクトは一人で生きるにはまだ幼すぎると思うの」

アルファさんの言い分は正しい。はたしてアルファさん達が居なくなつた後、私はここでやつていけるだろうか。残念な事に私は、まだ買いだしもまともにできない年齢なのだ。

特技も歌うだけで、混ぜモノである物珍しさぐらいしか売りがない。そして混ぜモノである事は、いい面と悪い面を両方兼ね備えていて、どちらかと言えば後者寄りだ。

「ただ一緒に来てもここよりもいい生活はできないわ。むしろ悪くなる可能性が大きいわね。だけど貴方にはまだ保護者がいると思うの。そして私はそれになれるわ」

赤の他人である自分に、そんな事を言つて貰えるのがどれだけありがたいことかは分かっている。

ただどう判断していいのかはやつぱり分からなかつた。まだ働く事の出来ない自分は、ついて行つたとしても、アルファさんに迷惑をかける事しか出来ない。

「分かつたわ。これはオクトにとつて大切な事だものね。明後日まで、よく考えておいて」

何も返事する事ができない私に、アルファさんは考える猶予を与えた。私は5歳児なのだから問答無用という事もできたはずだ。それどころか、いい面しか話さない事だつてできる。でもアルファさんは違つた。私が考えられるように情報を与え、なおかつ返事を待つつてくれ。それだけでも、何ていい人なんだろうと思つ。

でもだからこそ私はどうしていいのか分からなかつた。



出ていくか、出でいかないか。付いていくか、付いていかないか。

悩んでいても日にちは経つしていくもので、あつという間に公演の日を迎えてしまった。公演は午前と午後の2回に分かれていて、朝から大忙しだある。その為今のところまだアルファさんと話せていない。

会場のセッティングが終了したところで、私はパンと薄いスープ、一かけらのチーズをようやく口に入れる事が出来た。この世界での平民の食事は2回。朝食と夕食だ。ここに貴族や金持ち達は昼の軽い軽食が入る。一座も例にもれず2回なのでこれを逃したら夜まで空腹と対決をしなければならないのでありがたい。

「ほりほり、さつさと食べて仕事に行くんだよ」

他の団員と食事をしていると、副団長に急かされた。食事の後は、外で客寄せの為に歌を歌う事になつていて。といつても、知能の発達が遅かった事もあって私はこの世界の歌を知らない。以前も母さんが鳴らす楽器に合わせて、ララララと適当に声を出すだけだった。精霊族は産まれた時から歌を歌うそうで、私にもその血が混じっている。そのおかげで適当に出した声でも、ちゃんと歌として聞こえていたようだ。今も音感は健在のようなので、ありがたい。

「オクト、いたつ！ いつしょにきやくよせしそうぜ！」

スープを飲みほしたところで、クロが食堂に入ってきた。

「クロは食べた？」

「うん。母さんとすこしほまえにな」

私は食器を返却場所へ持つていくと、クロの後についていった。

そして道具置き場に寄つてから、敷地の外へ出る。

テントの外ではすでに一座に所属している魔法使いが、雲を使って今日の公演の告知をしていた。まばらだがお客は徐々に着始めているようで賑やかな声がする。

「さすが、さいしゅう田だね。」

「わあが、やこしゃう曰だね。すいごねからせこつてゐる」

「クロ、遊んでねえでりませんと極度です」

「うーん、うーん、うーん。」

テントの周りでは、すでにグッズや食べ物の店が並んでいた。食べ物は通常価格より少し割高となるが、ここで買った商品は公演中に食べてもマナー違反とはならない為比較的売れる。また子供が好きなものが置いてあるのも、親の財布のひもを緩める一因だろう。この販売も収益に大きく関係してくると前に団長に聞いた。

店がある場所から少し離れた場所でクロは立ち止まる。

「たんちよーかこのあたりりてかこわなひじて  
わやくをあんたし  
しろだつて」

クロの手には、アコーテイオンが抱えられていた。

私は【グリム一座、会場はこちら】と多分書かれている看板を掲げる。矢印が入っているし、私とクロの服装は、舞台用なので文字が読めなくて十多分理解してもらえるだろう。

「オクトもてきとひこうたりやすんだりしてればいいから」

クロはそういうとアコーディオンをならした。確か音楽もアルファさんに教えてもらつたと聞いたことがある。……剣が出来て楽器もできるつて、アルファさん何者？

まあ今はそんな事考へても仕方がない。私も邪氣の含まない笑顔を浮かべた。混ぜモノではあるが、見目は良いいと思つ。無表情さらしているよりは、いいは。

「オクトかわいいつ！！」

「ふひゅう?」

クロがアコー「ティオング」と私にタックルしてきた。腕に当たって地味に痛い。

「クロ？」

「かわいい。マジかわいい！おっし、やるきでた！だんぢょーに、オレらのじつりよくみせつけるぞー！」

……まあ、やる気が出たならいいか。

腕をさすりながら、私は落としてしまった看板を拾いもう一度掲げる。その隣で、クロがアコー「ティオング」を鳴らした。その音楽はとても子供が鳴らしているとは思えないほど流暢だ。

音楽に合わせて私も、ラだけ声を出す。

しばらくはそうしていたが、ふと気がつくと、クロの音楽が聞き覚えがあるものになってきた。ん？ とクロを見ればニッと私に笑いかける。

「このあいだ、オクトがうたつてたきょく。だいたいあつてるだろ」「大体つていうか……」

ほぼ完璧だ。

嘘、アレは1回しか歌つてないよ？ これ、アルファさんが凄いんじゃなくて、クロが凄いんじゃない？ そんな簡単に耳コピできるなんて信じられない。

「クロ、凄い」

「お兄ちゃん、だからな」

えつへんと胸をそらすが、世の中のお兄ちゃんはそんなハイスペックではないと思う。

ただ懐かしい音楽を聞いていると、もつと聞いてみたくなつた。それも私が多分一番知っていると思われる、アニソンやボーカロイドの歌を。

どうしよう。聞けるつて分かつたら、無性に聞きたい。ビラくばりの時も、イメージ壊れそうだから歌えなかつたけど、でも聞きたい。たぶん前世の私はそんな曲ばかり聞いていたのだね。

「クロ……」

「なに？ オクトゥ？」

キラキラ純粋なまなざしが苦しい。でも自分の中に産まれた渴望は消せない。汚れた人間でごめんなさい。でも聞きたいんです。二二二口したいんです。

「今から歌う歌、それで演奏してくれる？」

「いいよー」

返事が軽い。

多分クロにとつてはそれほど難しいものではないのだろう。せめてあまりにも場違いな歌にはならないようつけ加えをつけようと心に決める。

そして私はドキドキしながら口を開いた。

「君は王女おー、僕は召使いー。運命分かつ、哀れなーー」

私が始めに選択したのはボーカロイドの曲でも無難に感動できる歌だ。某金髪双子の歌である。今の私なら高音も楽々とでるのであらうがたい。

間奏部分の音楽は表現できなければ、歌詞があるところは多分音の外しもないはず。精霊族の血よありがとう。私は生れて初めて自分のご先祖様に感謝した。ママありがとうございます。

歌い終わつたところで、クロを見た。期待のまなざしを止められない。パチパチパチとクロは拍手すると、歌詞があるところから音を鳴らした。

多少違うかもしれないが、ほぼ記憶のそれと同じ音に私は感動する。

すごいすごい。嘘みたい。

そこから私の中でもたかが外れてしまったようだ。興奮が冷めやらぬ前にクロの音楽に合わせて私はもう一度熱唱する。そしてさらに次の歌をクロに強請つた。私がアカペラで熱唱し、その後クロのア

「一 テイ オンに 合わせてもう一度 热唱する。それを 飽める」ともなく何度も繰り返した。

気がつくと、まわりに 人ばかりが できてしまつほど 楽しんでしまつた。

……オタクの記憶つて怖い。

「こゝのうたもきける、グリムこあざーほんじつをこしゅひこひ  
えん。かいじょうはあちらだよ！！」

クロが 慌てて 周りのお客を 案内したところで、一度 歌を 休憩した。想像以上に ハイテンションになつてしまつた自分に 反省する。次は 気をつけよう。

「ねえ、それも 異世界の歌？」

顔を上げると、キヤベツ色の髪が が日に飛び込む。縁の髪の人はこの国に多いが、珍しいほど鮮やかさなそれは、数日前の記憶を揺さぶつた。

何故、あの時の子供がいるんだ？

「僕もチラシを貰つたからね。本当に 今日で 終わりなんだ。残念だなあ」

顔に出でてしまつたらしく。にこりと 笑いながら 少年は 私に ビラをみせる。

「君も 舞台に 出るの？」

その言葉に、私は 首を 横に 振つた。最終公演は、花形の人たちが全員出るので、私が 舞台に立つ タイミングはない。私が 出る時は、誰かが 休みをとつたりする時の代役と 決まつている。

「そつか。残念。なら見る必要はないな」

少年はチラシを びりびりと 破ると 捨てた。何をされたか 咄嗟に理解できなくて、風に乗つて 飛んでいく紙を見つめる。

「僕は君の歌の方が 聞きたかったんだけどね」

「……私なんかより、皆の方が凄い」

わざと怒らせようとしているのだろうか。

何が目的か分からぬが、私はとりあえず思つてゐる事実をできるだけ平然と伝える。私の歌は所詮、精靈の恩恵と前世の記憶の恩恵であり、切磋琢磨してゐる彼らと並び立つものではない。

「何だ。喋れたんだ。残念。本当に喋る事の出来ないドールちゃんだったら連れ去ろうと思つたけど。ほら絵本だったら、悪い人に囚われたお姫様を王子様が助けるものでしょ？」

……コイツ、何言つてるんだ？

私は少年の言葉にドン引きする。王子様つて何？

「でもこの場合は僕が悪人になるかな。それは困るなあ。仕方ないか。じゃあまたね、ドールちゃん。悪い人に攫われないようにな」

問答無用で攫わないだけの常識はあるらしい。もしかしたら攫うとかは彼なりのジョークだったのかもしない。笑えないけれど。キヤベツ色の髪の少年は、手を振るとテントとは反対方向に歩いて行つた。本当に公演を見る気はないようだ。

「オクトーきゅうけいにはいつていいってさー」

少し離れた場所でクロが手招きする。私もこれ以上変な人に絡まれたくないの、クロの方へ足早に近づいた。

「クロ……さつきはごめん

「なにが？」

「歌いすぎたから」

クロもきつと耳コピばかりさせられて疲れたはずだ。しかしクロはにこりと笑うと、私の頭を撫ぜる。

「オレはお兄ちゃんだからだいじょうぶ。それにオクトがたのしいと、オレもたのしいから。あとでまたやるの？」

その言葉は胸が痛くなるぐらい嬉しくて、私は何も言えなかつた。それでも感謝を伝えてくて、ギュッときの手を握る。そしてでき

る事なら、この先もずっと彼の手を握つていられればいいのこと、  
私はそう願つた。

最後の公演も無事終了し、私は片づけを手伝っていた。力仕事はできないので、もっぱら道具を磨いたり保全をする。今もフランプの数を数えている最中だった。

「オクト、ちょっとといいかい？」

アルファさんに声をかけられ、私は立ち上がった。ドキドキと心臓が打つが、もう答えは決まっている。私は道具置き場から外へ出た。

空には満天の星が広がっている。この星が消えたら、アルファさんとクロはここから立ち去るのだ。そしてこの一座もこの町から出ていく。

「この間の、答えをそろそろ聞きたくて……」

「おい。アルファと混ぜモノ、団長に呼ばれてるぞっ！！」

アルファの声をさえぎるように、遠くから他の団員が大声が聞こえた。

「じつは、今大事な話をしてんだよ」

「団長が至急つて言つてるんだつてっ！！頼むよつ！！」

「まったくもう。あいつは本当に自分勝手なんだから。オクト、悪いけれど話は後にしよう」

どうせいつも返事をしようとも意思が変わることはない。私はこくりと頷いた。

アルファさんに手を引かれ団員の元へ行く。

「それで、肝心の団長は何処にいるんだい？」

「団長室だよ。何か上客が来てるんだ。公演依頼かな」

「何で公演依頼で私たちが呼ばれるのさ」

そういえばと団員も笑った。

しかし団員は上品な人でないと楽しげに説明続ける。私の頭の中に  
は、キャベツ頭……じゃなくて、キャベツ色の髪の少年が思い浮か  
んだ。彼は私の歌が聞きたいと言っていたので、私が呼び出され  
といつたらそれぐらいだ。ただし彼は上品かもしれないが、公演依  
頼するような年齢には見えない。となればきっと誰か知り合いに頼  
んだのだろう。

アルファさんが私を引き取りたいと言つてくれている事はきっと  
団長も知つていて。だからアルファさんと私の2人を呼んでいるの  
だろう。

「分かった、分かったから。ほら、オクト、行くよ」

アルファさんは団員の贅辞を片手で止めると団長がいるテントの方へ足を向けた。他の団員もまるで王族や貴族が来たかのような騒  
ぎっぷりだ。

「失礼します」  
「失礼します」

アルファさんがテントの扉を開いたので、私も慌てて頭を下げる。  
本当に貴族ならば、公演を受ける受けないに関わらず、粗相をする  
わけにはいかない。もし何かをしてかしたら、一度とこの国へは来  
れないと前に団長からきいた。

「やつと来たか。アルファ、オクト、入れ」

団長と向かい合う様に、黒髪の男が中央で腰かけていた。マント  
を羽織つており服は見えないが、その止め具は多分大粒の宝石だろ  
う。団員達が騒ぐのもなんとなく分かった。

もし本当に貴族からの依頼で公演をするならば、一座に箇がつく  
し、給金もかなり貰えることだろう。

「用事はなんですか？まだ片づけの途中なので忙しいのですが」

片づけは確かに途中だけ、一流の芸人であるアルファさんはそ  
んなこと気にする必要ない。多分、客がいるから言葉のあやだろ  
う。「ああ。まあ用事はと言つるのは、アルファというよりも、オクトに

だな。オクトーっちへこい」

団長に手招きされて、私はアルファさんを見上げた。アルファさんは仕方がないと肩をすくめると、私の手を放す。行つて来いとう事だらう。

団長はアルファさんよりもさらに大きいので、近づくと顔を見るのが困難だ。多分一メートルぐらいあるんじゃないだろうか。首が痛い。

「オクト。こちらは、王宮の魔術師である、アスタリスク様だ。お前を引き取りたいと申し出て下さつている」

「やあ、小さな賢者様。またあつたね」

そこにいたのは、異界屋にいた魔族だつた。私を見下ろす紅い目は楽しげだ。だが私は楽しむ余裕もない。今団長は何て言つた?

引き取りたいって、えつ？！どういう事？

「ちょっと、待つて下さい。オクトは私が引き取る事なつたはずです」

混乱して何も言えない私より先に、アルファさんが抗議した。まだアルファさんは何も言つていないが間違つてはいない。申し訳ないけれど、アルファさんの好意に甘えようと私は決めていた。

「そもそも、お前には引き取れないだろ。混ぜモノがいたら、宿もまともに使えないんだぞ。お前ら自身どこかに定住する気はないぐせに。毎日野宿でもするつもりか？」

えつ。

私は団長の言葉に耳を疑つた。混ぜモノは宿が使えない？なんですか？そんなの初耳だ。

「混ぜモノはね、いつ何が起きるのか分からぬからね。だから宿などはよっぽどランクが上な、保険に入つていいような場所でないと使わせてもらえないんだよ」

知識不足で困惑している私へ、アスタリスクが説明する。

「そしてそんなホテル使えるのはまず、貴族ぐらいだらうね  
つまり私やアルファさんでは到底無理だという事か。嫌な現実と  
いうか、混ぜモノの人権のなさっぷりが酷い。混ぜモノって、本当に  
に嫌われているだと、しみじみ実感した。

「それは、私がなんとか - -」

「なんとかって、何だ。オクトに顔を隠させて生きて行かせるつも  
りか？ そんな事ノエルが願つていたとでも思うのか？」

アルファさんは団長の言葉に、唇をかみしめる。

ママの願いなんて、きっと誰にも分からぬ。私自身は顔を隠して生きても、別にいいかとは思つ。それだけ嫌われていて、その方が楽に生きられるなら問題ない。

でも私の所為で、アルファさんやクロに迷惑がかかるのは嫌だ。  
「それに俺も慈善事業でこの一座をしてるんぢやないんだ。もちろん引き取り手がないなら面倒を見るぐらいの情は持ち合わせている。でもな、アスタリスク様はお前を引き取りたいとおっしゃられているんだ。オクト分かるか？」

その言葉は嫌というほど分かった。

私だけではこの一座ではやつていけない。力仕事も出来なければ、何か凄い見世物になる特技があるわけでもない。クロがいなければビラ一枚配れない。ここでも私は足を引っ張るだけなのだ。

「……アスタリスク様の家に行く」

「オクト?!」

私はアルファさんの顔を見ないようにアスタリスクだけを視界に入れる。今アルファさんを見たら流石に心が折れそうだ。

悠然と笑う、アスタリスクはまるで悪魔のように見えた。彼が欲しがっているのはきっと私の前世の記憶だ。アルファさんのように私を思つての事では断じてないだろう。ただ理由がしつかりしてい分安全だ。そして彼は私を引き取つても問題ないほどの金を持つ

ている。

「よろしくお願ひします」

産まれはじつじょうもない。こんな、とても理不尽な選択だ。  
……自分が何も分からぬいただの5歳児だったら良かつたのにと思  
つた。

それでも、そうはなないので、私は悪魔へ静かに頭を垂れた。

ドサドサドサ。

何かが崩れる音と、痛みで目が覚めた。目を開けるがどうやら生き埋め状態になっているようで目の前が暗い。そして重い。窒息死も圧死も避けたい私は、それを必死にかき分け体を起こした。

「汚いにも限度がある」

這い出した先は本、本、本。本の山だ。本棚も部屋の端いくつかにあるが、その中はすでにいっぱいな為、床に積んでいるようだ。付け加えるなら飛び石のような足場しかない部屋は決して狭いというわけではない。本の量が部屋の収納量とあっていいないだけだ。

命の危機になるほどの本つて……。

ため息をついて、上を見上げた。そこには壁紙が貼られた天井がある。……こんな場所で寝るのは初めてだ。私の頭の上はいつも布製のテントか、満天の星だった為、何だか変化気分になる。

アスタークスは私を引き取りに来たその日のうちに、この屋敷へ連れてきた。転移魔法というものを使つたらしく、私自身は今どこにいるのかも分からない。ただ宫廷魔術師の宿舎だとだけ説明されている。家に帰るのが面倒なので、もっぱらここで生活しているそうだ。

宿舎ならもう少し綺麗に使えよと思うが、私が口にする前に魔術師は皆似たり寄つたりの部屋だと言わってしまった。嘘をつけ。

玄関先から全てが本で埋め尽くされているなんてありえないと思う。人間の生活する場ではないと声高々に言いたいが、引き取つてもうつた身としては雨風しのげるだけでも満足しなければいけない

いだろう。昨日は寝られる場所として、ソファーを発掘したところで、睡魔に負けた。おかげで今朝死にかけたわけだが。

「……起きよ」「ひづ

疲れから考えると少し寝足りないが、一座ならこれぐらいの睡眠で働くのが当たり前だった。寝過ぎると逆に体の調子がおかしくなるだろう。

本を踏まないよう気をつけながら部屋の外へ出る。すでにドアを閉める事は諦めているようで、開けっぱなしになっていた。

隣の部屋にはキッチンスペースがあつたが、さっきまでの部屋と似通った状態で、本で埋まっている。あの男、今までどうやって生活していたのだろう。昨日見せてもらった他の部屋も、バスルームを含め、全て本に埋まっていた。家主に許してもらえるなら、その辺りから最低限の生活スペースを作らせてもらおう。

「……一体アイツは何を考えてるんだ？」

この宿舎の事もそうだが、アスタークスは私に何をしろとか、何故引き取つたとか、何も言わない。昨日は夜も遅かったから説明がなかつたのだろうけれど、その辺りの事をきつちり教えてくれなければ、どうふるまつていいいのか分からぬ。

大方前世の異世界知識が目的に違いない。立場としては使用人又は奴隸として引き取られと思うのが妥当な線だ。しかし宿舎の方には私と同じ使用人の立場の人がいない為指示を貰う事も出来ない。ただし家の方には使用人もいるらしいので、今日はそちらに行つて指導を受けるのだろうか。

「不安だ」

分からぬ事だけで推測しても、結局無意味だと分かつている。しかし何をしていいのか分からぬというのは不安で、思考がぐるぐると廻る。

とりあえずキッチンに何か食べ物があれば朝食ぐらいは用意して

おこう思つたのだが、甘かつた。戸棚には固くなつたパンと調味料しか入つていなかつた。……本氣でどうやつて今まで生活していだのうか。

「これで朝食作れと言つたら、アイツは魔族ではなく悪魔だ。

「オクト、おはよ

「あつ、おはよ」やがてます。アスタリスク様

探すのに夢中になつていて、背後から近付かれた事に気がつかなかつた私は慌てて頭を下げた。今までメイドなんて経験した事がないのだが、どうしたらいいのか分からぬが、とにかく敬語は使つた方がいいだらう。

「ああ。俺、堅いの嫌いだから。アスタでいいよ。そんな所で何しているの？」

「……朝食の準備をしようと思いました

「とりあえず、頭上げてね。そんな堅くななくていいから。それより、オクトって料理できるの？」

アスタに言われ私は顔を上げた。黒色のパジャマを着たアスタは、とても宮廷魔術師とは思えないラフさだ。生地はいいものを使っているのだろうが、言葉も砕けているせいで一座の人とそんなに変わらないように見える。

いや駄目駄目。見た目に惑わされてはいけない。昨日だつて大粒の宝石が付いたマントを羽織つていたのだ。一般庶民と同じはずがない。これはきっと最初は優しくしておいて、何か粗相をしたらお仕置きする作戦に違ひない。私とアスターどちらが上か間違えないようだ。

「簡単なものでしたらできます。しかし申し訳ござりません。ここにあるものだけでは、私では作る事ができません」

きっと、私以外でもこの材料じゃ無理だけど。

でももし、彼が鬼畜なら、『作れるなら作って?』なんて無理難題言いだすかもしれない。そして作れなくてお仕置き。痛い思いをするのは最低限がいい私は先に謝つておく。謝つたなら、お仕置きも多少軽くなるんじゃないだろうか。

「そりやそうだ。結構前に買つたパンしか入つてなかつたでしょ。俺、もつぱら食堂ばつかで食べてるから。でも材料さえあれば料理ができるなら、オクトに頼みたいな。時間の縛りがあるし、色々制限もあつて、食堂で吃べるのは面倒なんだよね」

良かつた。お仕置きはないらしい。

私は心中でホッと胸をなでおろす。この分だと、少なくとも奴隸ではなく使用者として扱つて貰えるんじゃないだろうか。

「分かりました」

「それとさ、何ビクビクしてるわけ?」

「……何のことでしょうか。もしも私の言動でお気に召されない事があつたなら、申し訳……」

「その敬語だつて。異界屋であつた時は、もつとふてぶてしい子供だつたよね」

今思えば、あの時の私はよく無事だつたな。

富廷魔術師という事は、彼は何かしらの爵位を持つてゐるはずだ。彼自身ではなくても、その親は爵位があるとみて間違いない。兵士と違い、魔術師はその職業につくまでに普通は学校に通う。そして通えるのは金持ちだけなのだ。たまに試験だけを受けて受かる魔法使いもいるが、そういう魔術師は富廷には勤めないとあの後、アルファさんに聞いた。

「あの時の『ご無礼をお許し下さい。私は無知な子供でござりました。今はアスター様に拾われた身。精一杯お仕えしたいと思つております』  
「ふーん。感謝してくれてるんだ」「もちろんでござります」

聞かされたばかりの時は、内心腸が煮えくり返りそうだったが、一晩寝ると仕方がないと思えた。それよりも危うくアルファさんやクロを不幸にするところだったので、それを止めてもらえた事に感謝している。もう少し遅く、私が返事した後だったら、アルファさんは彼と真っ向勝負したかもしれない。タイミング的にもナイスだつた。

「じゃあ話は早いや。そのへりぐだつた、敬語は禁止。俺の方が年上だから、場所によつては多少の敬語は使つてくれた方がいいけど、普段は今まで通りで」

「はつ？」

「それと何か勘違いしているみたいだけど、俺は引き取ると言つたんだよ？」

「アスター様の使用者として、引きつとつていただけたんじや……」

「何かおかしいだろうか？」

私は首をかしげた。どこかに預けるつもりで引き受けたのだろうか。いや、でもそれだと料理ができない。料理の方はは一時的とか? 分からん。

「様も禁止。せめて、さんでよろしく。もしくはお父様なら可かな。永遠のお兄さん自称してるけど、一回『やうは可愛い子に』『お父様?』って呼ばれてみたかったんだよね」

「えつと……」

何だ、その気持ち悪い発言は。

可哀そうなものを見るような顔になつてしまつたが、これは生理的な現象なので仕方がない。無礼だと思つたら、そもそも顔を上げさせないで欲しい。

「賢者様のくせに理解が遅いなあ。それほど意外?俺がオクトを養子として引き取つたつて事」

「…………はあ?！」

用紙でも容姿でもなくして、養子?

驚きすぎて、私は大声を出してしまった。文脈からすると、私の頭には、養子の文字しか浮かばないけれど、もしかして違う意味があるのだろうか。

「そう。つまり君は俺の養女という事。俺がパパで、オクトが娘」何か言いたいが、言葉にならない。

旅芸人から一転。私は知らない間に魔術師の娘にジョブチェンジしていた。

、

「何で？」

養女という恐ろしい話で、脳みそがフリーーズした私からようやく出てきた言葉は疑問だった。何を企んでいるのかさっぱり読めない。「ひどなあ。」いう時は、『ありがとうございます。お父様?』だろ?』

ゾワリと鳥肌が立つた。

頼むからわざわざ裏声を出してまで娘役の声を出さないで欲しい。一瞬、キモイと面と向かって言ってしまいそうになつたじやないか。

「……どういう意味でしょうか?」

「オクトは頑固だねえ。だから、家族なら敬語はなしだろ。ただし貴族にはそういうのも五月蠅い奴いるから、外ではソレな。俺も一応伯爵家の一員で、子爵の称号は持つてゐるし、今後そういう場所に行く事もあるだらうしね」

伯爵つて言つた?で、自分自身は子爵?その子供が私?家族?は?  
一体、こいつは何を話してゐんだ。

「……宇宙人め」

「えつ、宇宙人つて何?」

「そうか。異界言語じや嫌味にもならないか。それどころか、いい情報ありがとうござりますか。このやうな。

「この世界以外の生命体の事。それで、何故私がアスターの子供なん

……ですか?」

「おつ。大分と碎けてきたね。でもそんなに理由が気になるのか。  
そうだなあ。しいて言つなら、俺が面白いから?」

「……馬鹿?」

本音がぽろつと出てしまい、私は慌てて口をふさいだ。貴族相手に、馬鹿はない。

でもあまりに回答が馬鹿ばかしすぎたのだからしょうがない。面白そうなんて、そんな答えあつてたまるか。これも彼なりの冗談に違いない。笑えないけど。

となれば考え方の理由は……私から情報を取り出して売りさばくなら、使用人よりも養子の方が効率がいいとか辺りだろうか。使用人なら情報に対していちいちお金が絡んでくるが、養子ならばそれはない。

でもホテルすらまともに使えないほど嫌われた混ぜモノを養子にするつて、リスクの方が大き過ぎるようにも思つ。もしも私がそれほど知識がなかつたらどうするのか。もしかしてこの世界は養子縁組を組むのも解除するのも、使用人の解雇並みに簡単だつたりするのだろうか。

「はいはい。思考の渦に入り込まない。まあ結局はそれが面白いと思った理由だけど。オクトは色々考える生きものみたいだからね。俺は頭使つやつが好きなんだよね。ちょうど結婚しろつて言われてて、いろいろ五月蠅かつたし、いいかなと思つて」

「ば、馬鹿か？！そんな理由なら、今すぐ取り消せ」

私との養子縁組を結婚しない理由に使つたら、伯爵様であるコイツの父親に睨まれてしまつ。跡取りにもならない混ぜモノ連れて行つて『これ俺の娘？だから結婚しない』なんて言い出したら、普通に暗殺されるだろ。不本意な選択だつたのに、何でそれが死亡ルート直結なんだ。ありえない。

私は敬語を使うのも忘れて怒鳴りつけた。

「何で。俺の勝手だろ」

「世の中、俺様だけで生きれるほど甘くない。私が跡取りになれるはずないから。私は混ぜモノだ。親の気持ち考えろ」

もしかしたら、こんな怒鳴りつけたら、使用人の話までバーかもしれない。それでも言わずにいられなかつた。もうどうとでもなれ

だ。私はまだ死にたくない。

「混ぜモノには違いないね。あ、悪い。勘違いさせたかな。オクト  
が継がなくとも、俺の息子が継ぐから、窮屈な思いはさせないよ。  
最低限のマナーは覚えてもらうけど」

……は？ 息子？

駄目だ。話が分からなくなってきた。結婚しろと言われているの  
に、息子がいると言うことは、再婚しろって言われているという事  
だろう。それで養子を迎えて、黙らせる？ 黙るはずがない。

「もう少し分かりやすく、最初から説明してもらえんか？」

私は頭痛がしてきて、頭を抱えた。アスタの行動が意味が分から  
な過ぎる。

「だから伯爵は俺の息子が継ぐから問題ないんだよ。周りが再婚し  
ろって五月蠅いけど、混ぜモノの親になりたがる醉狂な貴族は少な  
いからな。小さな混ぜモノの子供が居るって言えば、しばらくは見  
合いを断れるだろ」

……なんだこの、悪知恵。確かに理由を聞けば、言つている事は  
間違いない。私にまったく優しくないだけで。

「アスタはいいの？」

「俺はオクトが気に入ったから大丈夫」

利害の一致つてやつね。

そしてアスタはあまり人の目を気にしないのだろう。伯爵は息子  
に継がせるという事は、貴族の立場もどうでもいいのかもしれない。

「気に入ったのは、異界の知識？」

もうこうなれば、全てぶっちゃけてもらおう。これだけ混ぜモノ  
が嫌われている事をいいように使っているのだ。性格が悪い事は良  
く分かつた。今更取り繕われるより、私がすべきことをしつかり教  
えておいてもらいたい。

「ああ。それは、どっちでもいいよ。何か知っている事があつて、気が向いたら教えて」

「はっ?!」

「どっちでもいい？」

取り繕つているわけではなさうだから、余計にアスタの事が分からぬ。思考回路が無茶苦茶過ぎる。

「オクトは難しく考えすぎる傾向があるみたいだね。だからさつきから言つていいように俺は、考える奴が好きなんだよ。異界屋の時の最後の質問。何で馬じやなくて車を異界では利用するのかの答え。あれはオクトが考えたんだろ?」

確かにそうだ。あの世界には馬もいる。でも車が主流になつた理由は、知らなかつた。だから今持つていてる情報で推測をした。

私が頷くと、アスタは楽しげに笑う。

「オクトは頭も悪くなさそうだし、魔術師目指してもらいたいなと思つてるんだ」「思話が見えません。

どうもアスタは色々話を飛ばす傾向にあるようだ。言葉が足りないと言つよりも、相手のペースに合わせる事を知らなこよつに思える。もしくはその気がないか。

「何故?」

「嫌ならいいよ。でも勉強して、賢くなつてね

「いや。裏の意味なく、普通に疑問」

別に引き取つてもらつたのだから、魔術師目指せといな田指すし、親の言つ事を聞くいい子でいるつもりだ。お父様と呼ぶかどうかは別として。

「今の魔術師は馬鹿が多いんだ。何にも考えずに、魔法をぶっぱなてばいいとか思つている奴が多くて、俺がつまらない。魔法は喧嘩

に使うものじゃなくて、もっと頭を使って原理を解析して、大衆に知識を落としていくべきものだと思ってる。でもそのレベルで話せる奴がほとんどないんだ」

馬鹿が多いって……あれは賢い人がとれる職業資格じゃなかつただろうか。一座の魔法使いは、やっぱり他の人よりも頭がよく、まわりを馬鹿にしている節があつた。実際それぐらいの知識差があるのだ。でもそんな奴でも魔術師にはなれなかつた。

「オクトなら勉強するうちに分かると思うよ。そして賢くなつたら、俺の話相手して、研究を手伝う事。うん。それを引き取る条件にしようかな。職業は別に何でもいいよ。ただ魔術師になるだけだと、混ぜモノはその後の就職に苦労するから良く考えてね」

曖昧に私は頷いた。

彼の考えが分かるようになるという事は、私もああいう性悪な思考回路になると呟つ事だろうか。……それもどうなんだろう。

ただ知識に飢えているのは間違いないので、かなりありがたい申し出だと思つ。それにアスターの呟つ通り、混ぜモノでも生きていけるように、ちゃんと今後を考えなければならぬだろう。凄い資格であるはずの魔術師になつたとしても就職に苦労するという事は普通の就職はほぼ絶望的ということだ。本来最低目標である自立が、最終目標並みにハードルが高いなんて……私は前世でそんなに悪い事をしたのだろうか。

今後を思つと、憂鬱になつた。

「そういうや、オクトは文字は分かるか？」

人生を儻んでいた私だが、アスタはそんな事知つた事ではないようで普通に質問してきた。まあ当たり前なんだけど。

聞かれた質問を少し考えてから、首を横に振る。アスタの言う文字は日本語ではなく、龍玉語の事だろう。なんとか話し言葉はできるが、読み書きはさっぱりである。

「そうか。まずはそこからか……。なら数は数えられる？」

「それは多分大丈夫」

一通りの数学基礎は前世の記憶でカバーできるだろう。宇宙人と数学でなら会話ができるとかなんとか言った人間が居た気がするが、確かにその通りだと思った。読み方は変わつても、異世界でも計算は変わらない。〇は〇だし、1は1だ。

「それができるなら、まずは買い物にいくか  
「へ？」

どんな話の流れだ。

唐突に言われ、目が点になる。この男の動きが全く読めない。何故数の質問がいきなり、買い物につながるのか。

「何事もまずは腹ごしらえから。オクトも食堂でジロジロみられた嫌だろ。となると、部屋で食べられそうなもの買わないとな。あと服もいるし、洗面用具と···」

「待つて。アスタ、服はある

「あるつて、どこに？」

勝手に話が進んでいく事に慌てた私は、急いで自分が寝ていた場所から鞄を持ってきた。

「アルファさんがくれた。だから洗いまわしで大丈夫

「じゃないな。部屋着として着るのは構わないけれど、外に出る時は駄目だから。それと、それっぽっちでいいわけないだろ。行くよ」私の言葉をさえぎつて、アスターは否定した。折角アルファさんがくれたものなのに……。そんなにみすぼらしく見えるだらうか。混ぜモノとしてさげすまれた時より、なんだか悔しかつた。

でも引き取つてもらつた私に、そんな事を言う資格はないのも分かつている。私は彼に生かされている立場だ。

「金ないから」

だから買えない。せめてもの拒絕で私は言った。

「俺が持つてるから大丈夫。子供に出してもうほど落ちぶれてないつもりだよ」

ちつ。

表情には一切出さず心の中で舌打ちする。もつとも私に払わせようとしている事ぐらいは分かっていた。働く能力がない私を引き取つたのだから、それぐらいの考えはあるはずだ。

「悔しいなら、何も言われないだけの力を付ける事だよ」  
バレた?

言われた言葉にどきりとする。不機嫌になってしまった事は極力顔に出さないように気を付けたのに。アスターはすっとしゃがむと、私と同じ田の高さに合わせた。

「俺だって誰にも何も言われない為に子爵の位をわざわざ貰つたんだ。そしてやりたい事をやる為に宫廷魔術師なんて堅苦しい仕事をしているんだよ。ここでは貴族や王族がルールで、力がないなら彼らの常識に従わなければいけない。好きな服を着て、自分の常識をつきとうしたいなら、よく考えるんだ」

私は頷いた。

貴族に引き取られたならば、貴族に合わせるべきなのは間違いない。それが嫌なら、文句を言われない為にどうしたらいいか対策を練るべきだ。悔しいがアスターの言い分の方が正しい。

そして私の荷物を捨てようとするあたり、彼なりの譲歩しているのも分かった。それなのに彼に恥をかかせるわけにもいかない。

「よし、じゃあ行こう。今日はその格好で良いよ。まずは買い物を覚えてもらつて、必要最低限のものを買えるようになつてもらわないと。しばらくは一緒に、この寮で暮らしてもらうから」

今度は私も反論せず頷いた。ここでは彼がルールだ。

私は歩き始めたアスタについていく。外へ出ると、宿舎の隣に大きな塀があるのが見えた。塀の向こうには、さらにそれよりも高い建物がいくつか見える。初めてみるが、きっとあれは王宮だ。つまりここは王都なのだろう。

「通勤が徒步1分なのが気に入ってるんだよね。王宮の中にも宿舎はあるんだけど、そつちは逆に近すぎて、何かあるとすぐについようを使われるから嫌なんだ。最近は移れつて五月蠅いんだけど」

「……私が居れば、それも断れると？」

「そう。王宮に混ぜモノ連れこむのは嫌がるだろうし、小さい子を1人で育てているって言えば、無茶な召集もかけられないからね」  
なんとなく分かつてしまつた自分が物悲しい。まあいいように利用してくれていた方が、捨てられない理由になるので、自分としてはありがたいけれど。でも何だろう。話を聞けば聞くほど、自分の人生が無理ゲーっぽく見えてきた。

「……混ぜモノにも、ものを売つてくれるだろうか」

かなり色々な場所で嫌われているこの現状。もしかしたら、最終ライフスタイルは、誰も住んでいない山で自給自足だろうか。でもそれが一番確実な生き方な気がしてきた。

職業農民。うん。いいかもしない。

「この町の人は金さえあれば何でも売るよ。多少嫌な顔はするかも

しれないけれど、混ぜモノの金も、貴族の金も同じだからね。ただ飲食店は断られる可能性が高いかな。俺と一緒に通してくれるけど

ど

「アスターが貴族だから？」

「いや、俺が魔術師だから。混ぜモノは忌み嫌われているけど、それは蔑みからじゃなく、恐れからだ。魔術師なら混ぜモノが暴走してもなんとかしてくれるだろうと皆思ってる。もちろん貴族として、金をちらつかせて入れるだろけど」

ふと、何故混ぜモノがそれほどまでに嫌われているのか不思議になつた。

私は同じ人がない為、その姿や成長の仕方が不気味に見えるのだと推測していた。また上手く育たない事の方がが多いようなので、その脆弱さも嫌われる要因だと思っていた。しかし恐れられるのは差別ともどこか違う気がする。

アスターの歩く速さに置いてかれないので、小走りになりながら考えるがしつくりとした答えに行きつかない。

「同胞は、一体何をした？」

「そうだなあ。最近あつた大きな事件だと、今から100年ぐらい前。黄の大地にある国で、混ぜモノが暴走。結果王都が消し飛んだのかな。これは結構有名だね。もつと昔だと、国自体が一夜にして消えたという文献も残っている

「は？ 消えた？」

「そう。混ぜモノの魔力が暴走して、文字通り何も残らなかつたらしい。でもそんなに大事になるのは、本当に稀だよ」

……むしろ、そんな事があつてよく自分は生かされているなと思てしまつた。私の人権は何処に行つたと思ったが、これでも生まれてすぐに処分されないだけ、倫理や人権があつたという事だ。

「ただし稀ではあるけれど、混ぜモノが危険だとみなす動きはあつたんだ。千年ほど前には混ぜモノ狩りという大きな出来事も起こつ

た。でもそれも今は誰もやらない。何故だと思つ?」

「倫理的になましいから?」

「ハズレ。そつちの方が被害が大きかったからだよ。どうも1人殺すたびに村や町が消えたみたいだね。さつき話した国が消えたというのもちょうどその時代だつたはずだよ。狩りに関係しているかどうかは分からなければね。とにかく、そんな黒歴史のおかげで今はどの国も混ぜモノには手を出さない」

アスターの言葉に、私は何と言つていいか分からなかつた。

歩く爆弾がいたら、誰だつて避けて通りたいだろう。これで嫌うなんて無茶だ。しかも爆弾を先に解体しようとすれば、さらに大きな被害……何て迷惑な最終兵器。そしてそれが自分だといふ。

「暴走は、何で起こるの?」

とりあえず、そんな大迷惑な死に方だけはしたくないと思つた。

「さあ。今もまだ研究段階だね。データーも少ないし。良かつたらオクトも研究するといいよ。今のところは精神と密接な関係があるんじゃないかとされてるかな。百年前の事件は結構情報が残つてたから

研究するといいつて、自分自身ですか? いつ爆発するかもしれないのに、怖すぎるわ。なにその迷惑な自虐。

ただツッコミ入れるよりも、話の続きの方が気になるので私は黙つて聞く事に徹つした。

「あの事件は六番目の王女が王位継承するのを兄王子が阻止しようとして、混ぜモノを使って暗殺を図つたのが発端らしい。その時混ぜモノは恋人を人質に取られて無理やり従わされていたそうだ。しかし事故か自殺かは定かではないが人質は死んでしまい、その後暴走が起こっている。そこから感情の高ぶりが暴走引き起こしているのではないかと仮説が立てられているんだ」

……大切な人が死んで、感情の高ぶり。

あれ? それって、もしかしたら、つい最近起こつていませんか?

その事実に行きついた時、頭から血の気が一気に引いた。

百年前の話は私という自我が目覚めた、母親が死んだあの時の状況にとても酷似している。今思えばクロのおかげで私は暴走を踏みとどまれたんじゃないだろうか。クロがいなかつたらと思うとぞつとした。

クロ、マジ勇者。一度と足をクロの方に向けて眠れない。

「ありがとう。よく分かった」

とにかくまずは、自分の感情コントロールを確實にできるようにしようと心に誓った。

## 5・1話 危険な外出

アスターに一通り買い物方法を教えてもらつた私は、その後料理を始めとした家事のすべてを請け負つた。

というか、それぐらいしかやる事がないのが現実だ。

「暇……」

私が外出するのは買い物ぐらいである。他に遊びに行きたい場所もないし、そもそも出かけたくない。それならば室内で遊べばいいのだろうが、どう遊べばいいのかわからなかつた。一座にいた時はとにかく雑用を買って出て、暇になればクロと遊ぶか、アルファさんや団長にこの世界の事を色々聞くかしていたのだ。自分の時間といつもを持つのは初めてだつた。

前世の知識に頼ると子供の遊びと言えば、ままごとや人形遊びなのだが、さすがに今更する気も起きない。むしろ自分がやつている姿を想像するとうすら寒い。結果やっぱりやれる事なんて家事ぐらいいだつた。

もちろん一日中家事をするわけにはいかないでの、それ以外の時間は文字の練習をしている。アスターから文字の基本を教わつたので、それを元に最近はイラストの多い本を読みあさつていた。幸いこの家は、本だけは不要なぐらい充実している。魔法や異世界に関する本が多いが、それ以外も結構あつた。アスターはきっと活字中毒者なのだろう。

とにかくアスターに育児放棄されていると言つても過言じゃないぐらいた放置されている為、私は自由な時間を持て余していた。本を読むのは嫌いではないが、そればかりでは流石に疲れる。テレビもラジオもゲームもないなんて、なんて二ートにつり世界だろう。

「あー……小麦粉がなくないそつ

台所の棚を整頓しながら私はぼやいた。この量では明日の朝食のパンケーキ分ぐらいしかない。ちょうどパンや麺も切れているし、そろそろ買い出しが必要だ。

来たばかりの時は本の森と化していた台所だが、今は私の努力の結果、調味料も並びきつちり使えるようになつていて。水道も完備されていたので共同の井戸を使う必要もなく、その点は本気でありがたい。「ベーコンとか、野菜もそろそろ買わないと」

時間は有り余つてるので、買い出しひらい余裕だ。暇もつぶせる。それでもできれば外出したくなかった。ジロジロ見られるのも嫌いだし、あまり歓迎されていないのもよく分かる。

できる限り最低限の買い物で済むように、私は必要なものを紙に書き出した。

「せめて冷蔵庫があれば、もう少ししまとめて買いだめできるのに」「魔法でも電氣でも何でもいいので、誰か作ってくれないだろうかと本気で思つ。夏場とか、ほぼ毎日買い出しに行くのかと思つと憂鬱だ。冷蔵庫が無理ならネットショッピングでも良い。とにかく家から出たくない。……だんだん発言が二一トどころか、引きこもりになつてきている気がするのがちょっと嫌だ。

とはいっても、誰かが変わつてくれるわけではないので私は鞄を手に取つた。

「今日も何もありませんよつ」「元

私は返しそびれたクロのサインを取り出すと手を合わせて祈つた。最近は外出前にそれが日課になつていて。混ぜモノの力が暴走しない為に精神統一しようと考へた結果こうなつた。外の世界マジ怖い状態なので、とにかく心のよりどころを作つて、安定を図つていてる。

「本当に、本当に、何もありませんよつ」「元

パンパンと最後に柏手をうが、サインをカバンの奥底へしまう。

なんとか気持ちを切り替えると私は外へ出た。

宿舎のはずだが、私は一度も誰かにあつた事がない。まるで私とアスターしか住んでいない気がするが、時折隣の部屋からよく分からぬ音が聞こえたり、反対側から不気味な声が聞こえたきたりするので、人が住んでいないわけではないと思う。会わない理由は私が外に極力出ないようしている事と、きっと活動時間のズレの為だ。ただできる事なら、そんな奇怪な音を出す隣人とは会いたくないなと思っている。

「駄目だ。思考がどんどん駄目人間になつてる」

隣人には笑顔で挨拶。助け合いが大切だ。それなのにできる限り、顔を合わせないようにしようつて、完璧引きこもりの思考である。これではいけない。

一座にいた時は仕事と割り切れば人目もそれほど気にならなかつたのだが、人に会わなくとも済む生活をしていると、どんどん億劫になつていいく。

「行こう。とにかく、早く済ませよう」

買い物には行くのだから引きこもりじゃないと自分に言い聞かせ、商店街へ向かう。その途中、すれ違う人に必要以上に大きく避けられ、さらに離れた場所にいる人からは、遠慮ない視線を貰つた。

「フードが欲しい」

平日の為人通りはまばらなのが、早くもめげそうになった私は小さくぼやく。顔を隠してしまったかったが、アスターはその手の服や小物は買ってくれないので、ドレスはポンと一括払いであつてくれるのにと恨めしく思う。

とはいえた今日はドレスではなく、シャツにズボンと男のような格好をしていた。楽なのでよく着るのだが、この服自体は1人で出歩く時に貴族の女性の装いをするのは危険だろうとアスターが買つてくれたものだ。……ただ顔を隠さない限り、例えドレスを着ていたと

しても何も危険はないようだと思つ。誰ひとり近づく人が居ない為、スリの心配すらない。流石混ぜモノ。嬉しくない天然の防犯だ。

「……もしかしてそれを狙つて、買つてくれないのかも」

とても合理的のようだが、財布は鞄に入れるのではなく、首から下げ服の中に入れるという対策しているので、スられるなんて事ない。

ため息をつきつつも、パン屋で食パンを買つと、私は八百屋に向かう。初日にアスタと一緒にまわつた場所な為売つてくれないという意地悪もされない。

「おや、アスタ様のところの混ぜモノじゃないか。今日は何を買うんだい？」

八百屋につくと、店の親父が気さくに声をかけてきた。アスタと元々知り合いだつたらしい、狐耳のの獣人は、私を怖がるそぶりを見せた事がない。きっと類は友を呼ぶで、アスタの知り合いだから少し人と違う思考をしているのだろう。

「キャベツと二ンジン2本。じゃが芋2個。キノコ3個。あとオレンジ2個」

「玉ねぎはどうだい。今が旬だよ。薄暗い所に上にぶら下げておけば、長持ちもするぞ」

長持ちするのか。だとしたら買つても大丈夫だろ。2人暮らしで、しかも私がそれほど食べない為、食材は使いきれなくなつてしまつ事があった。

「ならそれも。後できたら、キャベツは半玉か4分の1玉で売つて欲しい」

「はあ？ 何でまた。金はあるんだろ」

「私とアスタだけじゃ、食べきれない。値段は少し割高でも、量を少なく売つてくれるとありがたい」

「なるほど。一人暮らし用があ。よし。お前さんに言われた通り、食べ方や保管方法を教えながら売つたら客も増えた事だしな。キャ

ベツは半玉、おまけしてやるよ

ありがたいので私は素直に受け取つておく。貴族のくせにと言わ  
れるかもしれないが、不必要なところでお金を使う必要はないはず  
だ。それに貴族であるのはアスターだけで私は違う。身の丈に合つた  
生活をしていくべきだろ。

「ありがとう。あとは食べ方は口答だけでなく、紙に料理の作り方  
を書いて配るとより親切で、購買欲が上がると思う。イラストが入  
つているとなおい」

「紙を配るのかあ。ちょっと考えてみるよ。それにしてもアスター様  
が言った通り、本当にお前さんは賢者様だな。よくそれだけポンボ  
ンアイデイアが出るよ」

「賢者は言い過ぎ」

むしろ恥ずかしいので止めて欲下さい。

今おじさんに教えた事は、私の純粹なアイデイアではなく、前世  
のスーパーを思い浮かべたに過ぎない。

買い物袋に一通り荷物を入れると、かなり重くなつた。このま  
ま連続で他の店にも行つてしまいたいところだが、私の腕力は5歳  
児と同じだ。たぶん持てなくなるのが目に見えるので、一度荷物を  
置きに引き返すことにする。私はぺこりと店主に頭を下げた。  
「アスター様によるしくな」

私は頷くと、小走りに来た道を戻る。

コンバスの短い脚では、歩くのにも時間がかかった。早く大きくな  
りたい。しかしエルフは成長が遅く、精霊は心の成長に合わせて  
一瞬で成長すると本に書いてあつたので自分がどのタイプになるの  
かは運まかせだ。せめて体は子供、頭脳は大人な状態だけは、マジ  
止めて欲しい。

「考えるの止めよ」

外に出るとナーバスになるので、思考が悪い方ばかりに向かって  
しまう。とにかく早く買い物を終わらせて、家に引きこもるのが一

番だ。

「そりいえば……」

ふと商店街の途中にあるわき道は、宿舎への近道ではないかかと気がついた。若干薄暗いが、私なら誰も近づいてこないので、危ない事もないだろう。

早く帰りたいしな。

私は急がば回れとこの言葉にあえてふたをして、わき道に入った。

何故、あの時わき道に入ってしまったのだろう。

「はあ……」

私はいく度目かになる深いため息をついた。ため息についても、牢屋のカギは開いてくれないけれど。私より少し離れた場所からはしくしくと鳴き声が聞こえ、とても辛氣臭い。

急がば回れ。何故あの時そうしなかったのか。数時間前の自分を罵つてやりたいが、後悔先に立たずだ。私は人攫いに攫われるという失態を犯してしまった。

もちろん混ぜモノである私が積極的に攫われるはずもない。あの時近道だと思った道の先には人攫いにあつている女性がいた。そしてそれを目撃してしまった為に鳩尾に一発拳を入れられたのだ。その後気が付いたら牢屋で転がっていたわけだから、確実に巻き込まれただけだろう。

どうせなら昏倒した後は、そのまま捨てておいてくれてよかつたのに。私なんか攫つても何の役にも立たないはずだ。むしろ相手も扱いに困っているように感じる。遠くでこそこと、話しあつているのを聞いてしまった。

「はあ」

まわりをちらりと見れば、一緒に攫われたはずの人達がビクリと肩を揺らした。私も被害者なんだけどなあと思わなくもないが、私が混ぜモノである事を考えれば仕方がない氣もする。誰だって、爆弾と一緒に閉じ込められたくないだろ？一緒に助かる為に頑張ろうと慰め合つなんて、夢のまた夢だ。

「どうか、私が暴走したらどうするつもりだつたんだろ」

そう考えると、さらつた相手は、それほど頭がよくないのかもしない。少なくとも混ぜモノの知識は薄いのだろう。知つていたら私はこんな目にあわなかつたはずだ。

「アスター、探してくれるかな」

まだ連れ去られた事に気が付いていない可能性もあるが、それ以前に気がついても探してくれるかどうかも分からぬ。数週間一緒に過ごした仲ではあるが、私とアスターは赤の他人だ。面倒だと思えば、何もしないかもしね。一ート生活な私が、それほどアスターの役に立つているとも思えない。

そう考えると自分で何とか脱出する方法を考える方が賢明だ。

入口は鉄格子となつてあり、南京錠でドアは止められていた。窓は部屋の中に一つだけしかない。しかも私ですら通れるかどうかが微妙な大きさな上、かなり高い場所にあるのでそこから脱出は難しいだろう。また牢屋は薄暗く、光は牢屋の向こうにかけてあるランプだけだ。

「おい。飯もつてきたぞ」

声の方を見れば、鉄格子前に1・2、3歳ぐらいの少年がいた。段ボール箱を抱えた少年は、二ツと歯を出して笑う。バンダナから赤茶の髪を覗ぞかせてたその顔はまだあどけなさを残している。それでも彼もまた人攫いの一昧だ。私は注意深く少年を見つめた。これぐらいの子だつたら上手く出し抜けるかもしれない。

「俺だつたらなんとかなるかもなんて思つても無駄だからな。ここには、俺以外にも仲間が居るから簡単に外には出られないぞ」

私の考へている事がばれたのかと一瞬思つたのだが、全員に対する忠告だと気がつきこつそり力を抜く。この少年なら何とかなるかもと、皆考えるのだろう。

「パンと水を配るから並べ」

鉄格子の向こうから少年が声をかける。しかし誰一人として動こうとしなかった。

「まあ1日や2日食べなくても死はないから、俺は構わないんだけどな。いざ逃げたくても動けないって方が俺的には助かるし」  
「ヤニヤしながら少年がいうと、誘拐された人々はひそひそと相談し始めた。そして1人が立ち上ると、釣られたように1人、また1人と立ち上がり、少年からパンと水を貰つて行く。全員が貰い終わつたところを見計らつて、私も立ち上がつた。

「あんたが最後か。つて、ちつさ。何?ママと一緒に攫われたのか?」

私は少年の言葉に首を横に振つた。

「そつか。普通はそんなに小さい奴は攫わないのに。あんた運が悪いなあ。しかも混ぜモノの男かよ。あいつらどうするつもりだ?」

本当にその通りだと思う。私を攫つても風俗に売りつける事は出来ないし……と考えたところで、自分の恰好が男である事を思い出した。まわりを見ると女性しかないので、この少年も私が巻き込まれたのだと思ったようだ。

「混ぜモノならあいつらも下手に殺す事だけはないと思うから、安心しろよ。ほら、パン食べな」

おしつけられるようにパンを渡され、私は頷いた。少年もおびえた様子がないので、私はその場に座り込むとパンにかぶりついた。食べれるときに食べなければという習慣が身についている為、どんな時でも食べられないという事はない。

「いい食べっぷりだな。そんなに、腹減つてたのか?」

私は口クリと頷き、水を口に含む。生ぬるかつたが変な味はしなかつたので、ありがたく飲み込んだ。その様子を少年は立ち去らず、二口二口と見つめる。

それにしてこの少年、一体どんな立場なのだろう。パンの渡し

方等考えると、結構頭がいいように感じる。脅すわけではなく、食べる事が正解だと全員に思わせる言葉回しだった。もしあそこで、暴力に訴えたら、誰も彼に近寄らず、パンを食べなかつたに違ない。まさに北風と太陽だ。

「俺はライ。アンタ、名前は？」

「……オクト」

喋れない設定でいつて油断させても良かつたが、私の場合出し抜くよりも、何か交渉した方が家へ早く帰れる気がした。交渉の為には言葉が必要なので喋れない設定はむしろジヤマだ。

「何だ喋れるのか。お前、親はどうした？」

「いない」

アスターが脳裏に浮かんだが、素直にそれを言つ必要はない。本当の親はいないのだから嘘でもないわけだしと自分に言い聞かせる。「ふーん。結構いい生地の服着だし、どこかの醉狂な貴族の下働きでもしているのか。ちつさいのに大変だな」

……怖ツ。

服の生地から一瞬で本当に近い答えを導き出された私は、内心冷や汗をかく。流石に貴族に引き取られたとは思わないだろうが、貴族と繋がりがあると分かれば何か交渉材料になるかもと思われそうだ。

「ライは、何している？」

「俺？俺は泣く子も黙る海賊だよ」

話を変えようと出した話題だが、あつさりとこの集団が何かを教えてくれた。頭がいいと思ったのだけど、そうでもないのだろうか。もしかしたら私が幼児だから油断しているのかも知れない。だとしたらチャンスだ。

「海賊？」

「そう。海にいる荒くれ者だ。でもソレばかりでもやつていけない

いから、たまにひつやつて陸に上がって、裏の仕事も引受けけるわけ

「裏の仕事?」

「若い娘が欲しいんだってさ。その後どうするかは俺も聞いてないけど」

奴隸か何かだろうか。女性に限定するなら、性的な可能性も高い。……どちらにしろ、私は完璧にとばちりを受けた事には変わりない。

「おい、ライ。飯を配つたら、病人の世話に戻れ」

「はいはい。今行くよ」

「ここからは見えないが、仲間が近くにいるのだろう。声がよく聞こえた。確かに少年を何とかしても、ここから抜け出すのは難しそうだ。」

「病人がいるの?」

「ああ。海の精霊に好かれちまつとなる怖い病気だ。といつても精霊相手に俺らは何もできないしな。看病って言つても飯を持ってくだけだよ。長く航海をしてるとなるけれど、陸に戻れば治るやつもいるし」

「海に精霊? どんな人?」

私も精霊族の血が入つてゐるはずだ。海にいるなんて初耳だ。

「さあ。姿が見えないから精霊なんだし」

……精霊つて何者? 姿が見えないなら、どうせママが生まれたのか。ただ確かに今まで精霊族の人とはあつた事がない。もしかして見えないだけで、結構すれ違つていたりしたのだろうか。

「病気はどんなの?」

「お前質問はぽんぽん喋るんだな。まあ、いいけどさ。海の精霊に好かれた奴がなるだけで、うつる病気じゃないから安心しろよ。ただ壮絶だぜ。歯茎から血が出て歯は抜けて、全身に青あざができるし。そんでもって酷い場合は死んじまつ」

あれ？

海賊と青あざ。航海が長いとかかるという話。そこから私は精霊が引き起こすのではない、別の病気が頭に浮かんだ。異世界なので前世と同じとは限らない。しかしこの世界の食べ物は、とてもよく似ている。

「じゃあ、俺行くから。大人しく今日は寝ろよ」

「待つて」

立ち去ろうとするライを私は慌てて呼びとめた。混ぜモノの私を怖がらず、普通に話してくれる貴重な人材だ。明日も彼が来るか分からぬのだから、交渉するなら今しかない。

「その病気、私なら治せる」

失敗したらもうとんでもない事になるかも知れない。しかしこのまま何もしなくても事態が好転しないと踏んだ私は賭けにでる事にした。

カツン。

歩きかけていた足を止め、ライは私を振り返った。透き通るような琥珀色の瞳が私を映す。何の感情も見えない瞳をまっすぐ向けられ、私は逃げ出したくなつた。タイミングを間違えたかもしれないと一瞬後悔するが、何とか踏みどじまる。

「本当か?」

「……本当」

ビビった所為で、少し反応は遅れてしまつたが、ライは牢屋の前に戻つてくれた。

「逃げる為に、嘘つくと大変だぞ。ここにいたら、少なくともオクトは何もされないんだからな」

確かに何もされないだろうが、何もされずにこの牢屋に一人取り残された方がもっと怖い。海賊たちは混ぜモノについてあまり知らないようだし、取り残された恐怖からバッドエンド直行になるかもしないなんて考えてもないだろ?。自分の手で殺さなければいいとか思つていたらアウトだ。

「治せるよ」

「なんでそんな事知つてるんだよ。誰にも治せない、奇病なんだぞ」「……死んだママに聞いた」

私は嘘がばれないように下を向いた。悲しくてうつむいたと思つて貰えるように言葉を選ぶのも忘れない。ここで前世の知識からとか本当の事を言つたら、頭の可哀そうな子認定までされて、2度と話を聞いてもらえないだろう。

「ふーん。それが本当なら、オクトのママは何者だよ」「知らない

私が聞きたいくらいだ。死ぬ時も何も残さず突然目の前で消えるとか、普通じゃありえない死に方だつた。それに目に見えない精霊が親とか、意味がわからない。無事帰れたら、アスターに色々聞こうと思う。あれだけ本を読んでいるのだから何か知っているはずだ。

「分かつた。信じるよ。で、どうやって治すんだ？」

「取引したい」

ここからが本題だ。私は震えそうになる手を握りしめ、顔を上げた。ここまできたらもう逃げられない。後はライに騙されないようにして、確実な交渉をするだけだ。

「それは俺と？」

「違う。海賊の一番偉い人」

人攫いをするぐらいだから、正義の味方みたいな海賊ではないのは確かだ。約束もちゃんと守ってくれるとは限らないのも分かっている。それでも、まずは話をしなければ進まない。

「それだけの価値がある情報だと思う」

海の精霊に好かれた呪いだと思われている奇病。そう思っている限り、きっと治す事はできないだろう。多くの船乗りの命をこれまで奪つてきて、これからも奪つていいくはずだ。

船長とてこの病気にかかるないとは限らなければ、その治療法は喉から手が出るぐらい欲しいはず。

「ま、そうだな。その話が本当なら、船長も会うだろ。分かつた。連れてつてやるよ。ちょっと待つてろ」

ようやく見せてくれた笑顔に、心の中でそつと胸をなでおろす。怖かつた。

ライは一度その場を離れたが、すぐに鍵の束を持って現れる。思つたより近くに鍵があつたのか、誰かがもつていたのだろう。そのカギを使い、南京錠を外した。

「来いよ」

「どけええええつーー！」

さしのばされた手を取ろうとした瞬間、ライの方へ向かって女性が叫びながら走ってきた。ライよりも大きな背丈なのでそのまま体当たりすれば、ライは吹き飛ぶんじゃないかと思つ。外に仲間がいるつて分かっているはずなんだけどな。

それでも逃げられると、彼女は踏んだのだろう。しかしその瞬間、女性の顔は驚愕に代わり、体が宙を飛ぶ。バシンと音がして地面上にたたきつけられた事に気がついた。

「ちょっと、傷つけるなって言われてるんだから、無駄な努力とか止めろよ。怒られるだろ。どうしてもって言つなら仕方がないけどさ。言つておくけど俺一般人に負けるほど弱くないから」  
にやりと笑つて、ライはパキパキと指の関節を鳴らす。誰もが状況についていけず、啞然としていた。それは私も同じだ。体格から考へると、女性が吹っ飛ぶなんてありえない。

「じゃ、オクト行くぞ。ちなみに逃げようとしたら、アレだから」  
地面にたたきつけられたまま動かない女性を指差されて、私は慌てて頭を上下に振つた。そもそも私の体重から考へると、あの女性よりももっと軽々と吹っ飛ばす事ができるだろ。そしてライは女性とか子供とかが理由で手加減なんてしてくれそうになかった。

私は立ち上げると、牢屋のドアを潜る。もう誰もこちらへ近づこうとしない。皆こちらを注目しているが、逃げる気は失せたみたいだ。それでもライは私が外に出ると、南京錠を再びつけた。

「いっただ」  
歩いていくライの後ろを小走りでついていく。

「おい、何勝手に混ぜモノを外に出してるんだよ」

階段近くまで行くと、縦にも横にも大柄の男がギロリと睨みつけた。座っているはずなのに、ライがまるで小人のように見える。「あんたらだつて、どうしたらいいか困つてただろうが。俺の方が混ぜモノの事を知つてゐるから、面倒みるようになつて言われたの忘れたのか？」

「ふん。そんな小さな混ぜモノなら、殺しちまえば楽なのによ」待て待て。何いきなり、死亡フラグ立つてゐるのさ。しかも殴り殺させそうになつたら、絶対暴走テロ自殺間違えないから。我平然と殺される自信ないから。この脳みそ筋肉族め。私はライの服の裾を掴んで後ろに隠れた。

ライも怖いけど、少なくともライはいきなり私を殺そうとしたりしない。

「だからアンタは万年下つ端なんだよ。混ぜモノはどれだけ小さくても殺すな。そんなのどここの国も知つてることだろ。馬鹿なの？ 死ぬの？」

「待てよ」

「俺、今から船長のところ行くんだけど」

階段をのぼりかけたところで、肩を掴まれたライは面倒くさそうに男を見た。

「それとも何？ アンタを倒してからしか行けないようになつてるわけ？」

「いや。……行けよ」

睨まれた男は顔色を悪くすると、ライから手を離した。大きな男が一回り以上に小さな少年を怖がるのは、何だか不思議な光景だ。ただライはさも当然のように、その横を通り抜けた。

「俺最近一味に入つたんだけどさ、入団試験でここN.O.3を倒しちやつたんだよ。だからあいつビビつてゐるわけ。あんなデカイ形してゐるのに、笑えるよな」

「どうやら私が不思議そうにしてゐたから教えてくれたみたいだ。

でも私は笑えない。自分より体格のいい相手をやすやすと倒すなんて、まるで漫画の主人公みたいな奴だ。正直関わりたくない。

それにさつきの話から察するに、最初から私がある牢屋にいる事が分かっていて近づいてきたという事だ。パンを配っている時は、さも今知りましたという顔をしていたのに。やっぱり信用はしない方がいい。うん早々に彼とはおさらばしよう。

「私の荷物、何処？」

「何で荷物？逃げないならいらないだろ」「必要だから」

嘘ではない。治療に必要なのは買い物で買ったものだが、私が本当に必要なのは最初から持っていた鞄の方だ。あの中には、クロのサインも、携帯電話も入っている。置いていくわけにはいかない。「分かった。確か一か所にまとめてあつたはずだし、まだ売られてないだろ」

階段を登りきると、窓があつた。どうやらすでに夜になってしまつたようで、外は真っ暗だ。何があるかよく分からない。

せめて私が連れ去られた場所から近いのかどうかだけでも分かればよかつたのに。無事ここから出る事が出来ても、帰れるかどうかも問題だ。私では馬車とか門前払いされる可能性が高い。

「おい、オクト。どれがアンタの荷物？」

考え方をしている間に、荷物置き場についたようだ。薄暗い部屋の中に、じちゃじちゃと色んな荷物が押し込められている。鞄以外に置物などがあるが……全部盗品だろうか？統一感が全くない。

「これ。あとこの買い物袋もそつ」

律義に拾つてもらえたようで、私の鞄と買い物袋は同じ場所に置いてあつた。鞄を首からかけ、両手で野菜たちを持ち上げる。

「ふーん。これが必要なもの？まあいいか。貸せよ」

ひょいと私から荷物を取り上げるとライはすたすたと出口へ向か

う。

「取引したいんだろ？早く来いよ

親切？

女人でも投げ飛ばしたりと容赦ないくせに、行動がよく分から  
ない。重い荷物を持たせると、ただでさえ歩きが遅いのが、もつ  
と遅くなると思ったのだろうか。

まあ案内してもらうまでの付き合いだし、どちらでもいいけど。  
私は置いていかれないよう、小走りでライを追いかけた。

「船長入りますよ」  
ライはノックし、ためらうことなく開ける。うん。緊張しているのは私だけと分かっているのだけど、もう少ししゃくり開けて欲しかった。

あの後さらに階段を上った私は、船長のいる部屋の前にいた。1階なら窓から逃げられるけれど、3階から飛び降りる勇気はない。何かあつたら、大人しく観念して、心の中で般若心境を唱えよう。死にたくないけど、暴走の末に死ぬのはもつと嫌だ。

「なんだ、ライか。どうした」

どうやら酒を飲んでいたようで、部屋の中に入るとアルコールの臭いが鼻を突く。船長は獣の特徴や長く尖った耳や紅い目をしていないので、たぶん人族だろう。黒髪に黒目とクロと同じ色だ。若いのか若づくりか知らないが、ロン毛を後ろで一つに束ねている。30代又は40代くらいだろうか。

「さっき俺が担当する事になつた混ぜモノなんだけど、なんか面白い事知ってるんだって」

「ほう」

黒い目が興味深げに私を映す。その目は私の中に詰まっているものを見透かそうとしているように思えた。正直、もつと単純馬鹿な人を想定していたので冷や汗が出る。何で筋肉馬鹿の上司が狡猾そつなのだろ？。こういうのは、N.O.・2とかで、船長は強いけどちよつとお馬鹿とかそういうものじゃないの？……漫画の読み過ぎですね。すみません。

「オクト。アイツが、この海賊の船長。ちなみに魔法使いでもあるから、嘘とか止めた方がいいぞ」

大きな声で説明ありがとう。もう逃げたい。

だから何で船長が魔法まで使えるチートなわけ？そういうのは部下に任せろよと思うが、もし彼がNO・2だとしたら、どうして船長やらないんだろうと思つたはずだ。

それにも夜なのに船長の顔が見えるぐらい部屋の中が明るいのは、多分魔法の力だろう。簡単な魔法なのかどうかは分からないが、そんなに力を見せつけないで欲しい。

「初めてまして、混ぜモノのお嬢さん。俺はネロだ」

「えっ。アンタ、女？！」

「そんなことも分からぬのか。男なら、女ぐらい見分けろ」

それは無理だと思います。

自分で言うのもなんだが、5歳児の体はつるぺたなので男の服を着れば男にしか見えない。むしろ分かるネロの方が怖い。子供に女も男もないだろうに。これ以上無駄話の所為で、私の気力をそがれたくないでの、早々に話を切り出す事にした。

「私はこの海賊で起こっている奇病の治し方を知つてゐる。取引したい」

ネロの顔が楽しげなものになつた。5歳児が取引したいなんて微笑ましいなあと思つてゐるなりいのだが、何となく面白い玩具みつけたと思つてそうな笑みに思えた。嫌だ、この人マジ怖い。そういえば、アスターと最初にあつた時も凄く嫌な奴認定した覚えがある。魔法関係者はきっと頭がどこかおかしいに違ひない。

蛇に睨まれた蛙のことく、目がそらせない。嫌な汗が背中を伝う。

「ほう。あの呪いを解く方法を知つてゐるのか。あれは魔術師でも解決できない奇病なんだがな」

「魔法は使わない」

それは解決させようと魔術師に無理やり協力させた結果なのか、一般論なのか気になる所だが、精神安定の為私は貞になる事にする。

「薬師も同じだ。治療薬らしいものを作らせたが、効いたためじがない」

「ぐ、薬もつかわない」

作らせたという言葉に不穏なものを感じて、言葉がどもつてしまふ。アスターは嫌なやつで済んだけど、この人は怖い。考えるな考えるなと呪文のように心中で唱える。薬師がどうなったかとか、今後の参考の為としても、聞くべきじゃない。

「まあ奴なりに頑張ったようだから、薬師は奴隸商に売り飛ばしてやつたはずだ」

何故、それを今教える。そしてそれは全然慈悲じゃない。なんだ、殺されないだけましだろってか？！奴隸って最悪じゃないか。怖いよ。怖すぎるよ。私はライの服の裾を握り後ろに隠れた。

取引しようなんて馬鹿な発想でした。すみません。逃げていいですか？

「船長。混ぜモノをあまり苛めないでよ。精神が不安定になると暴走しやすいんだから」

「だから鍛えてやつてるんじゃないか。そんな小さな形で取引しようここまで出向いてくれた褒美だ。俺なりの好意だからありがたく受け取れ」

いらんわ、このドウめ。そんな褒美、不燃ごみに出してしまう。早くアスターの家に帰つて、引きこもりたい。……でもその為には逃げなければ。だけど普通に逃げられなければ、取引するしかない。あと少しの我慢だ。頑張れ私。

意を決してもう一度ライの後ろから前に出た。

「私が売りたい情報は、奇病の治療法。それと航海中に奇病を発生させない方法の二つ」

「えつ？！治療法だけじゃないのか？」

ライの素つ頓狂な声に私は頷いた。その様子からすると、本当に

奇病の治療法は見つかっていないのだろう。後は私が想像している病気と同じである事を祈るのみだ。

「それでその情報と何を引きかえたいんだ？金か？」

私は首を横に振った。金はあるにこした事はないだらうけど、アスターに養われている今はいらない。今後貯めるにしても、できるだけ危険な橋を渡らなくとも済む方法にしなければ、また同じような目にあう気がする。

「1つは、私を無事に家まで返して欲しい。もう1つは、今捕まっている女性の解放」

情報は2つ。条件も2つ。情報を考えれば、こんな条件なんでお釣りがくるぐらい些細なものだろう。さあ頷け。ほら、頷け。……マジで頷いて下さい。お願いします。

「今捕まっているだけでいいのか？」

「うん。解放するのは、私が捕まつていてその上で取引をした事を知っている人だけでいい」

船長の言葉に私は頷いた。正直、正義の味方にはなる気はない。むしろ助けて欲しいのはこっちの方だ。ただし恨まれる悪役にもなりたくない。ただでさえ混ぜモノは嫌われているのに、ここで恨みまで買つたら、いつか暗殺バットエンドが待つているかもしない。そういう危ない芽は早めに摘み取つてしまふべきだ。

ベストは毒にも薬にもなりそうにないと、放つておかれようになる事。それは今後の努力次第ができるはずだ。

「ふーん。それだとこちらがお釣りが出そうだな。他に希望はないのか？」

……意外に公正な取引してくれるんだな。

人攫いをするぐらいだから、極悪非道には間違いないはずだ。実はいい人つて事もないだろう。ドクだし。もしかしたら取引する事に何か信念があるのかもしねり。

「また考えておく」

下手に条件を増やして、最初の条件が消されたら困る。特に何かしてもらいたい事はないので、このまま消えても問題ない。

「分かった。取引に応じよう。うちの船員の病状が回復したら、そちらの条件を叶えると言つ事でいいか?」「…

まあ教えてすぐに、はいさよならはできない事は分かつてていた。すぐに治療が完了するわけでもないので、長期戦は覚悟の上だ。私は頷く。

「ではまず、治療法を教えてもらおう」

「……その奇病の名前は【壞血病】。【ビタミンCの欠乏】により、タンパク質組成であるアミノ酸の一つが上手く作れなくなる。結果、血管の損傷などにより死にいたる」

「ちょっとまで。一体何語話してるんだよ」

……何語つて、何語だろう。基本は龍玉語だが、固有名詞は日本語だ。こちらの言葉であてはまるものを知らないのだから仕方がない。もしかしたら、まだその単語は生れてない可能性もある。そうするとやはり日本語を使わなければ説明できない。どうしよう。

「つまり、ビタミンことやらを補えれば、この病気は治るといつことか」

ネロの言葉に私は頷いた。そうだ。細かい話は抜きにして、とにかく治療方法だけ教えればいいのだ。この船長ドウで怖いけど、魔法使いだから頭はいい。拙い説明でも何とか理解してくれるはずだ。「この病気は、干し肉などにはない栄養、ビタミンCの不足が原因。ビタミンCは野菜や果物に多く含まれている」

「なら果物のジュースとか野菜スープを飲めばいいわけ?」

「ビタミンCは熱を加えると壊れる。だから私は生のサラダやジュースでも、絞りたての方が効果的だと思う」

確かにビタミンCは酸化も早かったはずだ。また水に溶けやすい原理を使って、ジュースとかの保存料に使われていた記憶がある。と

り過ぎは結石を作るが、食べ物から摂取するだけならとり過ぎほど食べる事はない。なのでとにかく食べろ方式で大丈夫だろう。

「よし。分かった。今から、オクトを料理長に任命してやる  
「は？」

「ようは食べ物を改善すればいい話だろ。働いた分の給料も出してやるから、しつかり働け。上手く治つたら、航海にならない方法とやらも聞いてやる」

かなり上から目線だが、何とか合格ラインに立てたらしい。まだ安心するのは早いと分かっているが、ホツと息をはく。

でも料理長はまざいよな。私の腕はそれほど良くないし、その上身長は足りないし、重たいものとかも持てない。できないづくして涙が出そうだ。

あと少し頑張ろつ。私は船長の説得を引き続きする事にした。

「先生。ベーコンはこれでいいですか？」

フライパンの上でカリカリに焼かれたベーコンを見せられ、私は頷いた。おいしそうな香ばしい臭いがする。

「先生。キウイ輪切りにできました」

「ありがとう」

私は頷きながら、内心ため息をついた。先生ってなんだ。私はそんなものになつた覚えはない。笑顔の海賊たちに若干引き気味になりながらも、私は皿に料理を盛り付けた。本日の朝食は鶏肉のオレンジソース煮とパン。カリカリベーコン入りサラダにじゃが芋のスープとキウイフルーツ。朝からヘビーだが、海賊たちはこれらをぺろりと平らげる。2食しか食べないのに運動量が半端ないのだからと理屈としてはかつているが、見ているだけで胸やけしそうだ。ただし料理長に相談の上で、私が立てた献立なのでその感想は胸にしまっておく。

私自身は、サラダとスープと一口分のパンだ。アレは無理。

「いやー、すげー。先生の料理は本当に独創的だな」「はあ」

「褒めてるんだから、もつと喜べって」

1回りどころか、3回り以上年と体格がかけ離れた調理長に背中を叩かれ、危うく椅子の上から落ちそうになる。独創的つて褒め言葉だったのか。

「いや。作れるのは料理長のおかげ」「よく解ってるじゃないかっ！」

バンバンとさらに背中を叩かれ、私は椅子にしがみついた。大人と子供の力の違いにそろそろ気がついて欲しい。

「痛いから止めて。でもこれも、そろそろ終わりか……」

怒濤の日々を思い返せば感慨深い気持ちになる。よく生き残った。

2週間ほど前に船長に調理長任命されかけた私は、慌ててその役目を辞退した。その後必死なお願いの結果、妥協案として献立は全て私が立てる事で一応話はまとまつたのは奇跡といえよう。しかしそこからがまた大変だった。

今まで海賊のご飯なんて作った事がない私は、ビタミンを多くとる為のメニューは思い浮かんでもどう組み合わせていいか分からなかつたのだ。今までどんなものを食べていたかを聞きながら必死に献立をたて、その後ライに間に入つてもう一回調理長達に作つてもらうという作業が続いた。

初めは私が混ぜモノである事と5歳児であることから意思疎通はなかなか上手くいかなくて、泣きたくなつた。命の危険と隣り合わせな状態で頑張り、1週間後ぐらいから病状の改善が見られた時はホッとして泣きそつになつた。そして海賊たちになんとか認めてもらえた時は正直泣くと思つた。結局一度も泣いてないけど、涙腺が緩むぎりぎり状態になるぐらい私は必死だつた。その後先生と呼ばれるようになり、今では献立の相談にも気軽に乗つてもらえる。本気でありがたい。

「仲間の病気が治つたら、出ていくつて約束だもんな」

「先生。ここに残ればいいじゃないすか」

いや、それはない。

涙もらい料理長が鼻をすすつてゐるが、実際はそんなに感動できる場面ではない。なんといつてもここは海賊の根城。根つから悪い人たちではないとは分かつたが、元々私は人攫いにあつた被害者なのだ。仲間になる選択肢は絶対ない。それに犯罪者になるのは最後の手段。できるなら、捕まつてバッドエンドコースなんて危険は冒さず、清く正しく生きたい。

「オクト、飯できたか?」

「完成したとこら」

サラダにベーコンをまぶしたとこらで、ライが厨房に入ってきた。

「お、旨い」

「食うな」

「味見だつて」

何が味見だ。ライ達海賊の味見の量が半端ない事は、すでに知っている。こいつらの味見は味見の域を超えているのだ。そもそも何故鶏肉を食べる。そこはソースを舐めるべきだろ。

「運べ。大盛りにするから」

それでもそこを咎めても話が進まないので、初めから他の餌で釣る方がいいと2週間で私は学んだ。

料理担当番達とライに手伝つて貰い料理を運ぶ。

「朝ご飯持つてきたぞ」

「待つてましたつ！」

ドアの向こうにはポーカーで遊んでいる海賊たちがいた。威勢のいい声が飛び、ヒューッと口笛まで聞こえる。これだけで、すでに病人ではないだろと思う。最近は彼らも普段の仕事に混じっているわけだし完治したといつてもいい。

私はスープをよそいながら、いい加減ネロに会わないとな考える。すでに2週間もたつてしまつたのだ。私を含め、捕まつた女性達も限界に近いだろう。

最近見に行つていなけれど あれ？

「……色々不味くない？」

「えつ、味が？」

ぱつりとつぶやいた言葉に、パンを配つていたライが反応する。私はなんでもないと首を横に振つた。

私は船長と取引して以来、ライと同じ部屋で寝起きしている。なので体的に問題はないのだが、あの牢屋に取り残された人たちは、

今もベットもトイレもないあそこに閉じ込められているのだ。あんな場所じゃ、発狂している可能性がある。

「ネロに会わないと」

もう一つの条件である、航海中にどうしたらいいのかを早く教えて、女性達を開放しなければ。病状は改善したのだから、もう信じてもらえるはずだ。少なくとも船長以外の海賊は、壊血病に関しては私を信頼してくれていると思つ。彼らを味方につければ、何とかなるはずだ。

「船長かあ。今日客が来るらしいけど、それまでは本でも読んでるんじゃないか?」

海賊ってそんなに暇でいいものか。

もつと仕事しろと思ったが、すぐに私はそれを否定した。彼らの仕事=犯罪。うん、仕事せずにだらだらしてて下さい。むしろ一生働くな。

「ライ、よろしく」

私は一人でウロウロする事を認められたわけではない。料理中は調理長や、料理当番がいるのでライから離れるが、それ以外はほぼ一緒だ。ある意味私もよく発狂しないなど自分で感心してしまう。まあライは怖いけど、問答無用で怖い事をするわけではないから安心していられるのかもしぬれない。人に観察されるのは嫌いだけど、慣れてはいる。

「じゃあ、船長の飯を持っていくついででいいか?」

別に飯のついでだろうと何だろうと問題はない。早いに越した事はないと思うので、頷く。

一通り配り終わつたところで私たちは料理を持って、船長がいる部屋に向かつた。

「そういえば、NO・2って誰?」

ふと私は、NO・2やライが倒したというNO・3に会つた事がない事に気がついた。会いたいわけではないが、どんな人なのだろう

う。

「えーっと、副船長達は外回りの仕事中だつたはず」  
どうしてだろう。彼らがいう仕事は、不穏なものしか感じられない。  
……まあ海賊だからなんだろうけど。それにしても外回りって、何だか営業みたいだ。

「海賊の仕事つて色々なんだ」

「そ、色々だな。船の修繕が終わつたら、また航海に行くけど、それだけじゃないつて事だな。海賊とその家族だけが住んでる島もあるんだぞ」

絶対近づかない方がいい場所ですね、分かります。

島がどれほどの大きさかは分からぬが、それはすでに國家じゃないだろうか。私は周囲にどう思われようと、できる限り家に引きこもるべきだと悟つた。彼らと一緒に一度と関わりたくない。

「船長、飯持つてきました」

ライは相変わらず中の返事を待たずに部屋に入った。敬う氣があるのかないのかよく分からぬ。それでも船長が咎める事はないので、私としてはどちらでも良いんだけど。

「メニューは何だ」

ライがちらりと私を見た。どうやら私が説明しろといつてらしくい。一応私が立てた献立だし、仕方がない。

「鶏肉のオレンジソース煮、カリカリベーコンサラダ、じゃが芋のスープ、キウイフルーツとパン」

私が喋ると、船長はようやくこちらを振り向いた。私がいると思わなかつたようだ。少し目を見開いた後、にやりと笑う。嫌な笑みだ。私が必要最低限しか近寄らないようにしてていた事を船長も分かっているのだろう。

「先生が直々に持つてきて下さったのか」

「……先生とか止めろ」

「どうしてだ？皆言つていいのだろう？」

ネロが「うと、嫌味っぽいんだよ。

心の中でののしるが、口には出さない。ビビリと罵られようと、

私は私の命の方が大切だ。

「それもできたら止めて欲しい。私は先生ではない」

「ふーん。それにしても来いと言つても、忙しいやらなんやらと言つて来ないくせに、今日はどういう風の吹きまわしだ?」

そんなの精神的に苛められる事が分かっていて、素直に近づくほど私はMではないからだ。避けて通れる危険はできるだけ避けるに決まっている。

「献立を立てるに慣れていたので。時間が取れず、申し訳ない事をした。今日来たのは、船員の病状が改善した事の報告と、航海中の病気予防方法を聞いてもらうため」

「まだ完治したわけじゃないだろ?」

「ほぼ完治した。それは他の船員も納得してくれている。もう普通どおりの食生活で問題ない。だからそろそろ女性達を開放する為の取引がしたい」

私を引き止めてもネロにとつていい事なんてないはずなので、これはただ嫌がらせだ。このどうな生き物はは、きっと損得抜きで嫌がらせをする事に生きがいを感じているに違いない。マジ閑わりたくない人種だ。

「そうか。言つてなかつたな」

ぽんとネロはわざとらしく手を打ち鳴らした。ネロの笑顔を見ると嫌な予感しかしないのは何故だろう。何をされたわけでもないのに、顔が引きつりそうになる。

「女性はもう解放したぞ?」

「は?」

突然の言葉に私は理解が追いつかず、ぽかんと口を開けたまま固まつた。

「オクトが壊血病を治してくれたからな。約束通り、1週間前ぐら  
いに解放してやつたぞ。俺は、優しいからな」

いや、待て。おかしくない？

何故2つめの願いから先に聞かれているんだらう。大切なのは、  
私を無事に家まで送つてくれる事であつて、そつちじやない。そつ  
ちはおまけだ。

「伝えようと思つたのだが、お前は忙しいの一点張りで、全然来な  
かつたからなあ」

「……ライに伝えてくれれば」

「俺は大切な事は自分で言つ主義だ。そうでなければ、面白くない  
だろ」

大変いい主義だと思うが、最後についた言葉が残念だ。隠された  
言葉は、『相手をいたぶれなくて』に違ひない。禿げてしまえ。  
知つていて黙つてのかとライを見れば、首を横に振られた。どう  
やらきつちり分からないように隠していたみたいだ。その辺りから  
もドウ感をヒシヒシ感る。

「とにかく……壊血病の治療が成功した事は認めてるといつことで  
いい？」

これ以上考へても私が必要以上に疲れるだけだ。終わつた事は仕  
方がない。私は色々無視して話を進める事にした。

「ああ。いい仕事だつた。ご苦労だつた。褒めてつかわすと言えば  
いいか？」

「言わなくていい。ただネロが、航海中の対策方法を聞けばいいだ  
け」

「それなんだが、それが効果あるとどうやって証明するつもりだ？」

あれ？

ネロの言葉に、私は雲行きのあやしさを感じだ。嫌な予感しかしない。

「壊血病に効くビタミンCは、熱に弱く、果物や野菜に含まれているのだろう？俺たちの航海は何日もかかるんだ。オクトが今までやった方法は海では使えない。つまりは教えようとしているのは今までとは違う新しい方法ということだらう。それが正しいか俺には分からんな」

ならどうじるところのか……。という言葉は絶対言わない方がいい気がする。証明する為には、実践しかないのだ。もしもここでどうしたらいいかを聞いたら、航海についてこいという返答が返ってくるに違いない。

航海という密室空間に混ぜモノを入れるなんて正気の沙汰ではない話だ。それでもコイツはやると言つたらやる男だという事は身にしみて分かっている。こうなつたら、『航海についてこい』という言葉を言わせないように気を付けるしかない。

「ならば、交渉は決裂だ。女性の解放はもういい。私を家に帰せ」

「女性はもう解放した。それはできない話だな」

「私は私より先に女性を解放しろなどと言つていない」

「どちらを先にしろとは俺も聞いていないのだが？」

このやう。普通は他人より、自分優先だらうが。ネロはその事も十分分かつているはずだ。だから私に承諾を得る前に解放したに違いない。

「分かった。ならば教えた後に壊血病の事で何か不都合があれば、いつでも無償で相談にのる」

「海に出れば、一月は陸地に戻らないところに、どうやって相談にのるつもりだ？」

ニヤニヤとネロが笑う。私が根競べに負けて、乗船を承諾するのを待つていてるのが見え見えだ。そんなあからさまな罠にはまつたまるかと思うが、逃げ道が徐々になくなっている気がするのは何故

だろ？。

「……壊血病はビタミンの欠乏により起こる病気。体にはある程度の貯蓄があり、それがなくなると、壊血病が発症する。しかし欠乏状態にまでには60日から90日はかかる。状態が悪くなる前に、陸に帰ればいい。その時苦情を聞く」

それにしても、こいつのドS病は常軌を逸している。いくら面白いからといって、船長が船員の危険リスクを上げていいはずない。発症するまでの期間まで教えたのだから、この辺りで引いてくれないだろうかと望みをかけて、私はネロを見上げた。

「分かつた。まどろっこじい言い方は止めよう。ここに残つて、仲間になれ」

「船長？！」

「だが、断る」

ライの驚く声も無視して、私は反射的に答えた。  
何でそうなる。私がじつと見つめたのは、仲間にして欲しいからじゃなくて、早く私の条件を受け入れろという意味からだ。何が悲しくて犯罪者にならなければいけないのか。

「何故だ？」

「それはこっちのセリフ」

むしろ何で引き受けけると思うのか謎だ。

その様子を見て、ライはくすくすと笑つた。くそつ。笑うんじゃなくて私を助けてくれ。私はライを睨んだ。私を助けて海賊にさせない事が、将来海賊の命を救う事になるんだぞ。

「オクト、諦めたら？船長は言つた事はどんな手を使つても叶えるぞ」「嫌」

私の答えは完結だ。絶対嫌だ。こうなれば問答無用で壊血病の予防方法教えておこう。私が教えた後、私を家へ送るという事はネロもちゃんと承諾した。言つた事はどんな手を使つても叶えるならば、

必ず一度は家に戻してくれるはずだ。その後は私が引きこもって彼らに関わらなければ済む。あそこは王宮管理の寮だし、家には魔術師のアスターもいる。防犯もばっちりだし、何とかなるだろ？

「約束は果たしてもらひ。壊血病にならない方法は、航海の時にキヤベツを漬け物にして持つていく事だ。火を通さなければビタミンCは多く残る」

「……漬け物？」

「キヤベツを千切りにして、そこに2%程度の塩と、香辛料をいれて、上に重しを置いた料理。酸味が出てくるがこれは乳酸菌の働きで、腐敗ではない」

ネロが私の言葉に反応した。ドSより、知識欲の方が勝つたらしい。ライは、理解したのかどうか分からぬが、へーと相槌をうつている。詳しい作り方と食べ方は料理長に教えておいた方がいいだろ？

「乳酸菌とはなんだ？」

「……目に見えないほど小さな生き物。乳酸菌はその一種。人にとって害があるものは腐敗を起こし、害がなければ発酵を起こす。今回は発酵」

「精靈とも違うんだな」

「たぶん」

精靈＝菌だつたら、私が泣けてくる。祖母又は祖父のどちらかが菌。いやいやいや。それはない。

「コンコン。

ドアの向こうからノック音が聞こえ、全員がドアを見た。

「なんだ？」

ネロが声をかけると、ピラが開いた。うん。このタイミングだよな。ライの場合は返事をまたないので早すぎる。

「船長に会いたいと客がきましたが、どうします？」

ドアの前には大柄の船員がいた。その後ろにフードを被った不審人物がいる。フードの奥にある顔はベネチアンマスクのようなお面を付けており、顔も分からぬ。背丈は小柄で、ライとそれほど変わらないくらいだ。……子供か、または小柄な種族なのだろう。

「何だ。もう来たのか。通せ。お前は仕事に戻つてろ」

この不審人物とお知り合いですか？

そういうば、今日は来客があるとライが言つていた氣がする。まさかこんな不審人物とは思わなかつたけれど。

私たちも一度出ていくべきだろうか。ライを見上げると、彼も驚いたようだ、目を見開きマスクマンを凝視している。あの姿をみれば無理もない。

「また後で来る」

客なら仕方がない。私は出て行こうと踵をかえした。

「待て。ここにいろ」

「は？」

さつき、船員を追い返したじやん。

私もまだご飯を食べていないので、できたら一度腹ごしらえをしたい。

「女どもを逃がしたのは、コイツが原因だ」

待て待て待て。どういう話の流れだ、それ。

今部屋にいるのは、私とライとマスクマン。私やライに言つた言葉ではないという事は、マスクマンに對して話しかけているのだろう。捕まつた女性の事を知つているという事は、つまり女性を攫う様に指示したのは彼か、その上司といつ事だ。

売りやがつた。

私は一気に血の気が引いた。慌てて、ライの後ろに隠れる。依頼主が来る事が分かつていたら、キャベツの漬け物の件や欠乏症にな

る期間を先に教えなかつたのに。今私はネロにとって、さほど価値がない状態だ。このドウめ。最悪すぎだ。

「へえ。面白い混ぜモノはやっぱり君の事だったのか」

フードの奥から聞こえた声は思つたより高い。子供だろうか。マスクマンがフードを外すと、そこからキャベツ色の髪の毛が出てくる。

……凄く見おぼえがある気がするのは気のせいだろうか？

「またあつたね。ドールちゃん」

マスクを外すと、そこには旅芸人一座で会つた、キャベツ色の髪の少年がいた。開いた口がふさがらないとはまさにこの事だ。状況がつかめず、茫然とする。

何故あの時の少年が、海賊の船長と知り合ひなのか。いい身なりをしているし、犯罪者と関わりがあるようには見えない。

「王子……何でここに？」

「いつまでたつても、君らが仕事をしないから見に来たんだよ」ライの口から出た、聞いてはいけない単語に私の気は一気に遠くなる。王子……げふんという事は、彼はこの国で前から数えた方が早いぐらい偉い方だ。さらに具体的にいえば、アスターの寮の隣に住んでいたりするわけで。

このまま氣を失えればいいのにと切実に思つが、残念な事に私の神経は図太かつた。

「やはり、ライは王子の差し金か」

「そうだよ。役立つたでしょ？僕からの仕事が終わるまでは貸してあげるよ。ただあまり時間がかかるのは困るなあ。今回の仕事の遅れた分は彼女を貰う事で手をうつよ」

勝手につつな。反射的に私は心の中で反論する。もちろん不敬罪になりたくないの、口にはしないけど。それにしてもなぜ王子と海賊が知り合いで取引までする仲なのか。意味がわからない。

「それは困る。俺は今、オクトと取引の最中だ。確かに仕事の遅れはこちちらに非があるから、何らかの形で償おう

私の意をくみ取つたかのように、ネロが反対した。正直意外過ぎて、マジマジとネロを見る。私の事はもう用なしで、ついに売られるのかと思っていた。

「人が嫌がる事が大好きという性格、いい加減に治した方がいいと思つよ」

王子の言葉に、私はすぐさま納得した。なるほど、だから反対したのか。

「お生憎さまだな。そういう性格じゃなかつたら、海賊の船長なんてやらん。ただ今回は別だ。この混ぜモノは使える」

「……それなら、二つともそれなりのお金を出すから売つてくれないかな？」

「やらんと言つてるだろ」

女性なら一度は夢見る憧れのシーンだらう。しかし私は2人の男に取り合ひされても全然嬉しくなかつた。きっと2人とも、私と関わりのないところで生きて欲しい人種だからに違ひない。争うなら、私と無関係なところで、無関係な話でお願いします。私なんて全然役立ちませんよと心の中で叫ぶ。

何故こうなつた。

とりあえずネロがただの海賊ではないという事は分かつた。国家権力と取引する海賊なんて普通じやない。そして王子が何の理由もなく自分の国の女性を攫わせる事もないだらう。

「……騙された」

私は色々無駄な事をしていたのではないかと今更ながらに気がついた。



## 7・1話 引きこもりな生活

引きこもりたい。

王子VS海賊なんて頭の痛いものを見せられて、私は逃げ出したくなつた。ああ。もし私が魔法使い、または魔術師ならば、簡単にアスターのところへ帰つて、引きこもりになれるのに……。

ふとその考えは凄くいいように思えた。そうだ。魔法使いになれば、「こんな面倒事に巻き込まれずに、瞬時に逃げる事ができるはず。」  
「オクト、あいつら止めてくれ」

「……嫌」

「どうか無理。関わりたくない。」

私の事を話しあつているのは分かるし、ライの願いを叶えてあげたいが、近寄りたくない。巻き込まれたくない。私に自己犠牲精神を求めて無駄だ。

「ちょっと、賢者様。君の事を話してるんだよ。何他人事みたいなふりしているの？」

「ん？ 賢者なのか？」

無理に話に加わらせないで下さい。

しかも賢者ってなんだ、賢者って……。お前は私の事をいつもドールちゃんとかふざけた名前で呼んでいただろ。そう呼ばれたいわけではないが、賢者なんて恥ずかしい呼び方も止めてほしい。

「私は賢者じやない……です」

「でも、君のお父様にそつやつて聞いたんだけど」

「へ？」

お父様？私の父は不明で……お父様？！

脳内検索が、1件のヒットを導き出した。お父様？と呼べなんて寒い事を言いだした魔族が確かにいた。

「アスター？」

「そう。アスティリスク魔術師が、君が帰つてこないから仕事が手につかないとか言って、さぼるんだよ。だから正直、早く戻つてもらいたいだよね。あの魔族、魔術師としてはかなり優秀だから、仕事をしないのは困るんだよ」

アスターが私を待てている？

もしかしたらさぼる口実ができるラッキー程度の発言かもしだい。それでも私の事を忘れたわけではないという事だ。

「帰ります……。帰りたいです」

そこに私の居場所があるならば、そこが私の帰る場所だ。

「ライが親はいないと言つていたが、嘘だつたのか」

「……嘘じやない。アスターは私を拾つてくれただけ」

養子縁組を勝手にされているらしいけれど、細かい事は知らない。

実際アスターとの関係は親子は違うと思う。友人という関係でもない。主従という関係はアスターが否定している。あえてこの関係に名前を付けるならば……協力者だろう。

「少し遅かったというわけか」

「だからいい加減諦めててよ。そして早く僕からの依頼をこなしてくれないかな？」

そういえば、そうだった。王子は海賊に、女性を攫う事を命令していたのだった。何故という言葉が頭に浮かぶが、口には出さないように気を付ける。聞いてしまったら、おかしなことに巻き込まれるに違いない。ここは全力でフラグを回避するべきだ。

「それに賢者様は大きくなつてからの方が、もつと面白くなると思うよ。彼女の親は魔術師であり、この国の研究者だからね」

ぞわぞわと鳥肌が立つた。面白くなるつてなんだ。ここで縁が切れたら、一度と関わるつもりないから。

「ふーん」

ネロはニヤニヤと笑いながら、値踏みするように私を見た。この悪人めと罵りたいが、海賊にとつてそれは果たして罵り言葉になる

のか。

「なら。将来就職する時は、俺のところに来い」

「海賊は、職業か？」

私の言葉にライが腹を抱えて笑いだしたが、そこは切実な問題だと思う。会社員ではないだろうし、自営業でもない。船乗りではなく海賊なのだから、ただの犯罪集団……。

うん、やつぱり一度と近づかない。

「ああ。いい職場だ。仕方がないから待つていてやる。ただし出て行く前に、料理長に先ほど話した予防方法を伝えておけ。それとライに手伝つてもうつて、紙にも残せ。それがお前を家まで返す条件だ」

「うひして、私はよひせやくネロとの交渉を終える事ができたのだった。

「先生。風邪引くなよ」

「先生、俺、先生が戻つてくるの待つてゐる」

いや、戻らないからね。

海賊つて、人情が厚い奴が多いのだろうか。一緒に料理をした船員や、病気を治した船員たちが私をぐるっと囲つている。というのも、私がこれから家に帰る所だからだ。

ネロとの交渉の後、「ご飯を食べ、すぐさま壊血病の予防方法を紙に書く作業に取り掛かつた。といつても、まだ文字を書く事が苦手な私はライにかなりご協力いただく事になった。その間紙を何枚か駄目にしてしまったが仕方がない事だと思う。早くこの世界でも鉛筆と消しゴムを開発して欲しい。

1日かかるて何とかできたそれを料理長に説明した時には、どつぶり口が暮れてしまった。それでも何とか任務完了した私は、家に帰る為に王子様の近くにいる。

「ほれ。新しい野菜だ。持つて帰れ」

「ありがとう」

調理長に渡された買い物袋には、私がここに来る前に買った材料と全く同じ材料が入っていた。腐ってしまうので確かにここで使つたが、まさか新しくもらえるとは。意外に律義な海賊だ。

「これも持つていけ」

ネロが麻袋に入った何かを私に投げた。野菜を下に置き、慌てて受け取める。小さな袋だが、思ったより重量があった。危ないだろ。頭に当たつたらどうするつもりだ……と思つたけれど、どうするつもりかはすぐに想像がついた。強制的に助けられて、助けたお礼をせびられるんですね。分かります。

中身は何かと開いて、私は固まつた。金貨や、宝石と思われるものが詰まっている。

「何、これ」

「ん? 知らないのか。黄金色の物が金貨で」

「そうじゃなくて、何でこれを私に?」

この世界でも、金や宝石は高価なものだ。相場は知らないが、それが一般庶民ではなかなか手に入らないものだという事くらいは分かる。

「2週間の給料と、壊血病の情報料だ」

「多すぎる。こんなに貰えない」

「安心しろ。貰いものだ」

言葉は正しく使え。それは貰つたんじやなくて、奪つたの間違いだ。そんなもの、國家権力の前で見せていいのかと思うが、王子はいたつて平然としている。まあ海賊とお付き合いして、人攫いまでさせるぐらいくレイジーな王子様だ。盗品程度じゃ今さら驚かないのだろう。

「それと王子。オクトの親に、情報の値段相場をきつちり叩きこむように伝えておいてくれ」

「分かつてるよ」

どういう意味だそれ。私がまるで価値観がずれているよつな言い草だ。納得できないが、麻袋を突き返しても受け取つてもらえそうにないので、鞄の中にしまう。

後から返せつて言つたつて、知らないからな。けつ。

「そろそろいいかい？ 賢者様」

「……私は賢者じゃないです」

「ならなんと呼んだらいいのかな？」

「オクト。……とお呼び下せー」

王子に手を引かれて、幾何学模様が書かれた場所へ移動する。野菜はライが持つてくれた。流石に片手では運べないのでありがたい。幾何学模様の中心に来ると、ライは荷物を私の足元に置いた。そして自身は模様の外へ出る。

「ライ、引き続き頼むよ」

「分かりました」

王子の言葉にライが膝を折る。

「我が名はカミュエル。我が声に答え、繋げ」

石墨かなにかで書かれただけの模様が、声に反応したかのように緑に輝いた。

次の瞬間目の前からライや海賊たちが消える。それどころか先ほどまであつた天井が満天の星空になってしまった。啞然として見渡せば、目の前には見覚えのある宿舎があった。

帰つて來たのだ。

そう理解できるまでに数秒かかってしまったほど、一瞬の出来事だつた。

「転移魔法？」

たしかアスターも私を引き取つた初日に使つていた。

「転移魔法には違いないけれど、今のは魔法使いでなくとも使えるものだよ。魔法陣に使用者の名前や情報、転移先が細かく書かれていて、式を間違えたりしなければ誰でも使えるかな。ただし開発段階だから、誤作動がよく起くるんだよね。まだ実用には程遠いかな」

「誤作動？」

「多いのは体の一部だけが転移されてしまつたり、移動先で上手く体の構築ができないとかかな」

「発動しないとかじゃないんだ。……めちゃくちゃ物騒な魔法だな。上手くいったからいいものの、できるならば、時間がかかるつてももつと確実な移動手段を選んで欲しかつた。

「今みたいなものを、アスター・リスク魔術師は開発しているんだよ。さあ、お帰り。家で彼が待つてゐるよ。本当は君ともう少し話したいけれど、今日返さないと1ヶ月有給を貰うと言つていたからね」「ありがとうございました」

私は王子に頭を下げた。できたら一度と関わりたくないが、彼のおかげで助かつたのも事実だ。下手したら、私は今頃海賊に強制ジヨブチエンジだつた。笑えない。

「失礼します」「

私は買い物袋を拾つと、部屋へ向かつて歩いた。久しぶり過ぎて、少しドキドキする。アスターは本当に私を迎えてくれるだろうか。

「そうだ。オクトさん」

「なんですか、王子？」

「私の事は、カミューとよんて欲しいな。じゃあまたね」

一瞬で王子の姿が消える。きっと転移魔法だろう。今度は先ほどと違い足元に魔法陣もない。カミュ王子は魔法使いなのだろうか？しばらく誰も居なくなつた場所を見つめていたが、意を決して私は家へ向かう。

ようやくたどり着いたそこは、記憶と全く変わりなかつた。当たり前だ。まだたつた2週間しかたっていない。でもたつた3日で、人生が変わつてしまつことも私は知つている。

カミュ王子はアスターが私を待つていていたが、今もそうだろうか。もうどうでもいいのではないだろうか。私は混ぜモノで、何にも役に立たない。

ぐるぐると駄目な可能性ばかりが浮かぶ。でもそうやって心の準備をしなければ、もしだめだつた時に私は精神を安定させていられない。

ガチャ。

ドアの前で悩んでいると、先に扉が開いた。中から出てきたのは、記憶と全く変わらないアスターだ。少しだけ驚いたように目を見張つたが、紅い瞳を細め、私を見下ろした。

「おかえり。遅かつたな」

何気ない言葉だ。でもその言葉だけで、私は大丈夫だと思えた。気が抜けると同時に体がくすれ落ちそうになる。思った以上に神経が張つていたらしい。少しふらつくと、アスターが私の体を支えた。

「ただいま」

ようやく私は帰ってきた。

ああ、引きこもり最高！

「ふーふーふーん」

私は鼻歌交じりにパスタを茹でながら幸せを噛みしめていた。1週間ほど前まで海賊のお世話になつていていたころを思うと、涙が出るほど幸せだ。本まみれの台所だけれど、私にはここが楽園に思える。そして何より外出に恐怖を覚えた私が冷蔵庫や冷凍庫を魔法で作れないのかとアスターに頼んだら、あっさり作ってくれた事も嬉しい誤算だつた。機能などを説明したら、魔法石を使えばできるとの事。よく分からぬ原理を使ってはいるが、冷蔵庫と冷凍庫に変わりはない。アスター様様である。おかげで、買い物も週1回行けば十分になつた。生の肉や魚も簡単に使えるようになつた事もありがたい。駄目人間で結構。二ート生活最高！今なら声高々に言える。……褒められた事ではないが。

「オクト、おはよう

「おはよう」

だらしなくあぐびをしながら、アスターは寝室からやつてきた。田がまだぼんやりしているが、積み上げられた本に躓かないのは流石だ。

「今日は何？」

「ナポリタンと、温野菜サラダとコーンスープ。もつ少し待つてて」パスタのお湯を捨てながら答える。いつもなりば、アスターが起きてくる時間にはでき上つているのだが、今日は珍しく早い。

「いいよ、ゆっくりで。それにしてもオクトが帰つてきてくれてよかつたよ。この時間の食堂は混み過ぎていて行く気になれないし、

数週間どれだけひもじかつたか。部屋で食べられるこの幸せ

「そこは食堂に行け」

私の事を探してくれた話しさは少し聞いたが、この話を聞くと娘として探されていたのではなく、飯炊き要員として探してくれていたように感じる。いや、やるべき仕事がつて、頼りにされてるのはいいことで不満があるわけではないのだけど。それでも何だか微妙な気分になる。……男を捕まえるには胃袋からといつ話を前世かどこかで聞いたからだろうか。

「今更嫌だよ。起きてすぐ身支度して、混んでいる食堂でもみくちやにされるあの辛さ。そして食べ終わったら、また着替えてから出勤しないといけないって、馬鹿げてるだろ。そんな時間があれば、俺なら寝るね。本当に貴族つて面倒だよなあ」

そもそも、自分で料理を作らず毎食外食できる事がすでにセレブ的発言なんだけどなと思わなくもないが、実際セレブなんだから仕方がない。もっとも王宮に仕えていてなおかつ宿舎を使っている人は一人身男性が多いので、必然的に食堂が繁盛するのだけれど。

「そんなんに嫌なら、使用人を雇えばよかつたんじゃ……」「他人を入れるなんてもつてのほか」

私も他人なんだけどなあ。

そう思うが、ここで捨てられたら困るので黙つておく。今の私を置いてくれそうな場所は、ようやく逃げ出せた海賊だけという事実がつらい。

「何より、飯がマズイのは許せないだろ。美味しくなかつた時の絶望感といつたら、一日やる気がなくなるよ」

作つてもらつておいて、その言い草はないだろ。

そもそも、私を引き取るまでは使用人に作つてもう又は食堂での食事だつたはずだ。それでも仕事をしていったのだから、仕事をさぼりたいがための、いいわけにしか聞こえない。

新聞を読みならがらうだうだ言つている駄目親父を私は横目で見ながら料理を進める。これで仕事ができるというのだから詐欺だ。

仕事仲間の人たちの心中お察しする。

「そうだ。右と、左どっちがいい？」

テーブルの上に料理を並べているとアスタが何やら封筒を取り出した。どちらがいいというか、それが何かも分からない。……私はじつとその一つを眺めた。

「何それ

「運だめしかな」

おみくじみたいなものだらうか？

右の封筒も左の封筒も真っ白で同じように見える。蝶に押された印が唯一違つたが、家紋など知らないので結局どこから届いているのか分からぬ。

「さあどっち？」

「……右」

ただどちらを選んでも嬉しくない事が待つていつなのは何故だろう。正直選びたくない。それでもこり笑顔で言われて、私はしぶしぶ右を選らんだ。

「よし。じゃあオクト、『飯食べたらドレスに着替えておけよ』

「へ？」

「7泊8日。豪華伯爵邸への旅、大当たり」

……は？

ぽかんと私はアスタを見た。封筒から手紙を出しほらと見せてく

れるが、達筆過ぎて龍玉語初心者である私には読む事ができない。

「ちなみに左だったら、王子様と楽しむ夜会の招待状だつたんだけどな。こつちは断り入れて置くよ

「む、無理っ！」

「えつ？夜会の方が良かつた？」

「違う。どつちも無理

伯爵邸というのは、きっとアスターの実家の事だ。私は混ぜモノであるばかりか、アスターの婚姻を邪魔したという注釈までつくれ介者。今のところ暗殺はまではされていないが、居心地は悪いに決まっている。そんなところで神経すり減らしたくない。

かといって、王子様と楽しむ夜会なんてもつての外だ。2度と関わりたくないと言いを立てている相手の夜会なんて何が起きるか分からぬ。そもそも何がどうして、そんな招待状が届くの。混ぜモノが王宮に入つてはいけないはずだ。というか、入れるな。

「そんな我儘言つちや駄目だよ。ほら、座つて。まずは冷める前に

「飯食べようか」

「我がままの一言で片づけられるような話題ではないはずだが、アスターの言つ通り、できたての方が美味しいので私も席に座る事にする。

「伯爵、つまり俺の親なんだけど、前々からオクトを連れてこいつて言つてたんだよ。ちょっと今回迷惑をかけたから、流石に断れなくてね」「迷惑？」

「些細な事だけどな。まあ、とにかく、一度ぐらいは挨拶しても罰は当たらないだろ。俺も有給を使い損ねているから丁度いいしね」「ならせめてもう少し早く言つて欲しい」

確かに養子として引き取られているのだから、例え毛虫のようこそ嫌われていようとも、礼儀として一度は挨拶すべきだとは思う。思うが、心の準備どころか、何にも準備もできていない。

冷蔵庫は問題ないけど、冷蔵庫の中身は7泊8日はもつてくれないと思う。精神的に疲れた状態で帰ってきて早々、とろけた野菜やしなびた何かと対面したくはない。

「だつて今決めたし。それに夜会でも旅行でも可能なように、今日はわざわざ早起きして上司に有給出してきたんだよ。俺つてば偉い」「物には計画とこうものがある

無計画は威張ることではない。

そういうえば、私を引き取った時も急だつた。その日のうちに寝る場所もないここへ連れてきた事を思うと、計画的とはとても思えない。座右の銘は無計画。それで人生上手くいくだと?……禿げちらせ。

「ちゃんと計画立ててるよ。旅行の場合は、着替えた後に伯爵邸に転移するつもりだし。夜会の場合には夜が遅くなるから、これから一度寝るつもりだつたし」

そんなもの計画とは言わない。

「……伯爵邸への訪問の返事は?」

「えつ。実家だし、いらないだろ」

駄目だコイツ。

いきなり泊まる人数を増やされて、慌ててベッドメイキングするマイドさんや、食数を変更される厨房の方々の苦労がしのばれる。

「連絡、お願いします」

すでに私に対する好感度は、混ぜモノでマイナス。さらにいきなり養女になつて結婚妨害したことでマイナスと、マイナス続きだ。これに無計画までプラスされたら、もう挽回の余地なしだ。そもそも挽回は無理かもしれないけれど、私の責任ではない所で常識無とされてマイナスはされたたくない。

「我儘だなあ。まあいいけど」

我儘はどつちだと思うが、ソリでソリを入れても話が進まない。アスタが行くと決めたら、行くしかないのだ。私はナポリタンを食べながら、冷蔵庫の中身をどうするか考える事にした。



『良ければ食べて下さい。いらなければ、捨てて下さい。アスター  
スクの娘より』

私は隣の部屋の玄関前に常温でも構わない野菜や果物、そして夕食用に作つてあつた焼き菓子を置いておいた。本当は外に置くのは気が引けるが、両隣とも奇怪な音や声があるので、声をかける勇気が出ない。きっといらなかつたら、処分してくれるはず。

何度か手紙を読み返して、誤字がない事を確認した私は部屋に戻つた。

「そろそろ行くよ」

部屋に戻ると、正装したアスターが椅子に座つて本を読んでいた。片づけは全て私一人で行つてるのでとても優雅だ。ここで紅茶かコーヒーでもあれば絵になるのだが、生憎すでに片づけを終えているので、今更カップを出す気にはなれない。

ん？……絵になるつて、コイツ美形だつたのか？！

今更ながらの発見である。いつも適当な服、または王室指定の魔術師の制服を着込んでいたので、全く気がつかなかつた。

「どうした？」

美形で、金持ちで、将来性のある職業……伯爵邸では、土下座を準備しなければならないかもしね。これなりきっと、2度目とはいえ、結婚話もかなりあつたはずだ。

「えーっと、ああ。そういうえば、息子さんもいるの？」

「アイツは学校だよ。今年院を卒業したら、伯爵邸に戻ると言つていたな」

思っていたより大きな息子らしい。アスタが結構若く見えるから、私と同じぐらいか少し上ぐらいの年齢だと思っていた。いや……待てよ。私は何か根本的な見落としをしているんじゃないだろうか。

「準備はできたみたいだね。行くよ」

「へつ、ちょっと待つて」

アスタに肩を叩かれる寸前に自分の鞄を手に取った。そして次の瞬間目の前の景色が変わる。先ほどまで部屋の中にいたはずなのに、目の前には大きな屋敷がそびえたっていた。その向こうには山が見える。

私が今住んでいるアールベロ国は山に囲まれた地形をしていた。それでも王都は平野であり、山などない。むしろ海が近いそうだ。まだ一度も行つた事はないけれど。

「山が珍しい？」

「珍しくはないけれど、王都と全く違つから……」

「ここは王都よりも西に位置している場所だよ。あの山も含めてこの辺り一帯が、伯爵家の領地かな。この通り山も近いから、秋には樹の神の恵みに感謝して大々的なお祭りをやるよ」

きょろきょろと見渡していると、アスタが説明した。

この国の貴族の役目は大きく二つに分かれる。領地を守りその土地を治める公爵、伯爵。王都で王を守り政治を手伝う、男爵、子爵。もちろん男爵が領地を持つていたり、公爵が政治に関わっていたりもするが、基本はその形である。それについては、知識として知っていた。しかし山も領地とは、伯爵というのは一体どれぐらいの規模を納めているのだろうと遠い目になる。大きな屋敷は想定内だが、領地まではあまり考えていなかつた。

「良かつたら、後で山も探索するといいよ。魔の森と呼ばれるところ以外だつたら、ちゃんと道もできているしね」

「魔の森？」

「そこに入ると、道に迷いやといんだよ。だから魔の森と呼んで誰も近づかないんだ」

なるほど。きっと磁場が狂っている場所なのだろう。魔の森なんて言うから、魔物が出るとかだつたらどうしようかと思つた。

ただ……そもそもこの世界に魔物はいるのだろうか。RPGもどきな世界だけ、魔物を倒して金貨やアイテムを得るつてエグイしなんだか嫌だ。それはゲームの魔物と同じく嫌われ者の立場だから、余計にそう思うのかもしれない。

「おかえりなさいませ、アスタリスク様、オクトお嬢様」

突然ドアが開いたかと思うと、執事とメイドが屋敷から出てきた。メイドさんの頭には獸耳があるが、アレは本物。思わずドン引きしかけてしまつたのは、思わぬ前世知識の伏兵だ。

「荷物をお持ちします」

アスターが荷物を渡したのを見て、私も渡すべきかと迷う。できたらお守り達が入つているので、持つていい。それにメイドさん達も混ぜモノの荷物など持ちたくないだろう……。でもそれはマナ一違反になるだろうか。うーん。

「オクトの荷物は別にいいよ」

困惑していると、アスターが先に断つてくれた。どうやら荷物を渡さなくとも、タブーにはならないようだ。ほつと息を吐く。そういえば、アスターの家に引き取られてから、マナー的なものは何も教えてもらつていない。……これ、結構ヤバいんじゃないだろうか。

「かしこまりました。それとアスタリスク様、旦那さまがお呼びでございますので、お嬢様と一緒にご案内したいのですが、よろしかつたでしょうか？」

「うん。俺も挨拶する為に来たし構わないよ」

とうとうこの時が来たか。私はじくりと唾を飲み込む。

色々好感度がマイナス続きだったが、そこにマナー知らずという

マイナス項目が加わった。これはきっと土下座どころか、スライディング土下座レベルに違いない。ああ、私の人生終わった。

「オクト」

アスターは私の手を掴むと、ずんずんと屋敷の中へ進む。どうやら二の足踏んでいた事が、ばれていたみたいだ。やってしまった。どんな理由であれ、混ぜモノの私を引き取つてくれたアスターに迷惑をかけるわけにはいかない。たとえステイディング土下座をする事になろうともだ。

「あつ、あの……」『め

「心配しなくても大丈夫だから」

謝ろうとしたが、その言葉にアスターが別の言葉をかぶせてきた。

「オクトはただ隣にいればいいよ」

「……そういうわけにはいかない」

確かにマナーも知らない自分は、これ以上粗相しない為にもあまり話さない方がいい。しかしアスターに引き取られる事を最終的に決めたのは私だ。ならば自分の口から謝罪をするのが筋というものだろう。

「オクトは堅いなあ」

たぶん、アスターが緩すぎるのでと思つ。

「こちら手前に段差がござりますので、足元にご注意ください」歩いていると執事が真面目な顔で教えてくれた。

……まだ若いから大丈夫なんだけど。アスターも息子さんの話を考えると、実は若づくりなおっさんな気がするが、足元が覚束ないほど高齢でもない。

「あ、ありがとう」

色々ツッコミはあつたが、とりあえずお礼を言つ。

気の使いどころが若干おかしい気がするが、混ぜモノに対する嫌悪感をおぐびにも出さないとは、かなりできる執事だ。品良く飾られた置物も高価そうだが、このサービス精神あふれた社員教育も馬

鹿にならないぐらいお金をかけているに違いない。流石、伯爵家。「オクト。使用人に、礼とか言わなくてもいいから。まあ慣れないだろうし、この家の中ならいいけど、外は駄目だからね」

「……はあ

御礼も満足に言えないとは、貴族マナー難しそう。それにしても、今までの人生の中で扱いと百八十度違う周りの対応が、恐ろしい。私、アスタに引き取られただけで何もしていないよ？

世の中ギブアンドテイクのはずなのに。あまり親切にされると、何があるのではないかと恐ろしく感じる。……早々に帰つて引きこもりたくなつた。

「こちらの前で少しお待ち下さい。旦那さま、アスタ様とオクトお嬢様がお見えです」

「通せ」

ドアの向こうから、渋い男性の声が聞こえた。

とうとう伯爵様とのご対面だ。手が汗ばんでくる。ぬるぬるした「うめん」と心の中でアスタに謝つておく。

部屋の中には、アスタをほんの少しだけ年を取らせたような魔族が居た。髪の毛をオールバックにしてきっちり固めている為老けて見えるが、皺とかを見るとアスタのお兄さんと言つてもおかしくないよう思う。でもきっと彼が、アスタのお父様である伯爵だ。

「父上、ただいま戻りました」

アスターが敬語使つている？！

私は慌てて背筋を伸ばした。絶対粗相するわけにはいかない。

「……そちらの娘が、例の子供か」

アスターと同じ紅い瞳が私を映す。そこには嫌悪もないが、好意もなく、観察されていくような気分になつた。怖いんですけど……泣いていいですか？

「そうです。俺の娘の、オクトです」

アスターに紹介された私は意を決した。そうだ。泣いている場合じ

やない。Jのたびの事は、すみませんでした」

私は日本の文化、土下座をしようと、膝をついた。先に謝ったものの勝ちである。

が、すぐにアスターに首根っこをつままれ持ち上げられてしまった。これでは土下座ができないんだけど。

抗議しようとアスターを見れば、彼は凄くいい笑顔をしていた。でも目が笑っていない。

「何をしようとしているのかな?」

「えっ?……謝罪……です」

無表情の伯爵様より、アスターの笑顔が怖い。泣きたくなつたが、ギリギリのところで堪える。なんとか敬語を使えたのは、自分で自分を褒めてあげたいくらいだ。

そんな私を見て、アスターは大きなため息をついた。  
「何の謝罪だよ。いらないから。父上もオクトが怖がつてるので、いい加減笑つて下さい」

そんな無理に笑つて貰わなくてもいいですか。

アスターが抱っこする感覺で私を腕に座らせた為、伯爵様と目線が同じになる。紅い瞳にじっと見つめられて、だらだらと冷や汗が流れた。目をそらす事も出来ない。

「アスター……リスク様。別に、私は……」

大丈夫ですと言おうとしたところで、伯爵様がニタリと笑つた。その笑みはどこか邪悪で、ぞわぞわと鳥肌が立つ。

ああ、引きこもりができる生活が懐かしい。私は魔王のような笑みに、そのまま気を失つてしまいたいと切実に思った。

「父上。オクトが、驚いていますから、悪人面は止めて下さい」「……そうか」

驚いた通り越し、いつそ恐怖を感じていたのだが、伯爵様の少し残念そうな声を聞くと首をかしげたくなつた。あれ?もしかしていい人?

「本当よねえ。この人、顔の筋肉が退化しているから」「めんなさいね」

つ?!この人の間に?

喋りかけられた事で、初めて伯爵様のななめ右に女性が居る事に気がついた。茶色の髪に紅い瞳をした細身の女性は、伯爵様やアスターのような派手な顔ではない。不細工とかそういう事もなく、少し垂れ目だなとは思うが、普通だ。あまり特徴のない顔立ちといえばいいのだろうか。

「母上も、気配を消すのはおやめ下さい」

「あら、嫌だわあ。私はそんな事してなくてよ。普通にここで立つていただけよ」

「母上の普通は、俺らと違うんで」

普通に立つていたつけ?

記憶を探るが、伯爵様ばかりに気を取られて、全く記憶に残っていない。良くも悪くも伯爵様が濃い方なので、余計影が薄く感じるのだろう。アスターとはあまり似ていらない母親だ。

「初めまして、オクトちゃん。私はアスタリスクの母親のウェネルティよ。ウェネお婆様?つて可愛く呼んでね」

「訂正。彼女の性格が、まるっとアスターに引き継がれている。駄目です。まだ俺も、お父様?つて呼ばれてないんですよ」

「あらあら。アスタちゃんつたら、とんだ甲斐性なしね。引き取つてから結構経つでしょうに」

「こちらにも色々あるのです」

伯爵様は、この頓珍漢な会話の間も、表情筋を崩さず、じつと私を見ていた。表情筋が退化しているのは本当かもしれないが、伯爵様の意図が見えない。

「あ、あの。アスタ……リスク様。降ろしていただけですか?」できれば、伯爵の視界から消えたいですといいたいところだが、それは無理だらう。ならばせめてまつすぐ見つめ合ひ状況だけは回避したい。

「えー」

…何で泣る。瘦せており、発育も悪いので、普通の5歳児よりは軽いと思つ。それでも、紙のように軽いかと問われればそうではない。降ろしてしまった方が楽だらう。たゞ

「アスターちゃんが嫌なら、お婆様の方へ来ない?」

「……ご遠慮します」

幼児扱いされるのは初めてではないだらうか。

正直、恥ずかしいよりも、どうしたらいのか分からず困惑してしまう。ウエーネに何か思惑があるのかどうかも、まだ分からない。

「そう。残念だわあ。娘はお嫁に行ってしまつていないし、アスターちゃんもヘキサちゃんも、だっこさせてくれないし。男の子つて嫌ねえ」

ウエーネは小柄ではないものの、アスターより小さく細身だ。抱っこするのは体格的に無理なように感じた。

「そういう事を言つから、ヘキサも学校の寮に入るんです

学校という事は、ヘキサさんというのは、まさか今年院を卒業するアスターの息子の事?!

いや、その人も物理的に抱っこは無理だと思つ。このお婆様、色々常識が吹つ飛んでいる。

「酷いわ。アスターはいつも私を苛めるんだから。オクトちゃん、お婆ちゃんを慰めてえ」

「とにかく、オクトも俺も長旅で疲れているんです。話がそれだけでしたら、失礼しますよ」

「どうしても抱っこがしたいのか手を伸ばしてきたウェネに、アスターはピシャリと拒絶すると、少しだけ距離をとつた。もしかしたら、アスターが私を抱っこしているのは、ウェネ対策かもしれないと思いつく。でも、何で？」

「待て」

伯爵が低い声でアスターの動きを止めた。伯爵様の視線は、私に向いている。その紅い瞳が怖くて逃げ出したくなつたが、ぎりぎりの所で目をそらわず踏みどじまつた。罵られたつて仕方がないと覚悟してここまできたのだ。

「さあ、どんとこい。思つ存分罵るがいい……嘘です。少し手加減してくれるとありがたい」

「私の名は、セイ・アロッロといふ」

「……オクトと申します」

伯爵様が名前だけ言つて、じつと私を見つめたので、慌てて空気を読んだ。たぶん、名乗ればいいんだよね？間違つていなかドキドキする。自己紹介が必要なら、名を名乗れと分かりやすく命令してくれればいいのに。ちゃんと空気が読めるかヒヤヒヤなのだ。

「私の事はセイお爺様？と呼びなさい」

「貴方もですか。

私はアスターの腕の中で、ひとつ疲れを感じた。

「貴族つてめんどくさい」

私は伯爵家2日目の朝にしてすでにうんざりしていた。

何故1日に何度も服を着替えさせられているのだろう。夜の寝巻に着替えるのは理解できる。起きてから部屋用のドレスに着替えるまではまだ納得できた。しかしその後外出するわけでもないのに、3時のお茶の時間に一度着替え、夕食時にまた着替える意味がわからぬ。アスターに言わせると貴族の女性は、お茶と夕食の間にもう一度着替える事もあるそうなので、まったくもつて理解不能だ。

貴族の方々に一度問いたい。何故着替えた?と。

これでは、着替えだけで1日が終わってしまう。しかし貴族の生活はそれで構わないらしい。と言うのも、家事などは全てメイドや執事がやってしまってるので、家ではやる事がないのだ。なんて恐ろしい生活。女性が唯一してもいいのが、刺繡又はレース編み。……これだけって、何、その拷問。

「私も働きたい……」

やる事がない事が、これほどつらいとは。

いや、アスターとの生活でも感じていたけれど。仕方がないので、文字の練習をしているが、つらい。そろそろ飽きてきた。かといって、我儘を言ってメイドさんを困らせるわけにもいかない。一緒に窓ふきさせて下さい何て言つたら、メイドさんが怒られそうだ。実際、服の着替えの手伝いを断つたら、泣きそうな顔をされた。……あれは申し訳ない事をした。

文字の練習にも飽きた私は、紙を正方形に切つて、折り鶴を折りながらため息をつく。これではボケそうだ。何か私でもできる事は

ないだろうか。

「そういえば、山に行つてもいいとかつてアスタ言つてたつけ」  
窓の外を見て、来た時にアスタが言つていた事を思い出した。  
山で何ができるか分からぬが、家の中でじつとして、文字の練習を永遠としているよりはマシのように思えた。

『メイドさんへ。いつも、ありがとうございます。プレゼントです。  
オクト』

手紙と折り鶴を机の上に置くと、私はドアの方へ向かつた。一人で窓から脱走という手もあるが、迷惑がかかる事も分かるので、正式にアスタにお願いするつもりだ。安全運転第一。危険は冒さない。それが誘拐された時に学んだ事だ。危険なフラグは全て叩き折るに限る。

「オクトお嬢様、何かご用でしようか？」

廊下に出ると、笑顔の執事にばつたり会つた。何故いる。  
他意はないとは思うが、監視を付けられているように感じた。アスタが一人暮らしをするのもよく分かる。

「アスター・リスク様に会いたいのですが」

「アスタリスク様は、早朝から外出なされております  
何だつて？」

咄嗟に逃げやがつたと思つてしまつたのは、仕方がない事だと思う。きっとここでの生活に耐えられなくなつたに違いない。  
さて、アスタがいなくなると、誰に外出の許可を取つたらいいのだろうか。

「それとオクトお嬢様。我々に敬語は不要でございます  
「そう言われましても……」

敬語で話されると、敬語を返さなければと思つてしまう。特に私は、アスタの養子という立場だ。政略結婚にも使えない私では、今後もずっと養子でいられる保証はない。そう考えるとあまり無茶はできないように思つ。いつか私も彼らと同じ立場……むしろ混ぜ毛

ノである私は、彼ら以下になる可能性大だ。その時、今無茶をやつた事が巡り巡つて私に返つてくるとも限らない。

うん。礼儀は忘れちやいけない。

「あの。少し山へ散策に行きたいのですが、どうしたらいでですか？」

濃い緑の髪をした執事を見上げると、小さくため息をつかれた。  
敬語はそんなに駄目ですか？

「……旦那様に許可をいただくのが一番かと思います」

マジか。

いきなりボス対決とはついてない。外出を諦めるべきかと思つが、アスターと明日会えると限らなければ、会いに行くべきだろう。いくら引きこもり生活が好きでも、至れり尽くせりでやる事なし生活は拷問だ。1週間これが続くのは勘弁したい。

「分かりました。伯爵様はどうちらに見えますか？」

「ご案内させていただきます」

執事が礼をしたので、慌てて私も礼をし返すと、また困った顔をされた。もしかして、これも駄目ですか？  
……本当に貴族つてめんどくさい。

思つた以上に軽々と難関を抜けました。……おや？

外出したい旨を伯爵様に伝えると、あっさりと許可が下りた。仕事が忙しいようで、机に張り付いてこちらを見なかつたけど、たぶん大丈夫なはず。「ああ」は肯定だよね。天氣を聞いても同じような返答をしそうだつたけど。

混ぜモノがウロウロするのは外聞も悪いだろうし、反対されるかなとも思つていたのでありがたい。

「きっと、アスタリスク様が事前に伯爵様にお願いして行かれたんだと思いますよ」

「そうなんですか？」

「アスタリスク様は、先を読んで動かれる方ですから」

「……ん？ アスタってそんなに君子みたいな人だけ？ 頭は良いのは確かだけど。

どうやら、親馬鹿ならぬ、使用人馬鹿フィルターがこの執事にはかかっているようだ。私の知つているアスタは、片付けと家事ができず、無計画の権現。先を読むつて、嘘を付け。

「そう……ですか？」

夢は壊してはいけないだろうと私は曖昧に返事した。夢を見るのは個人の自由だ。

「ええ。昔から神童と呼ばれていた賢いお方です。この伯爵家は過去に経済的に苦しい時期がありました。しかしながらアスタリスク様が王都での魔術師になる事を選び、その知識をこの地域の発展に生かして下さったおかげで、立て直す事ができましたよ」

我儘かと思つたが、意外にいい奴だ。

ただしここにも、フィルターがついている可能性は高い。自分勝

手にやりたいから王都で魔術師になり、伯爵家がつぶれると自分も大変だから、知識を横流した……。何でだろ？。こっちの方がしつくつきてします。

「へえ。そうだ。あの、外出するにあたって、服を着替えるといんですかけれど」

「はい。どのようなドレスがよろしいですか？」

「いえ、ドレスではなくて、できれば男物。そういうなら、この辺りに住む子供と同じものがいい……ですけど……」

執事の顔が、凄く残念そうだ。

でもドレスを着て山を歩くなんてもつての外だし、貴族と分からない方が誘拐の心配もなくて安全だと思つ。それに山を登るなんて、汚す可能性が高いのだから、あまり良いものでない方がいい。

「あの、駄目ですか？」

「……分かりました。ただし今すぐの準備ですとヘキサグラム様のお下がりとなります、よろしいでしょうか？」

「はい。無理を言つてすみません」

「謝るならば、言わないで下さい」

ですよね。

そう思うが、ドレスでない服が欲しいのだから仕方がない。部屋の中でじっとしている分には、ドレスでも別に構わないのだが、動こうと思つと重いし、裾を踏みそうだしで不便なことこの上なかつた。

「では持つてまいりますので、お部屋でお待ち下さること

「お願いします」

私が頭を下げる、執事は苦笑いをした。

どうも私は貴族には向いていない気がする。元々貴族ではなく、旅芸人の子供なので仕方がないんだろうけど。

部屋に戻ると、ぐちゅぐちゅになっていた机の上が綺麗に片付い

ていた。どうやらメイドさんが掃除をしてくれたようだ。手紙と折り鶴にも気がついてもらえたみたいでなくなっている。スルーもしくは、ぐちゃぐちゃにしてゴミ箱に捨てられている可能性もあったので、ほっとした。きっと掃除をしたのは優しいメイドさんだったのだろう。

「……何だか悪い方向ばっか考えるようになってるな」

捨てられる前提で考えてしまつて、こきこき卑屈になりすぎではないだろうか。でも期待して裏切られた時の絶望はもつとも恐ろしい。混ぜモノの暴走は一体どのレベルの絶望で起こるものなのだろうか。何か文献があればいいのだが、あつたとしても私の語学レベルだと理解するのは難しいように思う。ちなみに現レベルは、児用の絵本……。やはり勉強あるのみか。

ベッド脇に座りながらため息をついた。道のりは長い。

気分を変えようと、鞄からクロのサインを取り出す。初めは模様にしか見えなかつたソレが、最近何とか文字だと理解できるようになつた。少しだが進歩はしている。

「今頃クロは何しているんだる」

眺めていると、少しだけ一座にいた時の事が懐かしくなつた。あの頃の方が良かつたとは言わない。それでも楽しくなかつたわけでもない。

クロと挨拶もできないまま別れたのは、お互泣かずに済んで良かったのかもしれないとは思う。下手に泣いたら未練が残つたはずだ。それでも、せめて手紙のやり取りができるようにしておけば良かった。クロ達は旅を続けるような事を言つていたので、実際は私が手紙を受け取る事しかできないだらうけれど。

「今日も一日、何もありませんように」

願掛けをし終わると、私はなくさないように鞄にしまつた。この間願いを裏切つて、人攫いに会つなんて事もあつたのであまりお守りとしては、効き目がないかもしれないけれど。でももう、あんな

事は早々ないだろ？

「オクトお嬢様、入つてもよろしいでしようか」

ノック音と共に、メイドさんの声が聞こえた。返事をすると、緑の髪に犬っぽい獸耳がついた女性が入ってきた。その手には、綺麗に畳まれた服がのっている。

「わざわざ、すみません」

慌てて立ち上がり、メイドさんの方へ私は近づいた。

「いえ。この程度の事、謝らないで下さい。仕事ですから。それよりも、オクトお嬢様。いただいた、これの事なんですか？」

メイドさんはポケットから折り鶴を取り出した。鶴がどうかしたのだろうか。

あつ。もしかして、捨てるに捨てれず困っているのかもしない。養子とはいえ、アスタの娘。つまりは貴族の娘だ。例え「ミにしか思えなくとも、無下にもできなかつたのだろう。

それは悪い事をした。確かに、折り鶴を貰つても何かに使えるわけでもないのだ。この国は箸文化ではないので、箸おきにもできない。

「迷惑かけてすみません。捨てて下さい」

せめてハンカチに刺繡とか、そういう実用的なものにすれば良かつた。……やり方が分からないので、誰かに教えてもらわなければいけないけれど。

「いいえ。捨てません。迷惑なんてとんでもございません……」

メイドさんが大きな声を出した事に私はびっくりする。女性もはしたないと思つたのか、こほんと咳をして、顔を赤く染めた。

「あ、あのですね。これはまるで、紙でできているように思いました。同僚どどのように作ったのか首をかしげていたのです。どちらかの、工芸品ですか？」

「えつ。ああ。それは私が紙を折つただけ」

何だ。邪魔というわけではなかつたのか。にしても、工芸品と/or...リップサービスありがとうございます。少し大げさすぎて恥ずかしいけれど。

「オクト様が作られたのですか？！これを？！」

「はあ」

それにしても大げさに驚くメイドさんだ。あ、あれか。子供は褒めて伸ばすみたいな。伯爵家の教育方針が、ゆるくて大変ありがたい。アスタを見ていると、厳しくて鞭ばかりな躰けではないとは思つていたけれど。

「良かつたら、教える……教えますが」

一瞬敬語を使い忘れたが、すぐさま元に戻す。メイドさんが少しフレンドリーになつた気がして、危うくつられる所だった。

「是非、お願ひしますっ！！」

「えつと。いつがいいです？私は、いつでも大丈夫……です」

「散策の後で、構いません」

山の散策どうしようかなとちらつと考えていたのを見抜かれたみたいだ。まあ折り鶴くらいなら簡単だし、教えるのもそれほど時間はかかるないだろうけど。

「なら、それで」

「オクトお嬢様は他にもこいつらったものが作れるのですか？」

脳内検索をすると、数点思い出せた。もつとも箸袋は文化的に使えないし、手裏剣も何か分かつてもらえたなさそうなので、それほど種類は多くない。

しかしメイドさんは妙に目をキラキラさせている。褒めて伸ばすにしてもサービス精神旺盛すぎないだろうか。若干、怖い。

「えつ、あの……少しだけ」

「分かりました。メイド全員にそのように伝えておきますね」

「やめてっ！そんなに凄い事じゃないから」

まるで公演でも開かせるような勢いに、私は悲鳴を上げそうになつた。メイド全員つて何？これは新手のイジメだろうか。説明して、

この程度みたいな感じで鼻で笑われるとか？そういう流れですか？

慌てて止めると、メイドさんは困ったような顔をした。

「えっと、少人数でお願いします」

「そうですか。なら、オクトお嬢様の迷惑にならないよう、選抜しておきますね」

「あ……はい」

選抜って何？と思つたが、これ以上聞く事は私がつかれそうだ。メイドさんを驚かせれそうな折り紙は、折り薔薇ぐらいのが正直心に痛いが、1個でもネタがあるだけマシだろ？ 大丈夫。もしイジメどうしても乗り越えられるはず。

「あの、服いいですか？」

「ああ。遅くなり申し訳ございません。お着替えのお手伝いは……」

「大丈夫です」

メイドさんは残念そうな顔をしたが、後ほど来ると言つて一度外へ出て行つた。

「つ、疲れた」

メイドさんを見送ると、私はぼすと音を立ててベッドに座つた。山に行く前から、ぐつたりとしてしまう。肩を落として、深く息を吐くと、ようやく人心地つけた。寝めて伸ばすは、行きすぎると羞恥系拷問だという事を初めて学んだ。

本当にいいのかなあ。

1人外を歩きながら私は首をかしげた。というものの、伯爵邸から外に出る時に、できれば1人で散歩に行きたないと使用人の方々にお願いすると、あっりOKされたからだ。

とてもありがたいのだけど、私は一応5歳だよなあと思つてしまふ。それともこの世界の貴族は5歳で1人外出してもいいのだろうか。そういうば、アスターも私が買い物に1人で行くのを咎めなかつた。放任主義なのか、それだけ子供の成長が早熟なのか。

「どちらにしろ、貴族の子供って大変だな……」

そういうえは執事やメイドさん達も、私の子供らしからぬ発言に、特に驚いた様子もなかつた。つまり貴族の子供は早熟である可能性が高い。いやいや、私の場合は前世の知識のおかげであり、本当にそうなら、貴族の子供はチート過ぎる。しかしあスターは異界屋で会つていたから私に対する前知識があつたが、執事達は違う。普通こんな子供がいたら怖いだろう。

ただし驚かないのは、彼らのプロ根性といつのも否定できないけれど。

しばらく歩いていくと、周りが畠になつてきた。キャベツのような作物や、何かの苗が色々なものが植わつていて。どうやらここは田舎の農村のような地域みたいだ。遠くで動物の鳴き声が聞こえるので、畜産もおこなつているらしい。

畠にいた何人かはちらりと私を見ると、慌てて目をそらした。きっと混ぜモノである私が怖いのだらう。

「おお。久々の正しい反応」

伯爵家にいると、どうも混ぜモノである事を忘れてしまつそうな対応をされる。本来怖がられるのは嫌な事のはずなのに、まともな

反応に感動してしまいそうになった。そう、普通の反応はこれだ。ここに嫌悪が含まれた視線とか噂話が入ってくると、ますますいつも通りだ。……Mではないので、そうされるのが好きなわけではないけれど。

「よう。やつと外に出てきたのか」

「アスター」

しばらく煙を見渡しながら歩いていると、村人と話をしているアスターに出会った。やつとつて、私が伯爵邸から出てくるとは思つていたらしい。だったら一緒に連れてきてくれればいいのに。

「ちゃんと、男物の服を着てきたな。偉い、偉い」

アスターは私の頭をがしがしと遠慮なく撫ぜるが、釈然としない。「行くなら、誘つてくれれば」

「ちゃんと自分で話ができるんだから、行きたいならちゃんと口で言つて、どうするか考えないとね。俺が全部決めたら、使用者とさえいつまでも話さないだろ?」

それは確かに間違えない。

人とあまり関わりたくないという意識は正直ある。例えばアスターが、本を読めと持つてきたり、これをやれと宿題を出したら外へは出なかつたはずだ。あれだけ暇で、なおかつアスターが近くにいなかつたからこそ、仕方がなく伯爵に外出許可を貰つたりと自分で動いた。

「……面倒で放任しただけじゃ」

「そこはお父様凄い？ありがとうござりますだよ。可愛いぞ」

「可愛くなくて結構」

私の為という事は少し理解したが、5歳児に対して少し酷な気がする。私でなければ、泣いているところだ。もつとも私のような混ぜモノでなければ、子供らしく使用人や伯爵様に甘えたかもしれない。そう思うと、やはり私が色々と駄目なのだろう。

「嘘噏。可愛い、可愛い」

「いや、可愛くなくてもいいから」

拗ねたとでも思ったのか、アスターが言い直すが、私的には可愛くなくて問題ない。可愛いと何か得があるのだろうかと考えるが、得があるのは普通の子供だけだ。混ぜモノにそんな特典がついても意味がない。

「アスター様、そちらの混ぜモノは一体……」

「ん？俺の娘」

「違う。養子」

「同じじゃないか」

アスターが唇を尖らせたが、私は首を横に振った。混ぜモノの親などという不名誉をアスターに負わせるわけにはいかない。折角拾ってくれたのだから、実際はどうであれ、混ぜモノさえも養子にする慈悲深い方とでも思わせた方がいいだろう。

さて、ここに長居しても村人に悪い。早々に山に行くべきか。……しかし山も山菜とかの収穫で、誰かいるかもしれない。そうすると人があまり近寄らない場所に行くべきか。

「アスター、少し散歩してくる」

そういうえば魔の森は、誰も近寄らないような事を言っていた。奥まで入ると迷う可能性はあるが、近場なら丁度いいのではないか。うか。

「何処に？」

「……そのあたり？」

実際魔の森が何処にあるか分からないので、ふらふらと人気がない場所を探すつもりだ。人気がない場所は危ないイメージもあるが、こんな農村ならば事件もありそうにない。

「山は流石に一人じゃ危ないかな。一緒に行くよ」

「私は大丈夫。アスター、用事があるんじや」

「村は一通り見てまわれたから大丈夫だよ。後は、また明日」

いいのか、それで。

自分としては、アスタの仕事を邪魔する事は不本意だ。私は養われている身なのだと思うと、邪魔になる事は極力したくない。

「1人で大丈夫」

「駄目。もう決めたから。じゃあ、俺と一緒になら大丈夫だし、魔の森へ行こうか。1人ではまだ行つてはいけない場所だから覚えてよげつ。バレた？」

たまたま偶然かどうかはわからないが、行つてはいけないと言っていた場所なだけに、冷や汗がでる。アスタはにっこりと笑っているので、どういうつもりかは分からぬ。

「アスター様？！」

「大丈夫だよ。奥までは行かないし。折角だから、薬草を取つてくるよ。籠貸して」

村人までも心配そうにしているが、アスタは気にした様子がなかつた。それどころか、籠を強奪する始末だ。何処までも無計画な自由人である。

「オクト行くよ」

アスターに手を引かれて、畦道を歩く。迷子にはなりそうにもないが、アスターから手を握つたのでされるがままにしておく。

しばらく歩くと、周りの木々が増えてきた。ひんやりとした空気が髪を撫でていく。山などは通り過ぎるもので、こんなにゆっくりと見た事はなかつた。私の身長が低いからだろうが、どの木も大木に見える。

「この先、村の西はずれにある場所が魔の森と呼ばれる所だよ」緑はどんどん深く、そして静かになっていく。神秘的と呼ぶにふさわしいような場所だつた。大木が連なつており、光は木の葉の隙間からさす程度で少し薄暗い。

しばらく歩いた所で、アスターは足をとめた。

「ここまでは、1人で来てもいいよ。村人もたまにここまで来る

から

「嫌われた場所なんじゃ……」

それとも嫌われているのは、森の中だけなのだろうか。それにしても、まわりに民家など見当たらない。

「子供たちや老人が薬草をとりに来るんだ。以前に比べれば作物も良く育つようになつたけれど、まだ裕福からは遠いからね。薬師にはとても安く買いたたかれてしまうけれど、少しでも家計の助けになろうとしているんだ」

偉いよなというアスターは、少し悔しそうに見えた。

彼でもこういう顔をするのかと少し驚く。いつもへらへら冗談ばかり言つてているのだと勝手に思つてた。

「薬は安いものなの？」

「いや。とても高価で、村人は買えないよ。薬草を加工する段階でとても価値がつくんだ。でもまだこの村はいい方かな。薬草はあるから、すりつぶして飲んだりしている。もちろん、薬師が作った薬ほどの効果はないけれどね」

この世界、……は良く分からぬが、少なくともこの国は抗生素などという薬はでき上つていらないだろう。海賊の船長も菌というものを知らなかつたのがいい例だ。もちろん、パンがあり、チーズがあり、ヨーグルトも存在しているので、菌を全く活用しない生活ではないのだけれど。

ともかくこの国でいう薬は薬草なのだろう。もしかしたら薬草に結構凄い効能がある可能性もある。RPGだって、よく分からぬ草をよく分からぬ技法を使って、フラスコに入つた万能薬にしていた。この世界がそちらに近い可能性だつてある。

「でも薬草を取りに来て帰つてこれない事もあるんだ」

安く買いたたかれたり、効果の低い治療の為に命を落とす事もあるのか。……アスターが悔しそうなのも少し分かつた。彼は彼なりにこの村を愛しているのだろう。

「なら、村で薬を作れば……。薬師達は、何処で学ぶの？」

「魔法学校または、薬師を師として学ぶようだよ」

「ん？ 魔法学校？」

それは確か、魔術師の卵が通う学校ではなかつただろうか？

「なら、アスターは作れる？」

「専攻が違うから無理だな。薬の分野は、高等科に進学後、魔法薬学科の生徒が習うんだ。俺は魔法学科だから、純粹な魔法の研究分野に特化しているんだよ」

何だか大学みたいだ。確かに薬学部の内容を教育学部が知るはずもない話である。

しかしふといい考えが浮かんだ。ここは薬草が豊富な土地で、薬草は薬になると高価な値がつく。そして私は、転移魔法などを常々覚えたいと思っていたのだ。

「アスター、あのさ」「

「どけええええっ！…」

今思つた事を伝えようとしたところで、頭上からどなり声が聞こえた。アスターに引っ張られる形で、私は後ろに少し跳んだ。

そしてすぐに、じきりという音と共に、さっきまで立っていた場所に人が落ちてくる。一人、……いや、2人だ。時間差で、さらにもう一人落ちてきた。体格はあまり大きくないようで、子供のようだ。

村人かなと思つたが、すぐにそれを否定する事になる。最初に落ちてきた子供の髪は赤茶。2番目に落ちてきた子供はキャベツ色。

「な、なんで」「

「よう。元気だつたか？」

「久しぶり」

へラつと誤魔化すように笑う2人を見て私は固まつた。

どうしてここに、ライとカミュ王子がいるのだろう。



## 9 1話 不穏な噂

ある日、森の中、王子様に会った……なんでやねん。そこは熊だろ。

脳内でノリシッコミしている時点で、すでにかなりテンパつている。もう2度と会わない、会うものかと思つていた相手に遭遇したのだ。仕方ないと思う。

それにしても偶然会つような場所ではない。その理由を考えると頭痛がした。

「このような場所へどうされたんですか？」

私が焦つている横で、アスタが2人に声をかけた。その顔には、すでにエセ笑顔が張り付いている。

「どうしたもこうしたも、アスタリスク魔術師とオクトに会いに来たんだけど……何でこんな場所につくんだ？」

「そうだね。アロツロ伯爵の庭に出よう転移したはずだけど……」  
転移と言う事は、一人とも魔法使いもしくは、魔術師と言う事だ。カミニュ王子は海賊からアスタのところへ送つてくれた後にさらに転移していたから驚かないが、ライもそうだったのか。……関わりたくない。

2人を見て、アスタは厭味つたらしく大きなため息をついた。

「まだお二人は学生の身。転移魔法は早いと思われますが。特にこの地域は、魔の森があり魔法のゆがみが出やすい地域です。その事を計算に入れましたか？」

「えーっと……入れてないかな。と言つたが、その敬語止めてくれ。怖いんだけど」

「誰かに見られそうな場所で第一王子様に不敬など行えませんよ」  
アスタ、魔の森にはほとんど誰も近寄らないって言つてたよな。

しかし私はその事を口にせず、彼らのやりとりを見守った。自分にとばっちりが来るのはごめんだ。

「第一王子はカミュで、俺関係ねえし……」

ですよね。

しかしアスターはライの事を無視し、カミュ王子に話しかけた。

「それと地域特性を見極められないなら、転移魔法は使うべきではありません。この地域以外にも、もつと厄介な場所だつてあるのですよ。自分で危険を招くのは自業自得ですが、その為に使用人が処分されている事をお忘れなく」

「忠告ありがとう。肝に銘じておくよ。ただ、アスターク魔術師が夜会の招待状を断らなければ、僕たちもこんな無茶はしなかつたんだよね」

とげとげしい空氣に耐えられなくなつて、逃げたくなつた。しかしさスクリュースターに手を引かれているため、移動はままならない。

「こちらにも色々と都合があるんですよ。それに今回は娘が私の父に会いたいと言つたもので、やもえずお断りしたのですけれど」

待て。私は会いたいと選んだのではなく、右か左か選んだだけだ。そもそもそれが何かも伝えられずに。それが何故、家族愛チックな話になるのだろう。

「でももう会えたから良いでしょ？それに僕の勘違いでなければ、アスターク魔術師なら、転移を1日に何度もできると思うんだけどね。伯爵に会つてから、夜会へ出席すれば良かったのに」

「まだ娘が小さいものでね。それほど無理はできないんですよ」

にこにこにこ。

何故両者笑顔なんだろう。そして何故笑顔なのに、寒さを覚えるのか。

「ライ……どうしてここに。海賊は？」

私は成り行きを見ているにも疲れ、寒々しい一人から少し距離

を置いているライに声をかけた。もっとも距離を置いているとしても、特に気にした様子もないのに、声をかける相手としては、50歩100歩な選択肢かもしれない。

「ああ。ちょっと問題が起こってな。それでオクトに協力」「嫌」

「聞く前から断るなよ。海賊では仲良くなつていただろ」「ライの事は正直嫌いではない。ただ私は安全安心に生きていたいので、厄介事と思われるような事に首を突つ込みたくないのだ。「それに不都合がでたのは、オクトの所為でもあるんだからな」「何故?」

勝手に人の所為にしないで欲しい。

私は特に彼らにとつて問題ある行動などとつていなければ。海賊の所から戻った後は、家で引きこもる事に専念していたので、危険な橋など渡つていらない。

「その事について、内密に話がしたいところでね。アスタリスク魔術師、場所を用意してもらえないかな」

アスターと話をしていたはずなのに、王子が口を挟んできた。内密とか、絶対聞きたくない話に決まっている。アスターの顔には『馬鹿だなあ』と書いてある。うん。私もそう思う。しかし王子が命令すれば聞くしかないだろう。アスターに任せて、追い返してもらえばよかつた。

口は災いのもと。分かつていたはずなのに。

「伯爵邸に戻りましょうか」「私はがっくり肩を落とした。

「どうぞ」

椅子の上に登つて紅茶を入れるという、マナーも優雅さも何もない状況を繰り広げながら、ようやく私は4人分のお茶を入れる事ができた。この4人の中でお茶を入れるべきは私だろうと空気を読んだのだが、幼児の体格だとこの作業は結構大変だつたりする。

何故お茶が欲しいなら使用人を下がらせる前に入れてもらわなかつたんだろう。人払いするにしても、お湯を持ってきてもらうだけじゃなくて、色々やつてもらつてからにすればいいのに。

「オクトって、本当に何でもできるよな」

「自慢の娘なものでね」

いつまで親馬鹿設定で行くつもりなのだろう。笑顔で紅茶を飲むアスターを睨みつけながら、私も椅子に座つた。

口調は敬語から普段と変わらないものになつてるので、アスターと彼らは思ったより親密な関係なようだ。それでも親馬鹿設定を崩すつもりがないのは、まるつきり気を許しているわけではないとう事か。それとも何かを断る時の言いわけとして使う予定なのか。  
……分からぬ。

「それであんな無様な登場をして、何の用だい？俺も久々の里帰りで忙しいんだけど」

どの口が言うんだ。

忙しいなら私の散歩何かについてこなければいいのに。きっと話を有利に持っていく為の方便なんだろうけれど。

「オクトさんを見つけて君の所へ戻してあげた恩人に、それはないんじやないかな？」

「俺は有給をくれと言つたんだ。場所はすでに伯爵家が見つけていたからね。それに借りは仕事で返したと思うけどね。カミュエル王

子様？

……ん？もしかして私は色々アスターに迷惑かけていた？

もしかしたら、伯爵家に行くのは初めから決まっていたのかもしないとこの時になつてようやく気がついた。確かに急遽行く理由は、迷惑をかけたから。……その主語は『私が』ですか？！

さあああつと血の気が引く。

今さらだけど、謝るべきだろ？か。自由気ままなアスターが私の為に不自由したのは間違えない。

「あ、あの。アスター」

しかし私が言う前にアスターは頭を2度ほど軽く叩いた。気にするなという意味だとは分かったが、そういうわけにはいかない。

しかしアスターは私ではなく、カミコ王子を見ていた。この件は後にした方がよさそうだ。

「確かにね。鉱物への魔法添加は確かに以前より効率が良くなつたしね。兄上が軍事で採用するはずだよ。だから今日は正式にアスターリスク魔術師とその娘オクトに依頼をしようと思つて来たんだ。報酬も払うつもりだよ」

「5歳児に依頼？そんな横暴は聞けないね。帰つてくれないかな？」

「5歳児？！」

ライが素つ頓狂な声を出した。

私の体格はどこからどう見ても5歳児だろう。若干発育が悪いのでもう少し下に見えるかもしれないが、驚くほどではない。

「へえ。しつかりしているし、僕らと同じぐらいかと思つていたよ

「それはない」

もしさもそなならどれだけ発育不全なんだよ。ツツココビビリ満載だ。カミコ王子達も確かに子供だが、10歳はいつているだろう。

「なら5歳なのに、壊血病とか料理とか色々知つていたのかよ？！」

どんな頭してりんのだ？」

「オクト、どういうことかな？」

「えーっと」

そういうえばアスターに海賊では下働きしていたとしか伝えてなかつた氣がする。実際先生と呼ばれていた事以外は、下働きとそんなに変わらないと思うけれど。

「オクトは見事な才能で、誰も治す事の出来なかつた、海の精霊の呪いを治したんだよね」

きつとカミュ王子はライに聞いたのだろう。

それは分かるが、何故伝える？！アスターの機嫌が下降しているのが、喋らなくとも分かつた。

「あー、そんな事もあつたよな……」

「ふーん」

故意に黙つていたわけじやなくて、話す必要性を感じなくて黙つていただけなんだけど。何故私が責められる空気になつているのだろう。

「とにかく。例え5歳としても、貴族ならばこの国の為に働くべきだとは思わない？オクトはどう思つ？？」

わ、私に振るなつ！！

貴族になりたてである私では、貴族の心構えなんて分からなかつた。小説の主人公とかでありがちな、『自分がいい待遇を受けられるのは、それだけ領民に期待されているからだ』なんて、かつこいいセリフなんて絶対言えない。そもそも自分は伯爵家やその領地に對してまだ何の感情もないのだ。アスターは子爵だっけ？でもそれも同じだ。

「私はまだ国という大きなものは分からない」

本当は王子相手だし、敬語の方がいいのかも知れないが、アスターが普通に話しているので、私もそうさせてもらう。

「でもアスタの為ならば働く」

子爵ではなくアスタに対してなら、恩義がある。国なんて大きなもの为に何かをするとか、正直無理だ。でもそれが1個人の为ならばやれる。

「というわけだから、アスタリスク魔術師も聞いてくれないかな。ちゃんとそれなりの見返りはするつもりだよ」

アスターは紅茶を飲みながら、ちらりと私を見ると、肩をすくめた。

「分かつたよ」

「ありがとう」

カミュ王子は御礼を言つと、ふと真面目な表情になつた。私もちゃんと聞こつと、姿勢をただす。アスターの为とかカツコイイ事を言つたが、無理そんならば全力で断らなければいけない。

「2人は、吸血夫人の噂は知つてる？」

「何それ？」

聞いた事のない言葉だ。ただ吸血といつ言葉は、どうにも気味の悪い物に感じた。

「それは最近新聞に書いてあつた、血を抜かれて亡くなつた女性が多発している事件の事かな」

首をかしげた私の隣で、アスタが吸血夫人について話す。血を抜かれて亡くなつたつて……まるでドラキュラ伯爵みたいだ。

「そう。男爵令嬢が事件に巻き込まれ無残な姿で発見されてから有名になつたんだけど、かなり前からそういう遺体はあつたらしくてね。身分の低い女性が、すでに何十人単位で亡くなつていると思うよ」

何十人単位とは、規模が大きすぎて、現実味が乏しく感じた。痛ましいというよりも、怪談話を聞いているかのようにぞわぞわと悪寒がする。

「吸血って、血を吸われるの？」

もしそうならば、もしかしたらこの世界には吸血鬼がいるのかもしれない。エルフや魔族とさまざまな種族が混在しているのだ。吸血鬼族というのがいても今更驚かない。……共存は難しそうだけど。

「吸うつて言うか、抜かれるだな。たぶん喉のあたりが痛い感じで、逆さ吊」

「へ？」

ライが親指を立てて首を横に切断するような動きをした。その動きが何かを理解した瞬間、血の気が一気に引いた。つまり家畜のように首を切断もしくは傷つけられ、血抜きをされたという事だ。

生きながら首筋に噛みついて飲まれると死んでから血抜きをされるのではどちらがエグイだろう。……とりあえず、個人できにはどっちも嫌だ。

「夫人と言うのは何でなんだ？確かにまだ犯人は捕まつてなかつたと思つたが

「死んだ女性からは、貴婦人の香水のような甘い香りがするからだよ。ただし体を麻痺させる薬品の臭いじやないかと僕らは考えているけれどね」「うわあ。

体を麻痺させてグサリつて、もつと残酷だ。ぞくぞくして、鳥肌が立つてしまふ。やられたわけではないのに首のあたりが痛いような気がして、私は喉に手をやつた。

「まあ噂もあながち間違つていないけどな。俺らは犯人はある伯爵夫人だとふんでいるんだ」

「そこまで分かっているなら、俺とオクトの手を借りるまでもないだろ」

「うん。まさしくその通りだ。そんな物騒な事件、関わりたくない。アスターは魔術師だけど、私は善良な一般市民である。

「本当はそのつもりだつたんだけど、証拠が中々掴めなくて。曲がりなりにも貴族だから、証拠もないのに屋敷内を捜査するわけにもいかなかつたんだよね」

「それと私たちと何の関係があるのだろう。内心首をかしげつつ、話の続きを聞いた。

「そこで王宮が動いている事を知られない為に海賊を通じて、犯人に女性を売つてもらう予定だつたんだ。もちろん、中に1人兵士を入れて女性が被害にあわないように対策はしてだよ」

あれ？ 海賊を通じて女性を売るつて……つい最近、そんなような事があつた気がする。

ひくりと顔が引きつった。嫌な予感しかしない。

「でもどこかの誰かさんが、海賊と取引をして、女性を逃がしてしまつたんだよな」

「うつ。

それは、もしかして……もしかしなくとも、私の事ですよね。

皆の視線が痛い。アスターにいたつては、にこり笑つて私を見て

いる。うわあ……怒ってる。厄介事の原因は、どう考へても私だ。

「もう一度女性を集めるというのは……」

「そのつもりだったんだけどね、もたもたしている間に犯人の嗜好が変わったみたいでね。若い女性ではなく、子供しか取引に応じてくれないそなんだ。おかげで計画の練り直しつてわけさ。子供では流石に兵士を紛れ込ませられないからね。この事について、どう思う?」

「……大変申し訳ないなと」

それ以外に何と言えばいいのだろう。あの時は自分も必死だったのだ。まさかそんなおどり捜査の為に女性が集められているなんて思はずもない。

だらだらと汗が流れる。これはいつぞ、土下座してしまった方が楽になれるのだろうか。

「それでまさか、うちの娘をおどりに使いたいとか言つんぢやないよね」

「まさか。ただ少し伯爵夫人に近付いて、情報を得てくれたらいなと思つてゐるだけだよ」

それはイコールおどりだと思つたが、私の勘違いだらうか。

「私では上手く近づけないとと思つ

正直逃げてしまいたいが、ここまで話を聞く限り、流石にそれはマズイ氣がする。それぐらいの良心は私にもあつた。しかしだ。混ぜモノがすんなりと伯爵夫人と仲良くなれるはずもない。私が近づくと、必ず相手が逃げる。どう考へてもおどりなどには、向いていない。

「そこは大丈夫だぞ。ちゃんと、『混ぜモノの血には凄い力がある』って噂を夜会の時に流しておいたから」「はあつ!?

私は慌てて叫んだ。

何そのとんでもない噂。混ぜモノの血には凄い力って、凄いって

何だ。

滋養強壯といふことか？それとも黒魔術的みたいな感じか

?！どちらにしても、私にとって最悪だ。すっぽんの生血のことを

く飲まれるようになつたらどうしよう。殺されるのも嫌だけど、そ

れもトラウマになりそうだ。

「混ぜモノを使うリスクはちゃんと分かつてゐるのか？犯人を捕まえたはいいが、国がなくなりましたじゃ、笑い話にもならないぞ」

本当にその通りだと私はアスターの言葉に頷いた。殺されなくとも、自分の生血を飲まれるという気持ち悪さだけで、バットエンド突入しそうだ。……飲むとはかぎらないけど。

「もちろん分かつてゐるよ。協力してもらう限り、オクトさんに危害が及ばないよう、最新の注意を払うともりだよ」

「つもりじゃ、困るんだよ。絶対傷つけるな」

アスターは真剣な顔でカミュ王子を睨むように見つめる。王子もまた神妙な表情でアスターを真正面から見据えると、ゆっくりと頷いた。

「……分かった。僕の名と王族の誇りにかけて、オクトさんを守ると誓つよ」

「待て。私に何かある前提で話しているところ悪いが、犯人が混ぜモノに手を出すかどうか分からないとんじや。それに私を襲うとも限らない」

混ぜモノの危険性は犯人だつて分かつてゐるだろう。それに貴族の養子を狙うよりは、町や村にいる混ぜモノを攫おうとするのではないだろうか。

「いや。犯人が襲つかどうかまでは分からぬけど、襲われるならば、オクトが狙われるのは間違いないな」

「何故？」

「混ぜモノは絶対的に数が少ないからな」

「数が少ない？」

私は首をかしげた。やはり混ぜモノは上手く育たないからだろうか。でも私という例もあるし、皆が混ぜモノを忌み嫌うならば、混

ゼモノの存在を忘れない程度にはこの世界にいると思つていた。

そんな私を見て、アスタがライの言葉を引き継いで、さらに説明を続けてくれた。

「人族の血は混ざるが、他の血は混ざらない。これが世界の常識なんだよ。だからハーフは大抵、人族と他の種族の血を併せ持つ事になり、能力などは人族以外のものを引き継ぐんだ。そして数代重ねると、人族の血は消える」

私の母親は獣人族と精霊族。父親がエルフ族と人族。おかしいのは母親と言う事になるが、その話で行くと、そもそも私は生まれないという事になってしまつ。

「つまり混ぜモノは、本来ありえない存在なんだよ。でも現実にはオクトのように存在する。ただし生まれる確率が低くて、問題なく育つ確率も低い。俺が混ぜモノの子供を引き取つた話は貴族の間で有名になつてゐるから、結果的にライが言う様にオクトが狙われるな」

あー。そういえば、私を引き取つた事をだしに、再婚話を断つたりしているんだっけ。意図せずして、私は今この国で一番有名な混ぜモノなのかもしれない。何だ、その嬉しくないオプション。

「他にはいないの？」

ありえない存在認定までされたが、私は現実に生きている。他に同じような混ぜモノがこの国にいないとも限らない。その存在を、伯爵夫人とやらが知つていたらどうだろう。搔つ攫いやすそうな方を選ぶに違いない。

「国への届け出では、十年前に死産だつた報告が來てゐるだけで、書類上はゼロだよ。届け出がなされていなかつたり、国外からの移民の場合は漏れることもあるから絶対とはいえないけれどね」

……本当にレア的存在だつたんだ。なんて嬉しくない特典だろう。残念感しかない。

「混ぜモノ恐ろしさは皆が知るところだから、どう転ぶか分からなければ、もう少し伯爵夫人の動向を見たいんだ。オクトさん、協

力をお願いできないかな」

お願いと言うか、命令ですよね。

どう考えても、私が断つた所で、すでに巻き込まれているとみて間違いない。犯人が動けば真っ先に危険なのは私だ。ここで何を言おうと、噂が流れた時点で、私に拒否権などない。

……なんて厄介な噂だろう。私は首を縦に振った。

さて引き受けたはいいが、面識もないのにいきなり問題の伯爵夫人の所に行つても、不信感いっぱいの目で見られるだけだ。とても近づけるとは思えない。

しかしその辺りはカミュ王子達がしつかり考えていてくれた。まあそうでもなければ、とんでも噂を流しただけで丸投げという、アスター並みの無計画という事になる。もしそうならマジで禿げろと呪うところだ。

「お茶会かあ……」

どうやら後日カミュ王子の従兄である、公爵令嬢がお茶会を開き、そこに私や伯爵夫人が呼ばれるらしい。ただしまだ5歳である事が考慮され、屋敷まではアスターに送つてもらい、お茶会中は侍女を連れて参加するという内容だ。もちろん侍女は、カミュ王子が用意した兵士である。

しかし正直憂鬱だ。

「お茶会、何もないといいけど」

何もない、今度は王子達の失敗を意味するので、歓迎できる事でないのも分かる。しかし混ぜモノであるという事は、問題の伯爵夫人以外からも注目される立場という事だ。おもに、負の感情的な理由で。

罵られたり、侮蔑の目で見られるぐらいなら我慢できるが、叫び声を上げられたり、泣かれたりしたら大人しく帰ろうと思つ。

「コンコン。

「オクト、入るよ

血塗でぐるぐると考へていると、アスターの声が聞こえた。……はつ？！

カミコ王子とライが帰った後、アスターと話をしないとなと思つたが、まだしていなかつた事を思ひ出した。というのもまた転移魔法に失敗されると困るといつことでアスターが2人を王宮まで送つたからだ。

ちゃんと謝りうとは思つてたんだよ。と心の中でいいわけはするが、そんなのアスターが知つた事ではないだらう。マズイ。せめてメイドさんにアスターが帰つてきたら教えてとか、頼んでおけば良かつたと思うが後の祭りだ。謝るならば先手必勝でこちらから言ひたかった。いうなつたら諦めて説教を聞け。

「どうぞ」

開けられた扉の向こうには、アスターとメイドさんが数名いた。ん？ 何でメイドさん？

メイドさんの手には何やら紙の束が握られている。……ああ。折り紙ね。そういえば散策の後に教える約束をしていた。ライとカミコ王子が来た為に中々できなかつたけれど。

きつと怒りにきたアスターと運悪くタイミングが重なつてしまつたのだろう。叱るところとか見たくないだらうに、悪い事をした。

「アスター、あ、あのや……」

そういうえばアスターに怒られるなんて初めてかもしれない。攫われた時も、結局私は怒られていない。何があつたかは聞かれたが、裏道を使つた事に対しても今度から気をつけるよつこと言われただけだ。

アスターはどうやって怒るのだろう。怒鳴られるのだろうか。それとも殴られるのだろうか？ ねつちより厭味つたらしく説教する可能性も否定できない。

「えつと、この間から迷惑かけて

」

「これ、オクトが作ったの？」

「『めん……はつ？』」

謝罪の言葉にかぶせられたのは、お叱りではなかつた。首をかしげアスターを見れば、その手にはメイドさんにあげたはずの鶴が乗つてゐる。あれ？

「うん。まあ……」

「この紙で？」

「そうだけど」

やはり勉強道具で遊んだのはまずかつただろうか。それでも嘘を教えるわけにはいかないので、私は正直に頷いた。

「何で平面が、立体になるわけ？」

「折ればそうなるかと」

何を言おうとしているのかさっぱりわからない。しかしアスターはあるで魔法でも見たような目をしている。魔術師はアスターの方なのに。変な感じだ。

「あのさ、海賊の事怒りに来たんじゃ……」

「何で？まあ、俺が知らない事を王子が知っていたのはちょっと氣に食わなかつたけど、怒つてはいないよ。それよりも、これはどうやって作つたわけ？」

面倒事く知的好奇心ですか。

……アスターらしいといつたら、アスターらしいのだが。このままで自分はろくな大人に育たないのではないかと若干心配になつてきた。何をやっても怒られないって、どうなんだう。褒めて伸ばすもいいが、やはりちゃんと話をしなかつた事は私も悪かったと思う。「今からメイドさん達に教えるからアスターもどう？」

かといって、私も怒つて下さいなんて言えない。言つたらマゾだし、变态っぽい。色々、失つてはいけないものを失つ気がする。なので諦めて、折り紙の話題に移つた。

「もちろん参加するよ。何処でもできるの？」

「紙さえあれば。ただ、できれば、机があつた方が作りやすいけれど……」

私の部屋は勉強机だけで、全員が座れる場所がない。折り紙教室としては向かない作りだ。

「なら客間を使おうか。おいで」

アスターに手を出されて、私は少し迷つた末その手を握る。……屋敷の中じゃ、迷子になりようがないのにと思うが断る理由もない。

「あ、後。海の精霊の呪いの解き方、教えてくれないかな」

やはり覚えていたか。ただしそれも、面倒事く知的好奇心。アスターはそんなものだと想い、私は頷いた。この調子だと、今後もアスターに叱つてもらうのは無理だろう。こうなつたら駄目な大人にならない為にも自分に厳しくなるうと決意した。

「これを広げて、こちら側を折る」

私は折り紙をゆっくり折ると、メイドさんとアスターが折るのを待つた。今更ながらに気がついたのだが、もしかしたら、この国には折り紙というものが存在しないのかもしれない。

確かに日本という国では子供の遊びだが、外国では驚かれていたような気がする。実際アスターもメイドさんも、単純なこの折り方が複雑奇怪な上、細かい作業だと思っているようだ。私としてはとりあえず角を合わせていけばそれなりのものができると思うのだけど。

「最後にこう折りこんで、頭を作つたら完成」

皆、想像以上に真剣だ。子供の遊びなので、それほど難しくないと思ったのだが、予想外の反応である。各自でき上つた鶴は微妙にいびつだが、まあ何とか形になっていた。正規の折り紙ではない事を考慮すると、まあまあの出来だらう。

「もう一枚紙下さい」

「私も、もう一度折りますわ」

そしてどうやらメイドさんとしては満足のいく作品にはならなかつたようだ、さらに挑戦を重ねるようだ。このままこぐと、千羽鶴ができ上るかも知れない。

私も暇なので、隣で折り薔薇を折る事にする。こちらは唯一驚いてもらえるかもと思ったとつておきの折り方だが、伝授する事は今回滞在ではなさそうだ。

「今度は何を折っているんだい？鶴とは違うね」

「薔薇」

アスターに聞かれて、私は手を止めた。まだ線を付けている段階なので、不思議に見えたのだろう。アスターは声をかけず続きを促すようになっているので、そのまま折る事にする。アスターは自分で作るよりも、でき上つて行く様を見る方が楽しいらしく、改めて何かを作ろうとはしなかった。不思議な楽しみ方だ。

数分かけて折りあがると、私は鶴の隣に置いた。立体的な薔薇なので、自分でもかなりいい出来だと思う。唯一惜しいのは、折り紙ではないので、紙が白いのだ。できれば、深紅や黄色など他の色も欲しい所だ。

「……凄いな」

アスターがぽつりとつぶやいた。どうやら心底感心しているらしい。机の上に置いた薔薇を手に取りしげしげと眺めている。アスターをこれほど驚かせられたのは、少し嬉しい。

「自分で考えたのか？」

「まさか」

きつといつも通り、ママから教えてもらつたのだと思ったのだろう。アスターはそれ以上聞いてこなかつた。それにしても、これほど驚かれるならば、一座でもこの技を披露しておけばよかつたかもしない。まあ舞台で見せるにしては地味すぎるし、凄く今更な話しだけど。

「……お嬢様、素晴らしい過ぎますわ。流石、賢者様ですね」

「それ、あまり嬉しくない……です」

なんだその、恥ずかしい名前は。

原因はお前かとアスターを見れば、何故睨まれるのか分からぬいうな顔をした。

「何を拗ねているんだ。本当の事だろ？。それと、敬語。さつきまで使わずに話せていたんだから、そのまま使わない練習をしておけよ。茶会にでるんだろう？」

うつ。

確かに使用人に敬語を使う姿を他の貴族に見せるのはまずい。アスターにつられていつも通りに喋ってしまったが、メイドさんも氣を悪くした様子はない事だし、素のままでいた方がよさそうだ。

「でも賢者は言い過ぎ。馬鹿にされている気がする」

「馬鹿にはしていないよ。知るはずの事を知っているんだから、賢者様だろ？」

「ごめん。……賢者ってどういう意味？」

もしかしたら私は何か勘違いしているのだろうか。賢い人という意味で、賢者だと思ったが、ニュアンスが違うそうだ。私は誰かに言葉を教えてもらった事がないので、間違えている可能性もある。

「賢者は火を触らずして熱いと知る者、愚者は火で火傷して熱いと知る者。つまり知るはずのない事を知っている者の事を賢者と言つんだよ」

ああ。それならば、納得できる。異界の知識といつ知るはずのない者を知っているから、賢者と呼んだのだろう。

魔術師に賢いと言われるのは、正直子供だから馬鹿にしているのかと思っていた。ちょっと心の中で謝罪しておく。

「だからオクトは、俺の可愛い賢者様っていうわけ」

「……可愛いではない」

「可愛い、可愛い」

やつぱり馬鹿にしているだろ、コイツ。

ぐりぐりと頭を撫ぜられながら、私は憮然とした表情をした。でもその手は、それほど嫌だとは感じなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6788x/>

---

ものぐさな賢者

2011年11月27日20時31分発行